

<日本の真相 4>

2010年4月30日に、三度目の籠神社訪問をすることができた。これは前年に、これまでにまとめた資料を持参したところ、幸運にも宮司様が出てこられ、名刺まで頂戴し、ご縁ができたからである。今回は、これまでの資料をどこまで読まれているのか、また、海部氏・尾張氏の真相と卑弥呼の真相などについて確認できたら、と思い、事前に電話で連絡してご都合をお聞きし、それに合わせて訪問したのである。

電話ではお顔を拝見できない上、礼を失しては二度とお会いして頂けないと思うと、とても緊張した。何しろ物部氏のトップだから、歴史の歯車がちょっとずれていたら、この方々が天皇家となっていたのである！しかし、こちらも名刺を渡してあり、今年に入ってから資料をお送りしたことから覚えておいで、まずは一安心。何と、それから20分ほどもお話した。その中で、今年の11月にイスラエルのアミシャブが来日するが、そのような組織のことを知っているか、と尋ねられた。その組織はエルサレムに第三神殿を建造しようとしている連中で、世界中に散った十支族を探し回っていること、そのためには手段を選ばない危険な連中であることを申し上げた。その来日の目的は、日本とイスラエルの関係を論じるセミナーであり、海部宮司に参加の要請がきているとのこと。しかし、宮司様は、気が進まない、と言われたので、でしたら止められた方がよろしいのでは、と申し上げておいた。

さて、当日は午後1時頃とのお約束だった。観光地だというのに、ネクタイまでしての格好。11:30に天橋立駅に着き、そこからフェリーで対岸に渡り、まずは奥宮に参拝。それから本殿に参拝した後、若い神職に参拝の目的を告げると、社務所に通された。真新しい社務所は木の香りが清々しいが、宮司様が来られるまでの時間が何と長く感じられたことか。

いよいよ戸が開けられ、宮司様の姿を拝見すると、緊張はピークに。「本日は貴重なお時間を割いて頂き、まことに有り難く存じます」とご挨拶すると、昨年の件や、あれからまた新たな発見はあったか、など述べられ、ようやく対談に。とはいっても、こちらから一方的に質問していくのは失礼なので、話の流れの中で、聴けることだけを聴く、という姿勢で臨んだ。

まず解ったことは、やはりここにはいろいろな(変な)人から様々な資料などが届き、読んでいる時間が無い、とのこと。ということで、話の中心は自ずとシュメールとなり、それに付随していろいろお尋ねする、ということになった。そもそも、ユダヤやキリストとの関係だけの話なら、お会いしてはくれなかったのだから、やむを得ない。本当は、以下に挙げる事項を確認したかった。

- ・海部氏・尾張氏はエフライム族である。
- ・エフライム族は徐福渡来以前に渡来し、フェニックスによる不老不死伝説が出来上がっていた。
- ・海の奥宮には、何があるのか。

- ・海部氏の秘宝、息津鏡・辺津鏡は卑弥呼が神事で使っていた鏡である。また、八咫鏡の原型でもあり、「合わせ鏡」の奥義も示している。
- ・阿波忌部氏はエフライム族と共に渡来したレビ族である。
- ・大山祇神社は籠神社の別形態である。
- ・元々籠神社にあった天御量柱はどのようなものなのか。
- ・八咫鳥という組織は、本当はどのような組織なのか。

しかし、やはり立場上、日本の歴史に関する真相をずばり述べることはできないようなので、何とか近付けつつ、それとなく伺う、という対談となった。以下、伺えた内容を示す。

(1) 飛鳥氏について

まとめた資料は飛鳥氏の著書を基に、矛盾無く、辻褄が合うかどうか検討したもの、ということは言うてあったので、まずは飛鳥氏の話となった。

飛鳥氏の言っていることは半分ぐらいは合っているが、それ以上はダメ、とのこと。売るために、あるいは自分（モルモン教）にとって都合の良いように書かれている、と。そして、心御柱をキリストの十字架などにしている、と。

えっ！？心御柱は十字架ではないのか？ならば、何なのだ？しかし、心御柱の奥義などは辻褄が合っているし、かごめ歌もそれを暗示している。どういうことなのだろう、と考えあぐねていた。

しかし、いろいろ伺っていると、どうやら他の連中と同じように聖書を絶対視して、それ以前の基となっているシュメールを無視していることを意味しているようであった。というのも、現在は絶版となっている飛鳥氏の神宮に関する著書に対して、ここまで踏み込んだことをよく言えましたね、などとおっしゃっていたのである。その著書は、神宮に封印されている契約の箱について書かれている。

また、前述のアミシャブの来日は飛鳥氏主催に依るものである。そこで、「彼はアミシャブの連中に、神宮に契約の箱などがあることを知らせていますよ。第三神殿には絶対に契約の箱が必要ですから、極めて危険ですよ」と申し上げると、

「だからこそ、あのような会には出たくない。断りの手紙を書いておいた」と言われた。

「そうですよね、宮司様の発言を都合のいいように解釈されたり、あるいは誘導尋問があるかもしれませんしね。断られて良かったかと」と申し上げた。

つまり、契約の箱などが存在することを、暗に認められたことになる。ただし、契約の箱などの原型が何なのか、そこまで知りえなければ無意味だ、ということ宮司様はおっしゃりたいのであろう。

なお、このセミナーに限らず、宮津で開催されたセミナーにも呼ばれたそうである。しかし、本人たちが来て直接交渉するのではなく、単に手紙で案内が送られてきて、しかも、宮司様が参加することが前提となったプログラムまで

付いていたとのこと。(実際に見せて頂いた。)参加されなかったことは言うまでも無い。失礼極まりない。

(2) 中丸薫氏について

飛鳥氏だけではなく、最近では経営コンサルタントで有名な船井幸雄氏もいろいろと言っているので、氏についての話が宮司様からなされた。船井氏の膨大な著作などは認められたものの、ありもしないフォトンベルトなどを言っているようでは、と言われた。

そこで、船井氏は単に飛鳥氏の著書を基にしているだけのこと、最近では中丸薫氏とも協力してフォトンベルトなどを触れ回っており、まったく話にならないことを述べた。そして、良い機会と思い、中丸氏について尋ねた。中丸氏は以前に籠神社を訪れているし、また世界の裏事情について話しているが、それはいろいろな著書を参考しているだけのこと。それに、籠神社訪問も、銀河連盟のクエンティンなる宇宙人に導かれてのことだとか。

「明治天皇の孫と自称していますが、そんなことがあり得るのですか」

「数年前に、正式に宮内庁が否定した。私は完全に彼女をシャットアウトしている」

「やはり、そうでしたか。私はあの人の講演会に行ったことがあります、アマテラスの生まれ変わりだとも言っていますね。とんでもないことです。それに、どうも北朝鮮系のようですし」

「彼女は“太陽の会”なるものを主催しているが、その会員からもいろいろ送られてくる。しかし、彼女が信じられているのは極めて危険である」

このような感じで、中丸氏が明治天皇の孫などというのは完全な戯言であることが裏付けられた。なお、ここで皇室に関する闇の部分とでも言うべき話を伺うことができたので紹介する。

- ・大正天皇は精神障害だったという通説があるが、まったく逆で、大変聡明であられた。そのような通説が何らかの理由により流布された。
- ・大正天皇には公開されていない娘がおられ、籠神社に来られたこともある。ある伝により、皇居内には出入りが自由だったとのこと。(平成 23 年に「天皇家の隠し子 (河原敏明著、ダイナミックセラーズ出版)」が出版され、三笠宮殿下の双子の妹であることが判明した。)
- ・天皇家とて人間であるから、出産に関しては異常もある。そのような事態を“適切に処理”する組織がある。

このような伝や組織は、やはり八咫鳥のことを暗示しているのだろう。

(3) 八咫鳥について

八咫鳥という組織は本当に存在するのか尋ねたところ、飛鳥氏の言うように名前も戸籍も無い、などという状態は現在では不可能である、と言われた。しかし、必ずしもこの言葉が存在を否定しているわけではない。前述のような伝

や組織が確実に存在し、しかも籠神社奥宮にあった六芒星は某筋から圧力が掛かって三つ巴紋に替えられてしまった事実からすると、やはり確実に存在する。「まあ、そのような状態は現在では無理ですから、表向きは普通の人でも、裏でそのような組織を形成し、そこでは一人一人に名は無い、ということではないでしょうか」

「そのようにも考えられる。飛鳥氏に依ると七十数名、とかいうことだが…」

「72人らしいですね」

ということなので、やはりそのような組織として存在するのだろう。

(4) 秦氏との関係について

今回の新たな発見（今年に入ってからお送りした資料）には、邪馬台国の真意があります、ということをお知らせすると、古代についての話となった。

かつて、海部一族はどこからなのかは良く解らないが、とにかくまずは丹後地方にやって来た。その後、琵琶湖を渡って近江へ至り、更に現在の京都市から木津川を上って後の大和となる地へと至ったという。

ここで、驚くべき証言が得られた。三柱鳥居で有名な木嶋坐天照御魂神社（通称“蚕の社”）と広隆寺を含む太秦一帯は海部氏が治めていたという！思わず、「ええっ!？」と漏らしてしまった。ここは秦氏の奥義である三柱鳥居が存在し、秦河勝が建立したと言われる広隆寺にはイエスをモデルとした聖徳太子が祀られ、てっきり秦氏による治水工事により京都の基礎ができた後、秦氏の中の秦氏であるカモ氏が治めていた（現在も治めている）場所だと思っていた。そこで、

「あの一帯はカモ氏が治めているのでは？」

とお尋ねすると、

「カモ氏は同族である！上賀茂の賀茂別雷神はこちらの彦火明命と異名同神という極秘伝がある。山科も、である」

と言われた。確かにそうであり、そのことは知っていた。（＜日本の真相＞に記載。）しかし、この極秘伝はあくまでも多次元同時存在の法則でそうなっているだけであり、上賀茂は下鴨と同様、秦氏の中の秦氏だから、これは籠神社とは関係無いこと、秦氏による真相封印策、と思い込んでいた。だが、考えてみると、上賀茂の本当の御神体は裏にある神山（こうやま）という山であり、籠神社奥宮の本来の御神体も天香語山（あめのかごやま）という山である。そして、邪馬台国の時代から存在すると思われる海部氏・尾張氏の大神神社にも本殿は無く、三輪山が御神体である。そうすると、いずれも山を本来の御神体とするという点で共通している。ならば、下鴨も同族なのか、という疑問が発生する。そこで、カモ氏について調べてみると、カモ氏には数系統存在することが判明した。（以下、Wikipedia 参照。）

山城国葛野の賀茂県主は、大和国葛城の地祇系賀茂氏が山城に進出したものとする説がある。城国風土記逸文では、賀茂県主の祖の賀茂建角身命は神武天皇の先導をした後、大和の葛城を通して山城国へ至ったとしている。しかし、鴨氏始祖伝では鴨氏には複数あり、葛城と葛野の賀茂氏は別の氏族であるとしている。また、出雲風土記では意宇郡舎人郷・賀茂神戸とあり、また現在の島

根県安来市には賀茂神社があり、祖神である一言主の同一神、言代主の活躍地である東部出雲に属することから、ここを本貫とする説もある。

・天神系（賀茂県主）

八咫鳥に化身して神武天皇を導いたとされる賀茂建角身命を始祖とする天神系氏族。代々賀茂神社に奉斎し、山城国葛野郡・愛宕郡を支配した。子孫は上賀茂・下鴨の両神社の神官となった。また、賀茂県主は同じ山城国を本拠とする秦氏との関係が深い。有名な鴨長明は下鴨の社家、賀茂真淵は上賀茂の社家である。

・地祇系（三輪氏族）

地祇とは、天津神（＝天神）に対する大地の神、という意味である。大物主（三輪明神）の子である大田田根子（オオタタネコ）の孫、大鴨積を始祖とする三輪氏族に属する地祇系氏族。大和国葛上郡鴨（現在の奈良県御所市）を本拠地とする。大鴨積は鴨の地に事代主を祀った神社を建てたことから、賀茂君の姓を賜与された。なお、現在鴨の地にある高鴨神社の祭神である事代主や味鋤高彦根神（賀茂大御神）は賀茂氏が祀っていた神であると考えられている。姓は君であったが、壬申の乱の功臣である鴨蝦夷を出し、684年に朝臣姓を賜与された。

平安時代中期には陰陽博士の賀茂忠行を輩出し、その弟子である安倍晴明が興した安倍氏と並んで陰陽道の宗家となり、子孫は暦道を伝えた。賀茂忠行の子には、家業を継いだ賀茂保憲や儒学者に転じた慶滋保胤がいる。

・備前鴨（加茂）氏

平城京跡出土の木簡（735年から747年までの間の木の札）に、「備前国児嶋郡賀茂郷・鴨直君麻呂調塩三斗」と墨で書かれたものがある。賀茂郷の鴨の君麻呂という豪族が、三斗という大量の塩を奈良に送っており、鴨神社の荘園の預り主であったということが窺える。なお、当時の賀茂郷が現在の荘内と宇野・玉・日比・渋川までの範囲であり、南北共に海に面していた。当時の製塩土器である師楽式土器の分布状態から見ると、南岸で製塩されたものとされているが、下加茂村は北岸という地理的利便性から、こちら側でも製塩されたものと思われる。

この中で重要なのは天神系と地祇系である。天神系はまさに下鴨であるが、上賀茂も同様とは言えない。というのも、上賀茂神社の近くには大田田根子に関係があると言われる大田神社がある。ここの祭神は天鈿女命であり、原型はイナンナであり、イナンナはまたスサノオの原型でもあり、スサノオは物部氏の象徴である。よって、スサノオ系を祀るということで、物部系であることを象徴している。その物部氏のトップは海部氏・尾張氏である。そもそも、大田田根子は最古の神社で元々海部氏・尾張氏の神殿でもある大神神社の祭神、大物主神の子だから、海部氏・尾張氏とは極めて関係が深いことを暗示している。

地祇系の三輪（大神、大三輪）氏とは、大神神社を祀る大和国磯城地方の氏

族であり、大物主神の後裔として同神の祭祀を司る有力氏族である。新撰姓氏録・大和国神別の大神朝臣条に依れば、三輪氏はスサノオ 6 世孫の大国主の後裔とする。よって、物部氏である。

日本書紀に依ると、585 年 6 月、三輪逆（ミワノサカウ）は排仏派として物部守屋・中臣磐余（ナカトミノイワレ）と寺塔を焼き仏像を捨てることを企てており、これも物部氏である。

また、大神神社では大物主神＝大国主神が祀られている。日本書紀に依るとスサノオの息子であるが、古事記や日本書紀の一書、新撰姓氏録に依ればスサノオの 6 世の孫、また日本書紀の別の一書には 7 世の孫などとされており、どれが真相なのかは極めて解りにくい。しかし、多次元同時存在の法則からすれば、どれも同一でスサノオに帰属される物部氏の神である。この大物主神は少彦名神（スクナヒコナノカミ）と協力して天下を治め、まじない、医薬などを教え、葦原中国の国作りを完成させた。（Wikipedia 参照。）渡来してまじないや医薬を教えたのは徐福の性質と一致し、徐福一団は物部氏となったので、この話は海部氏・尾張氏と徐福（＝少彦名神）一団が友好を結んで物部氏となり、日本＝ヤマトの根幹を築き上げたことの象徴である。その後、国土を天孫ニニギに譲って杵築（きづき）の地に隠退し、大国主神として出雲大社の祭神となったが、古事記ではニニギに国を譲ったのはニギハヤヒであり、ニギハヤヒは物部氏の祖とされているから、大物主神は結局、物部氏の祖神である。つまり、新たに渡来してきた秦氏一団＝天孫ニニギに物部氏が国を譲った（譲らされた）、ということの象徴である。

なお、大物主神は蛇神であり、水神でもあるからエンキそのものである。また、雷神としての性格も有するが、これはヤハウエ＝ヤーの性格でもあり、籠神社の祀る海神はヤーであるという極秘伝と一致する。これからも、大物主神は元々海部氏・尾張氏の主神である。それに、大神神社の撰社である檜原神社は天照大神を初めて宮中の外に祀った倭笠縫邑の地であると伝えられ、元伊勢の 1 つとなっている。つまり、内宮の元伊勢第一号が海部氏・尾張氏の主神を祀る大神神社の撰社ということである。対して外宮の元伊勢は唯一、籠神社だけであるが、元伊勢がいずれも海部氏・尾張氏に関わるということは、海部氏・尾張氏こそがヤマトの基礎を造っていたことの暗示である。神宮は日本で最高の格式を誇る宮であるが、それは大神神社が古代日本に於ける最初の神社であり、そこからすべてが始まった、ということを示していることにもなる。

このように見てくると、以下のように考えられる。上賀茂はやはり海部宮司の言われるように海部氏・尾張氏と同族の賀茂氏（物部氏）であり、山城国葛野を治めていた。後に神武＝応神天皇率いる鴨氏（秦氏）が海部氏・尾張氏の治めていたヤマト（大和朝廷が成立する前なので“ヤマト”とする）を譲り受け（奪い取り）、北上して山城国葛野に至り、鴨氏が賀茂氏に取って代わった、ということである。だから、鴨氏は賀茂氏の祖神として上賀茂神社の御祖たる賀茂御祖神社＝下鴨神社を建立し、自らの拠点としたのである。“カモ”が“賀茂”と“鴨”で区別されている真意は、そういうことであろう。

確かに、蚕の社の主祭神は天之御中主神で籠神社と同じである。そして、その三柱鳥居は“元糺の森”に存在するが、“現在の糺の森”は下鴨神社にあることは、本来の糺の森並びにその社を下鴨が封じたことを意味している。それに、賀茂神社は実は上賀茂、下鴨、河合神社で構成され、現在は下鴨が中心であり、河合神社は封じられている。そして、賀茂と伊勢は表裏一体。現在の伊勢の中心は内宮であり、伊雑宮が封じられていることから、上賀茂は外宮に相当する。外宮の元伊勢は唯一、籠神社だから、上賀茂は籠神社を象徴している。

また、京都で最も重要なお祭りは葵祭であり、上賀茂では御阿礼（みあれ）神事が、下鴨では御蔭（みかげ）祭が行われるが、実は籠神社でも賀茂に先立って葵祭が行われる。賀茂社では祭員が冠に葵の葉を付けるのに対し、籠神社では豊受大神縁の藤の花を挿す。籠神社での葵祭は御生れ（みあれ）の神事であり、これは名称的に上賀茂と一致する。よって、最も重要なお祭りから見ても、上賀茂の賀茂氏は海部氏・尾張氏と同族と言える。しかし、葵祭を実質取り仕切るのは下鴨だから、これも葵祭を鴨氏が取って代わったということを暗示しているのである。

なお、藤は“不死”に通じ、“不死”とは“再生、復活”のことでもある。それが“御生れ＝みあれ＝みうまれ”ということで象徴されている。しかし、籠神社の海部氏はイエス生誕以前に渡来しているから、イエスの予型とも言えるが、それ以上の意味があるだろう。シュメールである。“不死の力”を得たと考えたのはイナンナであり、イナンナを象徴するフェニックスこそが徐福渡来以前の日本の地に於ける不老不死伝説となったことは、＜日本の真相3＞で記した。つまり、海部氏・尾張氏はシュメールの真相まで知った上で、イエスの奥義を司る秦氏渡来以前から、このような不死＝藤の祭りを行っていたのである。

(5)海部氏・尾張氏の祖先と大嘗祭の秘儀

蚕の社と広隆寺を含む太秦一帯は海部氏・尾張氏が治めていたわけだが、今ひとつ腑に落ちない顔をしていたためだろうか、この一帯に関する重要事項を教えて頂いた。

中心となる広隆寺では、牛追い祭りという変わった祭りが行われる、ということは承知していた。ただ牛を追いやるのだ、と言われたが、これは物部氏の“物”という字が“牛に勿かれ”と書くことに、意味が隠されていると考えられる。その牛の候補としては、以下のものが挙げられる。

・偶像崇拝の対象たる金の牡牛

金の牡牛と言えば、モーゼがシナイ山で十戒を授かっている最中、ヘブライの民は待ちきれずに金の牡牛像を造って偶像崇拝を始め、モーゼと主の怒りを買った事件が有名である。物部氏は偶像崇拝が原因となって散った支族だから、このような戒めの祭りがあるのかもしれない。

・エンリル系

エンリル（あるいはエンリル系の「神々」）は牡牛として象徴される。籠神社の本来の祭神、海神ヤーは海神であり、月神であり、水神であり、蛇神でもあ

るが、これらの性質をすべて兼ね備えているのはエンキである。エンリルとエンキはいつも対立していたが、それは蛇と牛の闘いで象徴される。つまり、牛を追いやるのは蛇神、エンキ＝海神ヤーである。

・シヴァ＝イナンナ＝牛頭天王＝スサノオ

海部氏はスサノオとして陥れられた。現在、広隆寺は秦氏の拠点とされているが、前述のように、広隆寺を含む太秦一帯は海部氏が治めていた。故に、追いやられる牛は、海部氏の象徴である。

広隆寺の近くにある大酒神社はダビデを象徴しているとも言われている、とかなり断定的に海部宮司は言われたので、やはり大酒の元字は大辟＝大關でダビデの意味なのである。つまり、牛追い祭りと大酒神社の話により、自分たちがイスラエルの支族であることを、偶像崇拜により世界に散ってしまった北イスラエルの失われた十支族であることを、暗に認められたのである。

また、広隆寺には聖徳太子像がある。

「聖徳太子は現在では存在が疑われているが、いずれにせよ、厩戸皇子という名前や逸話が示しているように、イエスがモデルであるとも言われている」と言われた。つまり、それとなく聖徳太子のモデルがイエスであることを仄めかされたのである。そして何と、

「大嘗祭で陛下が着られた服は、最後にこの聖徳太子像に着せられる」と言われた。大嘗祭では皇太子殿下が白装束＝死に装束である匳服（あらたえ）を着て、天照大神と共に食事をし、真床御襖（まどこおふすま）と言われる寝床に横になり、また起き上がることにより天皇陛下となる。すなわち、これまでの検討では、大嘗祭とは“最後の晚餐”“死”“復活”を再現することによりイエス・キリストの霊と一体となり、正式に王権を継承する儀式と見なしている。（＜日本の真相＞参照。）イエスは磔刑で裸にされたが、大嘗祭で使われた匳服が最後にイエスを象徴する聖徳太子像に着せられるということは、イエスの御霊が遷された服をイエスに戻して着せることを象徴しているのである。（なお、この匳服は阿波忌部氏たる三木氏が中心となって作られることは承知であるが、材料は大麻である。大麻は縊ると切れてしまうので、穢れ無き乙女が唾で濡らしながら紡ぐ、と海部宮司は言われた。）

そして、この地をイエスの奥義が伝来する以前から元々海部氏・尾張氏が治めていたということは、更にその裏がある。大嘗祭は言わば復活祭であり、先ほどの“御生れ”でもある。つまり、イナンナを基とした不老不死伝説こそ、イエスの話の根源、ということも示唆しているのである。

(6) 大山祇神社

阿波忌部氏の話が出たところで、
「同じ四国にあり、昨年宮司様が重要だと言われた大山祇神社は、祭神の構造からして籠神社の別形態と考えます」と述べたところ、

「(籠神社の御祭神)彦火明命の母は高御産巢日神の娘、萬幡豊秋津師比売命(ヨロヅハタトヨアキツシヒメノミコト)とも言われており、大山祇神の娘とも言われている」
と言われた。

確かに神話上では、萬幡豊秋津師比売命は高御産巢日神の娘で、天照大神の子の天忍穗耳命と結婚し、天火明命とニギハヤヒを産んだことになっている。天火明命とはすなわち、彦火明命=ニギハヤヒのことである。

ここで、籠神社の極秘伝では彦火明命=賀茂別雷命であるが、山城国風土記の“丹塗り矢伝説”に依ると、賀茂別雷命の母は真っ赤な丹塗り矢により懐妊した玉依姫である。古事記での“丹塗り矢伝説”に依ると、丹塗り矢で懐妊したのは三島湊咋(ミシマノミゾクヒ)の娘、勢夜陀多良比売(セヤダタラヒメ)であるから、玉依姫=勢夜陀多良比売となり、その父は三島湊咋である。

実は、大山祇神社は愛媛県今治市の大三島にあり、全国の三島神社の総本社であることから、三島湊咋が大山祇神を象徴しているのである。つまり、玉依姫=勢夜陀多良比売は大山祇神の娘、ということになる。これも、籠神社の極秘伝「彦火明命=賀茂別雷命」があつてこそ理解可能である。

ちなみに、玉依姫の父は八咫鳥にして賀茂氏の祖、賀茂建角身命(カモタケツヌミノミコト)であるが、母は丹波の国の伊可古夜比売(イカコヤヒメ)である。丹波は海部氏の地、八咫鳥は秦氏だから、この話にも、海部氏が秦氏に抑えられたことが暗示されている。

(7) 息津鏡・辺津鏡と卑弥呼

古代の話の続きで、籠神社の秘宝、息津鏡・辺津鏡は卑弥呼が神事で使っていた鏡では、と尋ねたところ、笑みを漏らされ、直接の答えは無かった。しかし、邪馬台国についての話があつた。

「現在、卑弥呼の墓ではないかと言われている箸墓古墳は、実は卑弥呼の後を継いだトヨの墓であり、卑弥呼の墓は天皇陵とされているどこかではないか、という説が有力である」

と言われた。天皇陵は明治以前も不明なものが数多く存在し、明治になってから、不明な墓陵に適当に天皇を当てはめたいらしい。その中の1つが卑弥呼の墓ではないか、ということである。しかし、卑弥呼は海部氏・尾張氏の女王だから、知っているが言えない、ということである。

「だが、纏向遺跡は重要である」

と海部宮司は言われた。やはり、<日本の真相3>で推定した纏向遺跡の重要性は正しかったのである。

「現在、神社の拝殿の多くが南北を向いているが、これは支那の道教の影響である」

と続けられた。それ以前のヤマトでは、日が昇る東西方向が基本だったという。確かに、纏向で見つかった神殿跡は東西を向いており、海部宮司の言われたことと辻褃が合う。つまり、秦氏により、南北方向が主流とされたのであり、その要となる神社は言うまでも無く伊勢神宮である。

元々が日の昇る東向きであり、後に南北方向に替えられた、ということは、実は<日本の真相 2>の(7)で記した。それは、尾張氏の神殿である熱田神宮の本殿と別宮は南向きであるが、別宮と同じ境内にある上知我麻神社と大国主社、事代主社は東向きである。そして、本殿には尾張氏の祖である建稲種命（タケイナダネノミコト）と宮簀媛命（ミヤズヒメノミコト）が相殿神として祀られているが、上知我麻神社にはこの二方の父である乎止與命（オトヨノミコト）が祀られている。つまり、乎止與命が祀られている上知我麻神社の方が、尾張氏の神殿建築を表していることになり、海部宮司の言われたことと矛盾しない。そして、この東向きの原型はピラミッドである。更に、

「纏向では建物の中心を柱が貫く構造であり、伊勢の神宮などとは異なる構造ですが、同じ構造なのが太古の出雲大社です」

と述べると、

「太古の出雲大社で重要なのは中心を貫く宇豆柱である」

と言われた。これは、宇豆＝ウズ＝ウジ＝ウツで、シュメールの太陽神ウツに因んでおり、それに気付かなければならない、ということである。宮司様はしばしばウツについて話されるので、極めて重要である。そして、これは心御柱のことであり、「生命の樹」のカッパーラが秦氏によるだけではなく、秦氏渡来以前から物部氏も知っていた、ということに他ならない。海部氏・尾張氏に同行していた祭司支族は当然、カッパーラを知っていたらろうし、後に合流した徐福は方士＝道教の使い手＝カッパーラの使い手だったから、ある意味、当然ではある。なお、

「息津鏡・辺津鏡は見る人が見れば何か解る」

と言われたので、

「それは八咫鏡の原型であり、「合わせ鏡」でもありますね」

と述べると、否定も肯定もされなかった。つまり、八咫鏡は大きさの異なる一組の青銅鏡であり、形状と大きさは息津鏡・辺津鏡と同じなのである。

(8)天御量柱とイナンナ

心御柱の話が出たので、

「こちらにも天御量柱がありますね」

と申し上げたところ、

「現在は形だけである。神宮でも、見えないようにしてあるのだろう」

「はい、真榊で覆い、更にかわらけ（皿状土器）で覆われていると聞いております」

「現在では本殿でお祭りをするが、こちらでもかつては御柱を見上げる形で行っていた」

「神宮の庭上祭祀と同じですね。柱こそが本来の御神体ですからね」

「天御量柱の長さは、時の天皇様の背丈と同じ長さだったという。これは、極めて象徴的である」

何と、籠神社にあった天御量柱の長さは、時の天皇の背丈と同じだった！現在、神宮の心御柱の別名が天御柱、忌柱、天御量柱であり、神宮の（御敷地に打ち込まれている）心御柱の長さは五尺二寸の約 156cm だから、これが時の天

皇の背丈なのである。では、“時の天皇”とは誰なのか。可能性としては、初代天皇である応神天皇と、新生伊勢神宮創建時の天武天皇である。

心御柱は「生命の樹」の奥義と地下に存在する本物の御神体を暗示するものであり、それは聖十字架を象徴している（はずである）。その心御柱が、ヤマトの地に初めて到達した地が籠神社である。それまでは原始キリスト教ではなく、ユダヤ教だった。原始キリスト教への改宗は、渡来した秦氏一団によって成された。それは、実際にイエスが光り輝く金鷄として降臨したのかもしれないが、何よりも、心御柱が実在していたからだろう。そして、ヤマトすべてが原始キリスト教に改宗した後、初代天皇として即位したのが神武＝応神天皇である。よって、“時の天皇”とは、初代天皇たる神武＝応神天皇のことである。応神天皇は海部氏・尾張氏に婿入りしていたから、海部氏・尾張氏の大王でもあり、心御柱に象徴される“時の天皇”に相応しい。

地上に打ち込まれている心御柱は、地下にある本物の代用である。心御柱を見上げて行われる庭上祭祀は、地下にある本物に対する代用の祭祀として行われるわけだが、それはとりもなおさず、初代天皇を拝して行う祭祀ということにもなる。天皇はイエスから王権を授けられた存在だから、庭上祭祀は地下のイエスに関わる御神体と、イエスから王権を授けられた地上の存在に対して行う祭祀ということである。

その後、岡野玲子さんという漫画家の話となった。名前は知らなかったが、以前「陰陽師」で一世を風靡したということなので、そのことは知っていた。彼女は手塚治氏の息子、真（まこと）氏の妻だそうで、籠神社を度々訪れ、宮司様とお話されているという。そこで、宮司様が「陰陽師」と最新の漫画を持って来られた。それは「イナンナ」である！昨今のベリーダンス流行から、直感的に描いた作品という。

岡野さんに依ると、その根源がイナンナであるという。それは、正しいだろう。ベリーダンスは中東（現在はイスラム圏全体）の踊りで、踊りは神に捧げるものだから、基はアヌの前で歌い踊ったイナンナである。それを、どうやら直感として感じたらしい。宮司様も、ようやくこのような人が出てきたか、とお喜びであった。そこで、天御量柱にかこつけて申し上げた。

「イナンナこそ、柱＝アシラの原型です。アシラとはアシュラであり、イナンナのことです。イナンナは大神アヌの前で歌い、踊りました。それ故、天宇受売命の原型です。また、ヴィーナスもイナンナですが、聡明な知恵の神で美の女神でもあります。しかし、後に戦う女神にもなりました」

「さよう、天宇受売命である！」

「やはり、聖書だけでは限界があり、シュメールまで知らなければ原型が解りません」

「その通り。基となっているのは何なのか、それが重要である」

ここで、メソポタミアとシュメール研究で有名な三笠宮崇仁殿下の著書を持って来られ、知っているかどうか尋ねられた。

「殿下の著書はすべて持っております。シュメールの話をも聖書や宮中での御神事と比較されたりしており、ここまで言って良いものなのか、と思いました」

「殿下は良くご存知である。かなりご高齢なので、せめて、ご存命中に一言でも公の場で言われれば。あるいは、然るべきお方から…」

「もしこの漫画が映画化されたりしたら、それこそ、シュメールが注目されるのではないのでしょうか」

「そうなると良いが。それにしても、イラクでは米軍によっていろいろ持ち出されたという。極めて残念なことである」

「実は、あの戦争はそれが目的だったのです。シュメールに関する資料を根こそぎ持ち出すことだったのです。真相を知られてはマズイ連中、それが世界を裏から操っている連中です」

宮司様は、女性の感受性や靈感は馬鹿にできず、月ともリンクしていることは自然の驚異である、などと述べられた。ということは、そのような性質の卑弥呼が、自分たちの女王だったことを暗に認められていることになる。

(9) 田道間守

イナンナこそが不老不死の話の原型となっている。そこで、
「徐福一団が渡来する前のヤマトに於ける不老不死伝説は、フェニックスに由来するフェニキアから渡来した人たちが基になっていると思われます」と申し上げると、それに対するコメントは無かったが、飛鳥氏の著書にあったように、やはり田道間守の話を持ち出された。田道間守については<日本の真相 3>で記した。

- ・第11代・垂仁天皇の時代、常世の国に不老不死の妙薬である非時香果を探しに行った田道間守は、10年掛けて葉付きの枝と果実付きの枝を日本に持ち帰って来たが、垂仁天皇は既に崩御していた。田道間守は半分を垂仁天皇の皇后に献上し、残りを垂仁天皇の御陵に捧げ、悲しみのあまり泣き叫びながら亡くなったという。

この中で、田道間守が天皇の墓まで行って泣いたことは非常に重要な示唆である、と言われた。これは、何を示唆しているのか。

世界中の不老不死の妙薬伝説は、すべてギルガメッシュ叙事詩が基になっている、ということである。ギルガメッシュ叙事詩の真相については<神々の真相 1>で記した。

- ・太陽神ウツの曾孫バンダはエンリルの種子である女神ニンズンを妻とし、息子ギルガメッシュをもうけた。彼はバンダの跡を継いでウルクの王座に就いたが、アヌンナキの子孫なのに死んでしまった祖先について彼はいぶかしがり、長寿を求めて“着陸場所”へと旅した。その際、ウツが神託で彼の進み具合を監視した。最終的に、ニビルの長寿を求めて“二輪戦車の場所”へ向かうことをウツから許可された。“二輪戦車の場所”に辿り着くと、彼はジウストラと会った。ジウストラは大洪水について話し、長寿の秘密も教えた。庭の井戸に、ある植物が生えていて、それがジウストラと配偶者の寿命を長

くしていたのである。

ジウストラが寝てしまうと、ギルガメッシュは自分の足に石を結び付けて井戸に飛び込み、その植物を引き抜いた。そして、その植物を入れた鞆を持って、急いでウヌグ・キへと引き返した。途中、彼が疲れて寝ていると、その植物の芳香に蛇が惹きつけられた。その蛇が植物を奪い、どこかへ消えてしまった。朝になってギルガメッシュが気付くと、彼は座って泣いた。そして、手ぶらでウヌグ・キに戻り、死すべき運命の人間として、そこで死んだ。

ギルガメッシュ叙事詩では結局、不老不死の妙薬を持ち帰ることはできなかった。そのため、彼は泣いた。田道間守の話では、不老不死の妙薬である非時香果を結果的に入手できずに崩御された垂仁天皇と、不老不死の妙薬を求めて旅に出た田道間守にギルガメッシュの姿が投影されている。

葉付きの枝は「生命の樹」を象徴し、果実付きの枝は「生命の樹」に生る実だから、知恵を悟ることの象徴である。カッパーラに於ける不老不死とは、「生命の樹」の知恵を悟ることに他ならない。「生命の樹」のセフィラは10個、隠されたダアトを含めると11個であるが、それが田道間守の話の“10年”“第11代”で象徴されている。つまり、田道間守の話は、ギルガメッシュ叙事詩が基になっていることを暗示し、それは「生命の樹」の知恵を悟ることを象徴したカッパーラに他ならない。

また、尾張氏の末裔は現在、田島姓や馬場姓を名乗っている。田道間守は読み方によっては“たじまのかみ”だから、不老不死伝説に尾張氏＝海部氏が関係していることを暗示している。実は、この田島という姓は、海部氏に関係が深い。現在の海部氏は丹後地方だけだが、かつては丹波一帯を治めていた。＜日本の真相3＞で記したように、かつて丹波を中心にして近江や出雲を含む広大な地域を支配していたのが、魏志倭人伝に記された投馬（とうま）国であったが、海部宮司の父、海部毅定氏の著書「元初の最高神と大和朝廷の元始（桜楓社）」に依ると、現在の丹波地方にある但馬は“たんば”とも読め、丹波は“但波”とも書くことから、“丹波”と“但馬”は同義であるという。つまり、海部氏が治めていた丹波地方は投馬国と言われており、それが転じて“但馬”となり、“但馬＝田島＝田道間”となり、“たじま”は直接的に海部氏をも暗示しているのである。

他にも、海部毅定氏は“魏使は投馬国を経て敦賀へ上陸し、近江を経て大和へ入ったのではなかろうか”と推測されているが、これは(4)で記した海部氏・尾張氏の移動経路と同じであり、更に＜日本の真相3＞に記したように、徐福の移動経路とも一致しており、よって、徐福らが聞いていた不老不死伝説は海部氏・尾張氏一族の伝説に他ならないと言える。また、魏使の移動経路は当然のことながら、当時のヤマトの政治権力の中枢部に沿ってのことだから、海部氏・尾張氏が最高権力者であり、これは邪馬台国の時代のことだから、海部氏・尾張氏が邪馬台国の王族だったという裏付けになる。なお、海部毅定氏は著書の中で、邪馬台国を“やまとのくに”と読まれているので、邪馬台国が奈良にあったことは間違いない。

なお、シュメールの話としては前述の通りだが、ギルガメッシュについては更に興味深い事実がある。大洪水後に最初に王権が始まったのはキシュだったが、イナンナの野望によってウルクに移された。ギルガメッシュの冒険物語はおおよそ神々の真相 1>に記したが、すべてではない。ゼカリヤ・シッチン著の「神々・創造主の正体（徳間書店）」には更に詳しい状況が書かれていた。

ギルガメッシュとお供のエンキドゥが“神々の地”に辿り着く前、ギルガメッシュが水浴びしていると、その姿に欲情したイナンナがギルガメッシュを誘惑した。しかし、イナンナの浮名を知っていた彼は、早晩、彼女は自分を“足にまとわり付く靴”のように脱ぎ捨てるだろう、と言って、彼女が浮名を流した男たちの名を列挙し、彼女を拒絶した。この屈辱的拒絶に激高したイナンナは“天の牡牛”でギルガメッシュを打ち倒すよう、アヌに頼んだ。（“天の牡牛”が何なのかは不明だが、叙事詩の文章に依れば、金属でできた珍妙な機械装置で、30mmのラピスラズリで鑄造し、それぞれに指2本分の厚さのコーティングを施した2本の珍妙な穴開け器＝角を装備していたという。）しかし、彼らはこの“天の牡牛”を打ち砕いたので、イナンナは彼女の住まいで嘆き悲しんだという。つまり、ギルガメッシュの話にもイナンナが密接に関わっていたのである。だから、田道間守の話も、イナンナとの関わりを暗示しているのである。

(10) 陰の権力者

宮司様は、海部氏・尾張氏は権力に最後まで抵抗したので扱いが低い、とか、出雲などはすぐに従ったので格別の計らいを受けている、などと言われている。この場合の権力とは、古代の天皇は権威だけではなく権力も有していたので、古代天皇家のことを言われているのか、と思いがちである。しかし、現在の皇室に対してはそれなりの崇敬の念がおありのようで、では一体、物部氏から見て天皇家とはどのような存在なのか、という疑問が湧いてくる。古代に於いて、ヤマトの天皇家は物部氏の王家、すなわち、海部氏・尾張氏を基にしていることは籠神社の保有する系図から明らかであり、現皇室には海部氏・尾張氏の血も流れている。だから、天皇家に対する敵意とかライバル心というものではなからう。

海部宮司が度々口にされるのが“権力者”という言葉であるが、天皇家でないとしたら、八咫鳥なのか？ここで“中臣と天智天皇の関係”と言われた。これは当然、大化の改新のことを指している。また、現在の神道の御神事に於ける祓えの祝詞は中臣系祝詞であり、神道大祓全集にある「大祓詞（おおはらひのことば）」は括弧書きで「中臣祓」とある。つまり、神道の核を成す祝詞は中臣系のものなのである。実は、中臣鎌足については知っているようで、知らないことが多い。中臣氏は忌部氏と共に神事・祭祀を司った中央豪族で、古くから現在の京都市山科区中臣町付近の山階を拠点としていたとされている。そこで、調べてみると、鎌足について詳しく考察しているホームページがあった。この概要をまとめ、中臣氏について考察する。

(<http://homepage2.nifty.com/mononoke-kofun-room/HP/shiten2taika.htm> 参照。)

(a) 鎌足と中臣氏

①大化改新後、謀略をもって実権を掌握した中臣氏は極めて親百済的な政策を推し進めたことは有名だが、中臣氏の大和に於ける地盤である倉梯（くらはし）には、百済系渡来氏族のものと思われる墳墓が高密度に分布していることは、中臣氏の性格を考える上で考慮に値する。すなわち、継体（天皇）政権成立を機に歴史の表舞台に登場し、その勢力基盤に百済系渡来氏族を多く移住させた中臣氏自身も、元々は百済系の渡来氏族であった可能性が考えられる。

鎌足は自身の先祖を朴部であるとしており、日本書紀に依ると、蘇我・物部闘争の際、物部尾輿に組みして仏像を焼き捨てたとされる中臣鎌子に関連付けられている。しかし、学説的には中臣鎌子は後に藤原氏と名乗る中臣鎌足とは別系統であるとの考えが主流であり、鎌足が自身の出自を大和にしたいがために、大和の神官であった中臣氏の家系を篡奪したとの見方が一般的である。実際に、鎌足には神官としての性格が認められず、非常に早い時期に仏教に帰依している。更に日本書紀では、鎌足の父は美気子、母は大伴夫人とされているが、両者とも素性がはっきりしておらず、かなり曖昧な人物である。おそらく、新興の渡来氏族であった鎌足が、倭国に於いて神伎を司る由緒ある氏族に出自を繋げたいという意図から、他人の系図に入り込んだと思われる。

②奈良盆地北東部を支配した春日氏は和邇氏の支族であるが、そもそも奈良盆地東北部、春日から櫛本（いちのもと）にかけては和邇氏とその同族支族の勢力圏で、4世紀後期に奈良盆地の北辺にその主流が移動し春日氏を名乗ったと言われている。この時期に和邇氏が北に移動した理由として、木津川水系の水上交通がより重要となったためと考えられるが、これは山城や摂津、そして近江の勢力が力を蓄えてきたためと思われる。

③奈良盆地北辺は大和に於ける巨大古墳の密集地の1つで、佐紀山古墳群には全長200メートルを越える前方後円墳が幾つも存在している。その墳丘規模からしても、天皇家の外戚として権勢を振るった和邇氏の奥津城に相応しい。しかし、佐紀山古墳群を造営したと推測される春日氏は、河内王権の衰退と共に勢力が衰えたと思われ、この地域での大型古墳の造営は6世紀を待たずに終焉している。

また、布留の地に留まった和邇氏の本家も同様に没落したと推察される。その和邇氏に代わり、物部氏と大伴氏が進出したと思われるが、物部氏は現在の櫛本付近に、そして大伴氏は三輪山付近を基盤にしたと考えられる。櫛本付近は大和地域に於ける前方後円墳の分布中心の1つであるが、造営はやはり6世紀中期で終焉し、物部本宗家の滅亡と期を同じくする。その後の古墳群は前方後円墳と系譜的に異なるものと想定され、それまでとは異なる新勢力の入植を示唆すると考えられる。

④継体天皇崩御後、欽明を押ししたのは物部氏や蘇我氏と想定され、一方、安閑は主に木津川、淀川水系の勢力と近江勢力が後押ししていたのではないかと推察される。そして、この時点で中核となったのは、和邇（春日）氏、息長氏、

巨勢氏、そして中臣氏であったと推察される。

⑤中臣氏は天児屋根を祖とし、神伎を司る古い家柄であったことを主張しており、大和の神聖な地を確保することは積年の願望であったに違いない。このことから、中臣氏は一時宿敵である蘇我氏に加担、その見返りとして物部氏の支配する橿本の帰属を要求したことは充分考えられる。更に、春日社の創祀が藤原不比等によって開始されたことも明らかなので、この地域が中臣氏の勢力圏内であった可能性は高い。藤原不比等が主導した平城遷都の大きな理由は、この地域が藤原氏の重要な勢力基盤であったからで、中臣氏の大和におけるもう1つの拠点として奈良盆地東部の春日から橿本の地域と想定することができる。後に勃発する壬申の乱では、宇治から奈良山を経て上つ道沿いに三輪辺りまで至る地域は近江側が押さえており、箸墓古墳の南で大海人軍と戦闘している。これは、大和盆地北東の木津川への連絡口から山辺の道に沿って南下する一帯が中臣氏の勢力範囲であったため、と推測できる。

このように著者は推定しており、一般的な説から見ればかなり興味深いが、秦氏と物部氏の本質は外れており、以下のような誤りがある。

- ・鎌足登場以前は、ヤマトの地は和邇（春日）氏、息長氏、巨勢氏らによって統治されていた。これらの豪族はすべて物部氏であり、実質的には海部氏・尾張氏の支族である。②で述べている山城や摂津、近江の勢力こそが、海部氏・尾張氏の本体である。そして、中臣鎌足―不比等を指す中臣氏は秦氏である。
- ・前方後円墳を物部氏のものとしているが、前方後円墳は一時的な流行であり、その前後の時代は四角い方墳が圧倒的であること、古墳自体は物部氏に由来するものであることは<日本の真相3>で記した通りである。そのため、単純に古墳の形状と物部氏の没落とを関係付けることはできない。ただし、物部氏の権勢は6世紀中期以降、衰えている。

しかし、①と⑤で述べられていることは、大きなヒントとなる。それは、以下のことである。

- ・鎌足は百済系渡来氏族だった。
- ・鎌足は元々ヤマトの神官だった中臣氏の家系を篡奪した。鎌足には神官としての性格が認められず、非常に早い時期に仏教に帰依している。
- ・壬申の乱では、宇治から奈良山を経て上つ道沿いに三輪辺りまで至る地域は近江側が押さえており、箸墓古墳の南で大海人軍と戦闘している。

近畿～ヤマトは物部氏が治めていたが、そこに渡来系の新興勢力が入って来

た。彼らは秦氏であり、物部氏に取って代わった後、歴史の表舞台から姿を消した。その秦氏の表舞台の筆頭核は、記紀を編纂させ、神宮を現在の形に替えさせた藤原不比等であり、その親が鎌足である。となると、鎌足がすべての土台を築いていた、と考えるのが妥当である。記紀の真相も、物部氏の資料を没収して秦氏の歴史観を絡め、秦氏にとって都合の良い歴史書としたことから、仮に中臣氏も物部氏だったとすると、上賀茂が秦氏に取って代わられたように、中臣氏も秦氏の鎌足によって取って代わられた、と考えると辻褃が合う。この著者が言うように、中臣氏が神伎を司る古い家柄にも関わらず、最も重要な働きをした不比等の父、鎌足には神官としての性格が認められないことは、これを裏付けている。つまり、鎌足こそが秦氏による表の歴史乗っ取りの嚆矢である。

また、中臣氏は古くから現在の京都市山科区中臣町付近の山階（山科）を拠点としていたが、正確には山科区西野山中臣町である。すぐ北は栗栖野華ノ木町で、栗栖はクリスト、華ノ木は「生命の樹」に芽吹いた花、と解釈でき、それは人類の贖罪を背負ってイエスが十字架に掛けられたことにより、人類は救われたことを暗示させる。南は勧修寺という真言宗山階派の大本山で、開基（創立者）は醍醐天皇だが、開山（初代住職）は東大寺出身の承俊で、東大寺は秦氏の仏教拠点である。本尊は千手観音だから「生命の樹」を象徴する。西は稲荷山で、イナリはイエスを象徴する。南東は醍醐天皇縁の醍醐寺と醍醐天皇陵があり、北には天智天皇陵が、北東には天智天皇縁の大津がある。この天智天皇と鎌足が企てたのが乙巳（いっし）の変だから、中臣氏の拠点近くに天智天皇関係の地が存在する。つまり、この“中臣”は秦氏＝原始キリスト教に関係が深い。しかし、勧修寺は山号を亀甲山と称する。亀甲は六芒星の象徴であり、物部氏の象徴だから、元は物部氏の領地であることが解る。そして、前述の海部宮司の言葉、山科も海部氏・尾張氏が治めていたことからすれば、中臣氏も海部氏・尾張氏と同族である。よって、物部氏の領地が秦氏によって乗っ取られたことを暗示している。

実は、古代天皇家の系図から、天智天皇と鎌足、そして現在の日本の根幹を形成したとも言える天智天皇の弟、天武天皇の興味深い関係が見えてくる。一般的な系図では后あるいは妃（后は正妻、妃は側室）はすべては記載されていないが、「古代天皇系図の世界（荊木美行、燃焼社）」には、神武天皇から桓武天皇までの系図が、2 畳弱の 1 枚の大きな用紙に妃も省略されずに記載されている。無論、前述の歴史と同様に、系図も秦氏にとって都合の良いように編纂されているが、まったくの嘘偽りではなく、真相を紐解く鍵が隠されている。解るところに堂々と隠すのが、カッパーラの定石だからである。この系図の著者も、“至る所に矛盾や遺漏、後世の改竄を含んでいるので、系譜の虚構性を強調し、記紀の資料的価値を貶めることは容易だが、何故、そのような改竄などが行われたのかを考えることが重要”で、“系譜の背後に隠された歴史的事実を汲み取ることができないとしたら、系譜を利用しての古代史の実証的研究は望むべくも無い”と言っていることは、まともな研究者として正しいあり方である。

逆に言えば、系譜がそのまま真実だと考えているようでは、古代史の研究者としては失格だ、ということである。

まず、初代神武天皇の後の祖父は三嶋溝杭耳神（ミシマノミヅクイミミノカミ）で三島湊咋＝大山祇神と同じであり、海部氏の象徴である。その後、第28代宣化天皇までは丹波、尾張、山背、葛城、春日、和邇（和珥）、物部、巨勢などの物部氏が妃あるいは后となっている。第29代欽明天皇から蘇我氏が入り込み、第38代天智天皇まで続く。しかし、天武天皇から突如として鎌足の子らが入り込み、以後、鎌足を祖とする藤原氏が天皇家の外戚となったことは言うまでもないが、鎌足一族が天皇家の系譜に入る布石となったのが、天智天皇（中大兄皇子）が関係する乙巳の変とそれに続く大化の改新である。

（以下、Wikipedia 参照。）

当時、政権を掌握していたのは、稲目、馬子、蝦夷、入鹿の四代にわたる蘇我氏であった。鎌足は彼らの専横に憤り、大王家（天皇家）に権力を取り戻すため、蹴鞠の会を利用して中大兄皇子に近付いた。そして、蘇我氏打倒の計画を企て、皇極天皇4年（645年）6月12日に飛鳥板蓋宮にて蘇我入鹿を暗殺し、翌日には蘇我蝦夷が自らの邸宅に火を放って自殺し、蘇我氏体制が終焉した。これが、乙巳の変である。その後、孝徳天皇2年正月甲子朔（646年）に発布された改新の詔（みことのり）に基づく政治的改革が“大化の改新”であり、天皇の宮を飛鳥から難波宮に移し、公地公民制、国郡制度制定、班田収授の法、租・庸・調の税制改革等が行われ、飛鳥の豪族を中心とした政治から天皇中心の政治への転換点となったとされている。

その後、母親の斉明天皇（孝徳天皇の死後、皇極天皇が重祚した）と中大兄皇子は不和となって政情は不安定となり、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗するなどの過程を経て、中大兄皇子は668年に天智天皇として即位した。671年に天智天皇が崩御すると、その子、大友皇子と天智天皇の弟、大海人皇子（オオアマノミコ）が不和となり、672年に壬申の乱が起きたが、大海人皇子は勝利して第39代天武天皇として即位した。天武天皇は改革を更に推進して、より強力な中央集権体制を築くことになった。（大友皇子は明治3年に諡号を贈られ、第39代弘文天皇として認められた。しかし、天皇として即位したかどうかは定かではなく、日本書紀にも弘文天皇として即位したという記録が無いので、明治以前は天皇としては認められていなかったのである。そのため、この場面では天武天皇を第39代天皇と見なす。）

これが一般的な乙巳の変と大化の改新の一般的説明であるが、大化の改新については、多くの疑念が挙げられている。

- ・大化の改新が歴史家によって評価の対象にされたのは意外と遅く、幕末の紀州藩重臣であった伊達千広が「大勢三転考」を著して、初めて歴史的価値を見出し、それが明治期に広まっている。日本の歴史に於いて革命とも言えるこの事件が、これほど後になって価値が見出されていることはおかしい。

- ・蘇我入鹿暗殺のタイミングが三韓朝貢の儀の最中である。当時の常識として、外交儀式の最中にクーデターは起こさない。外交儀式中にクーデターを起こすことは、外交使節に対して国が内紛中で攻め込むに絶好の機会だと宣伝することと同義であり、極めて危険なことである。また、仮に三韓朝貢が暗殺者の虚構だったとすれば、外交政策の中心人物である入鹿が気付かないはずがない。
- ・暗殺の場面は、常識的には考えられない状況である。
 “蘇我入鹿は紫冠を付けて飛鳥板蓋宮に入朝した。入鹿は猜疑心が強く日夜剣を手放さなかったが、俳優（道化）に言い含めて、剣を外させていた。中大兄皇子は宮廷の諸門の閉鎖を命じ、自ら長槍を持って殿側に隠れ、鎌子は弓矢を取って潜んだ。海犬養勝麻呂（ウミイヌカイノカツマロ）に二振りの剣を運ばせ佐伯子麻呂（サエキノコマロ）と葛城稚犬養網田（カツラギノワカイヌカイノアマタ）に与えた。石河麻呂が上表文を読んでいる間に子麻呂と網田が入鹿を斬る手筈だったが、2人は恐れをなして現れない。ついに、中大兄皇子が飛び出した。それにつられて子麻呂らも飛び出し、共に入鹿の頭肩と足に斬りつけた。入鹿は玉座の下に倒れ、救いを求めた。驚いた皇極天皇は中大兄皇子に訳を聞くと、入鹿が皇位を奪おうとしていることを述べた。皇極天皇は直ちに宮殿の奥に姿を消した。そして、子麻呂と網田が入鹿にとどめを刺し、入鹿の死体は庭に投げ出され、障子で覆いを掛けられた。”
 宮中の大極殿は公の場としては最も神聖なる場であるため、“穢れ”は最も忌み嫌われる。そのような場で、最も大きな穢れである“死”に関わる暗殺が実行されたことは、国家の存亡に関わるほどの出来事である。そして、皇極天皇は女性だから、あまりにももの突然の惨劇で恐怖に慄いたり、卒倒したりしてもよいはずだが、何も言わずに宮殿の奥に姿を消しただけである。
 また、暗殺の実行者である中大兄皇子は皇極天皇の実子であり皇太子だから、本来、朝貢の儀に立ち会わなければならないはずだが、長槍を持って殿側に隠れていたことは、極めて考えにくい。
- ・詔の発布日が正月甲子朔、すなわち正月一日である。年の変わりに詔を出すことはあまり無く、正月一日に発布された可能性は低い。
- ・戸籍、計帳、班田収授は大化の改新後の大宝律令で初めて見られる用語であり、それ以前の文書には出てこない。
- ・元号が飛び飛びであり、元号が無い時代が存在する。実際に元号制度が定着したのは大宝元年からであり、それ以前に元号制度が存在したのかどうかは疑わしい。
- ・蘇我蝦夷、入鹿親子は死んだが、従兄弟の蘇我倉山田石川麻呂は大化の改新後に右大臣になっており、依然、蘇我氏は無視できない勢力を保っていた。
- ・一度、蘇我氏の勢力圏の飛鳥から難波宮に移動しながら、蘇我氏の勢力圏で

ある飛鳥に再び戻っている。天智天皇の時代になってようやく、飛鳥から近江へ朝廷を移すことが可能になった。しかし、壬申の乱で大海人皇子が勝つと、再び朝廷は蘇我氏縁の飛鳥に戻っている。

- ・最近発掘された蘇我氏一族の邸宅跡など関連遺跡を見ると、蘇我氏は自らが盾となって王家（天皇家）を守ろうとする体制が明らかとなってきている。

このような疑念と、律令制度が本格的に始動したのは大宝律令からであるということ、そして、大化の改新について記載されている日本書紀は藤原不比等によって編纂を命じられていることから、実際に施行された大宝律令と重ね、不比等が父親である鎌足の功績を高く評価させるために“大化の改新”という大事件を虚構した、と考える説が有力視されている。言い換えれば、鎌足—不比等という“表の秦氏”による正史乗っ取りである。これは、蘇我氏も物部一族だった、と考えると、辻褄が合ってくる。

(b) 蘇我氏とは

秦氏の政策だった仏教を蘇我氏は取り入れたが、仏教は仏像を拝むため偶像崇拜となり、物部氏の考え方と矛盾しているように思えるが、以下のことから、物部氏だった可能性が見えてくる。

まず、有名な蘇我馬子は“我、厩（馬屋）戸の子として蘇り”と読める。この読み順は漢文的には正しくないが、“蘇民将来”と同じである。蘇民将来の意味は、“（封印されたこの国の）民は将来蘇る”ということで、“蘇我馬子”もこれと同等と見なせる。蘇民将来はスサノオに関係し、スサノオは物部氏に関係する。秦氏のカッパーラ的には“蘇る”とはイエスのことだが、物部氏では籠神社の藤祭が暗示するように、“復活”のイナンナである。これは、スサノオの原型がイナンナであることと矛盾しない。つまり、蘇我馬子という人物は、“復活”を象徴する人物像と言うことができ、ある意味、架空の可能性があるわけである。また、同じ“復活”のイエスが原型と思われる聖徳太子には馬子の娘（刀自古郎女、トジコノイラツメ）が嫁いでおり、イナンナとイエスの“復活”が重ね合わされている、あるいは“復活”に関するイナンナとイエスの「合わせ鏡」とも言える。その聖徳太子のもう1人の妃の父は尾張皇子である。尾張皇子の父は敏達天皇、母は推古天皇であるが、推古天皇の母は堅塩（カタシ）媛であり、その父が蘇我稲目宿禰で、馬子の父である。その稲目から遡ると、稲目→高麗（コマ）→韓子（カラコ）→満智（マチ）→蘇我石川宿禰→武内宿禰となる。

一般的に宿禰とは、天武天皇が制定した真人（まひと）、朝臣（あそみ・あそん）、宿禰（すくね）、忌寸（いみき）、道師（みちのし）、臣（おみ）、連（むらじ）、稲置（いなぎ）の8つの姓の制度、八色の姓（やくさのかばね）の1つであるが、この場合は野見宿禰、葦田宿禰のように、これ以前の時代に使われていた個人の名前の1つである。武内宿禰は第8代孝元天皇の孫であり、7人の子は大和朝廷を支えた葛城氏、平群氏、蘇我氏、巨勢氏、紀氏、波多氏、江沼氏の祖となったとされている。この人物は仙人のような存在で、古事記には、景行

天皇から仁徳までの5代、244年間にわたって仕えた、と記されている。特に有名な功績は、神功皇后の新羅遠征の補佐、景行天皇の御世に於ける蝦夷地視察、応神天皇誕生後の籠坂（カゴサカ）、忍熊王子（オシクマノミコ）の叛乱討伐などといった功績が記紀に記されている。

叛乱討伐は日本武尊と重ねられ、共に“武”の字を有する。武内宿禰が祭神として祀られている気比（けひ）神宮では、他に伊奢沙別命（イザサワケノミコト、気比大神）、帯中津彦命（タラシナカツヒコノミコト、仲哀天皇）、息長帯姫命（オキナガタラシヒメノミコト、神功皇后）、誉田別命（ホムタワケノミコト、応神天皇）、玉姫命と共に、何と、日本武尊も祀られている！ここは福井県敦賀市曙町にある越前国一之宮であり、丹後国一之宮である籠神社と極めて近い地理関係にあり、日本武尊が祀られているということも合わせると、武内宿禰は物部氏、特に海部氏・尾張氏と関係が深そうである。また、古事記に依ると、気比神は御食津神（ミケツノオオカミ）とされている。御食津神は、宇迦之御魂神や保食神と同じ性格を持った食物神のことである。その謂れは、次のようにある。（Wikipedia 参照。）

“新羅から帰還直後に筑紫で誉田別命を生んだ神功皇后が凱旋途中に忍熊王の反乱に遭ったので、禊として武内宿禰が幼い誉田別命を連れ敦賀に逗留した際に、伊奢沙別和氣大神（伊奢沙別命）が現れて、自分の名を誉田別に替えて欲しい、と言った。宿禰はこれを聞いて翌日に浜で会う約束をし、その通り浜に行くと、鼻が傷付いた入鹿魚（いるか）が湾に入って来た。誉田別命は「大神が食料の魚を授けてくれた」と叫んだので、大神を御食津大神と名付け、それが気比大神となり、また入鹿魚の血が臭かったので、血浦（ちうら）→都怒我（つぬが）→敦賀となった。”

かつては器を筥（け）とか筥子（けこ）と言い、“けひ”の音は筥飯（けひい）に由来し、器に盛られた御飯を指すとも言われている。また、一書には武内宿禰の別称が御食津大神（気比神）ともされている。つまり、武内宿禰とは御食津神、宇迦之御魂神、保食神と同じ性格を持った神の象徴で、その根源は籠神社の宇迦之御魂神＝豊受大神に他ならない！

同じような保食神を祭神とする大阪府八尾市の恩智（おんち）神社では大御食津彦命（オオミケツヒコノミコト）、大御食津姫命（オオミケツヒメノミコト）が祀られているが、大御食津姫命は豊受姫大神の別名であるとされており、ここでも御食津神＝豊受（姫）大神となる。また、大御食を名に冠する長野県駒ヶ根市の大御食神社では、やはり日本武尊と誉田別命が祭神とされている。他に、伊勢の度会郡にある御食神社では大御食津臣命が祀られているが、神宮に海産物の御料を調進した御饌（みけ）の神とされ、これも豊受大神と同一である。このように、武内宿禰は豊受大神の象徴であり、基は籠神社である。

その籠神社には、似たような名前の倭宿禰命が祀られている。倭宿禰命は海部氏の4代目の祖で、神武天皇東征の際、亀に乗って明石海峡に現れ、天皇を大和の国へ先導したと言われ、更に、大和建国の功労者として倭宿禰の称号を

賜った、とされている。神武天皇をヤマトの陸地で先導したのが八咫鳥ならば、海を先導したのが倭宿禰命である。しかし、多次元同時存在の法則から神武天皇＝応神天皇（誉田別命）であり、気比神宮の謂れでは誉田別命と武内宿禰の関係が深い。つまり、“宿禰”という名称で初代天皇に関わることを暗示しており、倭宿禰＝武内宿禰＝豊受大神で海部氏・尾張氏の象徴なのである。また“亀”は亀甲紋であり、物部氏の象徴である。だからこそ、武内宿禰のあるところには尾張氏に関わりの深い日本武尊も登場するのであり、武内宿禰が海部氏、草薙神剣に関係の深い日本武尊が尾張氏を象徴している。そして、倭宿禰＝武内宿禰が初代天皇を導いて東征したことは、日本武尊の東征に重ねられており、正史としての初代天皇に“武”の字が当てられているのは象徴的である。なお、この東征伝説は桃太郎の鬼退治の原型でもある。鬼退治のために桃太郎が犬、猿、雉にきび団子を与えて家来としたのも、気比＝“きび”で、“きび”が御食津神＝豊受大神で象徴される籠神社を象徴するからである。

また、武内宿禰の父は第8代孝元天皇の息子、比古布都押之信命（ヒコフツオシノマコトノミコト）、母は山下影日売（ヤマシタカゲヒメ）だが、その母の兄が宇豆比古（ウズヒコ）である。「古代海部氏の系図（金久与市、学生社）」に依ると、籠神社の祭神、火明命の孫が宇豆彦命（＝珍彦）であり、古事記では神武天皇に向かって国神と宣言した珍彦という人物がいる。国（津）神とは、神武天皇＝秦氏渡来以前からヤマトを治めていた海部氏・尾張氏の象徴である。先代旧事本紀の皇孫本紀には彦火々出見の第二子、武位起命（タケイタテノミコト）の子が椎根津彦（シイネツヒコ）で、その本名が珍彦であり、大和国造の祖、大和直部（あたいべ）之始祖となっているというから、珍彦はやはりヤマトの祖＝海部氏・尾張氏である。そして、武位起命は海部氏の祖である建位起命と同一である。よって、武内宿禰の伯父、宇豆比古＝珍彦は海部氏・尾張氏だから、武内宿禰もその一族ということになる。また、父の比古布都押之信命の“布都”も＜神々の真相2＞で記したように“布都＝布都御魂＝アロンの杖＝草薙神剣”だから、尾張氏に関係が深いことを暗示する。

海部宮司はシュメールの太陽神に由来する“ウツ、ウズ、ウジ”などの重要性を言われているが、宇豆彦命＝珍彦はまさにそれを象徴している。そして、妹の山下影日売という名称は“ウズ＝太陽＝日、光”と対を成す“カゲ”となっていることは、1つのカバーラであり、系図が作為的なものであることを象徴しているのであろう。

大和の根幹を海部氏が形成したことは隠されているが、このような伝承でヒントとしているのである。本来、珍彦は天神となるが、秦氏渡来以前にヤマトにいたので古事記では国神とされ、後から渡来した秦氏が天神となり、秦氏によって抑えられたことを象徴している。

閑話休題。つまり、蘇我氏の祖とされる武内宿禰が海部氏・尾張氏の一族ならば、蘇我氏は海部氏・尾張氏の別名あるいは同族、あるいは婚姻などの極めて血縁の深い一族と考えて良く、“正史”に登場する蘇我氏は海部氏・尾張氏の系譜を象徴している、あるいはそれを基にして描かれた架空の一族とも考えられる。武内宿禰の子に葛城氏、平群氏、巨勢氏などの物部氏と共に蘇我氏とあ

るのもこのことを象徴しており、これらの大和朝廷を支えた 7 人の子はユダヤ教＝物部氏に關係の深いメノラーを象徴している。

そして、馬子が本拠としていた葛城は、元々海部氏・尾張氏の治める地だったことは、やはり蘇我氏と海部氏・尾張氏の深い關係を暗示している。葛城という地名は大豪族の葛城氏に由来し、葛城氏も武内宿禰の子とされていることは前述の通りだが、謎が多い。しかし、熱田神宮発行の「熱田神宮文書」に記載されている“尾治宿禰田島氏系譜”には、尾張氏の初期の祖（天戸目命、建額赤命、建斗米命、建筒草命、倭得玉彦命など）の母はほとんど葛城氏であり、これは尾張氏と葛城氏がかなり密接な關係にあったことを示しており、尾張氏と葛城氏は同族とも言える。また、この葛城地方は大和盆地の西側であり、東側は纏向である。そして、現在では 4 世紀前半の大和盆地に“東の纏向、西の葛城”の二大勢力があったことが判明している。

(http://www.bell.jp/pancho/k_diary-3/2010_0124.htm 参照。)

1 つの盆地に二大勢力があって争っていたならば、そこに都市が発達することは無いが、現に纏向こそ邪馬台国の本拠地ではないか、と注目されており、海部宮司も纏向の重要性を言われている。ならば、邪馬台国とは、纏向と葛城が一体となった国であると言える。蘇我氏はそこに縁のある一族だから、架空の一族ではないだろう。

蘇我稲目は宣化天皇元年（536 年）に天皇の命により、凶作に備えるために尾張国の屯倉（みやけ）の粳を都に運んだとされるが、これなども日本の食の根幹である稲で保食＝豊受大神＝籠神社に関わる逸話であり、稲目は“稲芽”に通じるから、“粳”も象徴している。粳は日本の食の根幹であり、籠神社にあったと言われるマナの壺は、主からの食べ物（マナ）を受けた容器であった。また、籠神社に關係の深い“海幸彦と山幸彦”の話には潮の流れ＝航海を司る神、塩椎神（シオツチノカミ）が登場するが、推古天皇の母で稲目の娘である堅塩媛の名に“塩”があるのも、海部氏を象徴していると思われる。なお、塩椎神は古事記での名称だが、日本書紀では塩土老翁（シオツチノオジ）となっており、武内宿禰は異常な長寿で、やはり老人であることは共通性であり、籠神社に關係の深い浦島伝説でも、最後に浦島太郎が老人になってしまうことは、暗示的である。

更に、稲目の逸話は、尾張氏にも関わることを端的に象徴している。（さもなくば、何故尾張国なのか、という疑問が湧く。）その尾張氏の熱田神宮では祖の一柱、建稲種命が祀られているが、“稲の種＝粳”で“稲目”と同義である。よって、熱田神宮にも実は豊受大神を象徴する祭神が祀られていることになり、海部氏と同族であることが暗示されている。また、建稲種命の妹で日本武尊の妻である宮簀媛命の“宮簀”は籠神社の鎮座する“宮津”に通じ、これは海部氏と尾張氏が同族であることを暗示している。この場合の“同族”とは、海部宮司に依ると“兄弟”とのことである。そして、建稲種命が豊受大神、宮簀媛命が籠神社の鎮座する宮津を象徴しているのなら、これはまさしく、豊受大神を本来の主神とする籠神社を象徴していることに他ならない。

このように、蘇我氏は海部氏・尾張氏と極めて関係の深い豪族である。では、どういう関係なのか。カ・インの子孫が日本の縄文時代を築いていたが、北イスラエル王国の王族であるエフライム族の海部氏・尾張氏が海のシルクロードを渡って渡来し、友好を結んだ。それが、おそらく弥生時代の始まりである。その後、不老不死伝説を聞きつけた北イスラエル王国の末裔、徐福率いる一団が渡来し、同じ北イスラエル王国出身ということで物部氏となった。おそらく、徐福あるいは始皇帝縁者の王族クラスが海部氏・尾張氏と婚姻関係を結ぶことにより、物部王国となったのであろう。ならば、蘇我氏は婚姻関係を続けていた徐福あるいは始皇帝縁者の末裔と考えるのが最も妥当である。蘇我氏が海部氏・尾張氏とまったくの同族ならば、系図上の早い段階で“蘇我”を象徴する名称があるはずだが、それは見られないからである。そもそも“蘇我”という姓自体、“蘇り、復活”を意味するが、徐福一団はまさに不老不死伝説のために渡来したことからも、そう考えるのが妥当だろう。

しかし、最初から“蘇我”という字だったのではない。蘇我氏が造頭した大宝蔵殿北倉の戊子年銘釈迦三尊像という仏像には“嗽加”とされているし、先代旧事本紀の天物部二十五部には“巷宜物部”とある。（「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎、安本美典、勉誠出版」）この巷宜物部が蘇我氏を指しているとは言い難いかもしれないが、古代、少なくとも推古朝までは音仮名表記の方が訓仮名表記よりも古い表記で、“宜”を“が”と読んでいた古い例であり、これは古い秦代・漢代に基づくと見られている。実際、推古4年（598年）に作られた元興寺露盤銘には蘇我稲目を“巷宜伊那米”と記載しており、音表記が訓表記よりも優先するならば、巷宜物部は蘇我氏を指していると言える。（万葉集で、漢字が当て字になっているのは良い証拠である。なお、先代旧事本紀の天孫本紀に記載の物部氏系譜には物部馬古連公という連があり、これなども蘇我馬子を指していると思われる。）

つまり、後世になって意図的に“蘇我”とされたのである。“我、蘇る”とは“復活、再生”の根源である海部氏・尾張氏とも見なせるが、後世になってからの改姓ならば秦氏の策であり、それはイエスの復活を象徴している。それ以外にも、東大寺のお水取りが不老不死を象徴し、それが徐福伝説に基づいて秦氏によって創られたということは<日本の真相3>で記した。だから、秦氏による策ならば、“復活”を象徴する“蘇我”という名称により、蘇我氏は不老不死＝復活を求めて渡来した徐福あるいは始皇帝縁者の末裔であることを象徴していると考えられる。

また、少彦名神が大己貴神＝大物主神と共に国造りを行い、少彦名神は徐福、大物主神は海部氏・尾張氏の象徴であることは(4)で記したが、大元は海部氏・尾張氏だから“大”、そこに加わった徐福一団を“少”として象徴しているのである。

ここで、<日本の真相3>を振り返る。<日本の真相3>では、海部宮司に依ると、丹波を中心にして、近江や出雲を含む広大な地域を支配していたのが、魏志倭人伝に記された投馬国であり、“投馬”というのは当て字の可能性もある

が、文字通り解釈すると“馬を投げる”ことであり、スサノオを象徴する、と記した。ならば、スサノオの子孫とされている大己貴神はまさしく海部氏・尾張氏の象徴である。そして、近江や出雲を含む広大な地域が当時のヤマトの表玄関で、半島との交易を盛んに行っていた海部氏の領地ならば、内陸の邪馬台国は尾張氏の領地とあって良い。海部宮司に依ると、秦氏に国譲りした尾張氏は近江から美濃を通して現在の尾張の地に辿り着いたというが、これからも、邪馬台国は尾張氏の国だったと言える。そうすると、この場面に於ける国造りとは、ヤマトの中心となる邪馬台国のことを指しているから、邪馬台国の中でも“東の纏向”を尾張氏が、“西の葛城”をもう1つの国造りの神として象徴される少彦名神＝徐福一団が治めていたと考えるのが妥当である。つまり、葛城氏は徐福一団の系統であり、尾張氏に后を出していることからすると、中でも徐福直系あるいは始皇帝の直系あるいは縁者系と考えられる。

葛城はまた“桂木”とも書ける。桂は月に生えているとされる想像上の木であり、現在、嵐山の桂川一体は秦氏の総本山である。そして、秦氏縁とされてしまった(5)で述べた大酒神社には、秦氏の首長としての秦酒公、秦の始皇帝と共に弓月君が祀られているが、弓月君は支那の西域にいたユダヤ教徒のことで、始皇帝の血縁も含む徐福一団の象徴であることは<日本の真相3>で記した。つまり、元々“月”は始皇帝の血縁も含む徐福の一団の象徴であり、“月”を連想させる“桂木”の読みから“葛城”としたとも考えられる。そうすると、やはり葛城氏は徐福一団の系統と言える。

なお、少彦名神は古事記では神皇産霊神の子、日本書紀では高皇産霊神の子とされているが、これは原初三神の内の二柱が同じということになり、矛盾している。唯一解釈可能なのは、徐福一団の中で徐福系と始皇帝の縁者系、という見方だろうか。勿論、中心の天之御中主神は海部氏・尾張氏である。

このようなことを踏まえると、乙巳の変も違う見方ができる。乙巳の変では、中臣鎌足と次期天皇である中大兄皇子によって蘇我入鹿が暗殺された。そして氣比神宮の謂れでは、次期天皇である誉田別命の前に鼻を傷つけて血を流した入鹿魚が来た。つまり、蘇我入鹿が暗殺されたことは入鹿の血を象徴しているが、それは氣比神宮に伝わる誉田別命の逸話を象徴していることに他ならない。よって、乙巳の変は氣比神宮の謂れを基に創られた、あるいは秦氏によってそれと同時期に創られた創作と言える。

また、伊奢沙別和氣大神は誉田別命によって御食津大神＝豊受大神と名付けられたが、その前に、伊奢沙別和氣大神は自分の名を誉田別（＝応神天皇＝初代天皇）に替えて欲しいと言った。これは、伊奢沙別和氣大神＝豊受大神で象徴されるヤマトを治めていた物部王朝王族の海部氏・尾張氏が、秦氏によって王族の地位を追われ、以後、王位（皇位）につけなかったことを暗示している。つまり、こういうことである。九州物部王朝に婿入りした誉田別命は秦氏の渡来によって原始キリスト教に改宗し、初代応神（＝神武）天皇となった。しかし、物部王朝王族の海部氏・尾張氏は最後まで抵抗したので、王族の地位を追われた。伊勢は元々海部氏・尾張氏が治める地で、古代伊勢神宮も彼らのものだった。しかし、秦氏（藤原不比等）の策により、神宮は新生伊勢神宮へと変

えられた。そして、内宮が本宮となって秦氏の天照大神が皇祖神として祀られ、一方、海部氏・尾張氏は外宮へと追いやられ、豊受大神とされたのである。外宮の元伊勢が唯一、籠神社なのは、このような背景があるのである。そして、伊勢の神職も海部氏・尾張氏の同族である渡会氏から、秦氏の荒木田氏へ替えられたのである。

では、蘇我氏が海部氏・尾張氏に関係の深い物部氏ならば、物部氏は仏教導入を拒んでいたのに、蘇我氏の主張した仏教保護は矛盾しているが、これはどう考えたら良いのか。

・仏教導入の経緯

蘇我稲目の時代に、まず物部尾興らによって仏像が破棄された。その後の馬子の時代に、排仏派の物部守屋と中臣勝海が蘇我氏と争った。その際、厩戸皇子＝聖徳太子が四天王像を彫って戦勝祈願し、馬子も寺塔を建立して仏法を広めることを誓い、最終的には馬子らが勝利して、本格的に日本に仏教が導入された。

前述のように、馬子の名前は象徴的であり、そこに秦氏の象徴で架空と思われる聖徳太子まで加わっている。聖徳太子の逸話は常識離れしているのに対し、馬子など蘇我氏の業績などは現実的だから、やはり蘇我氏は実在で聖徳太子が架空であり、おそらく秦氏が蘇我氏の業績を聖徳太子の業績に替えた、ということなのだろう。そして、この話はいわば物部氏の内紛話である。ならば、秦氏を表立って出すことなく、物部氏の内紛ということにして、仏教を原始キリスト教の隠れ蓑として利用しようとしていた秦氏にとって都合の良い創作と言えよう。しかし、この聖人、聖徳太子一族は、何故かその後に滅ぼされる。関裕二氏の「女帝」誕生の謎（講談社）」に依ると、次のようにある。

“蘇我入鹿の軍勢に囲まれた山背大兄王（聖徳太子の息子）は生駒山に逃れているが、一族郎党を率いて斑鳩に戻り、蘇我氏によって滅亡させられている。しかし、山背大兄王1人のために一族が滅亡していることは納得し難い。また、この惨劇を目撃したはずの法隆寺の近辺に、山背大兄王を葬った痕跡がまったく無い。これは、聖徳太子という（架空の）偶像を登場させることによって、当時の改革派である蘇我氏の功績を、一旦天皇側の聖者である聖徳太子に預け、その上で蘇我氏＝大悪人という図式を画策した。しかし、実際には聖徳太子（とその末裔）は存在しないので、辻褄を合わせるためには、斑鳩の地で全員が消えて無くならなければならなかった。”

まさに的を射た推論であり、この通り、実在した蘇我氏を貶めるための秦氏による陰謀的創作であろう。

また、物部守屋という名前も象徴的である。御柱祭で有名な諏訪大社の神職のトップは明治時代までは神長官（じんちょうかん）と呼ばれていたが、守矢

(=守屋)氏が代々継承してきた。この守矢氏こそ、物部守屋の直系と考えられる。というのも、諏訪大社の謂れでは、大国主の子である建御名方神(タケミナカタノカミ)は最後まで国譲りに抵抗していたが、最終的に木曾の山奥まで追い詰められ、現在の諏訪の地に鎮まった。海部宮司に依ると、尾張氏は最終的にやむなくヤマトの地を譲り、近江から美濃を経て尾張の地へ辿り着いたが、最後まで抵抗していたので、すぐに従った出雲などより扱いが低いという。話の構造としては、まったく同一である。つまり、物部守屋も海部氏・尾張氏と同族であり、“権力者”によって封じ込められたのである。これは、建御名方神が神(ミワ)氏の祖先とされていることからとも言える。神(ミワ)の大元が大神(オオミワ)であり、それは取りも直さず、海部氏・尾張氏の最古の神殿、大神神社に他ならない。大神神社には本殿が無く、背後の三輪山を御神体とするが、諏訪大社にも本殿は無く拝殿だけであり、御神体は背後にある守屋山で、大神神社と同じ構造である。この山には本来の字“守屋”が当てられており、基が物部守屋であることを象徴している。そして、“守屋山”とは“モリヤ山”の象徴であり、これはアブラハムが息子イサクを神の犠牲として捧げようとした場所であると同時に、ソロモンがエルサレムの神殿を建造した場所でもある。つまり、ユダヤ教にとって最高の聖なる場所の名称であり、ユダヤ教徒たる物部氏の王族一族が祀るに相応しい名称である。(実際に、イスラエルからアミシヤブが来日して諏訪大社を訪れ、守屋山を参拝していることから、如何に重要な地か解るだろう。)

更に、<日本の真相>で記したように、八咫鳥に依ると外宮(おそらく別宮多賀宮)の地下にある天御量柱の周囲には、長さの異なる4本の柱がメルカバーとして建てられているという。これはまさに諏訪大社の御柱と同じ構造である。そして、外宮の元伊勢は唯一、籠神社だから、諏訪大社の守矢氏と籠神社の海部氏は同族と言える。

御柱は神聖な柱であるが、一旦清めた柱に人が乗るし、祭りで死者が出ても、その柱を変えることはしない。これは、神宮の御木曳きなどからすると、考えられないことである。が、諏訪では問題無い。これは、柱が神殿へ捧げる柱ではなく、イナンナを象徴しているためである。(8)で記したように、柱=ハシラは元々アシラに由来し、アシラ=アシュタルテ=イナンナである。しかし、ヘブライ語でアシラは異教の神であり、ユダヤ教は異教の神を認めない。だから、この祭りはユダヤに関係するのではない。ならば、シュメール由来である。英雄とイナンナとの“聖なる結婚の儀式”では、朝には英雄はほとんど死んでいた。生きていた者が“真の英雄、不死の力”とされ、“イナンナ”という名前はこの“不死の力”に由来することは<神々の真相1>に記した。柱に男衆が群がって乗っているのは、女神イナンナに乗っていることに他ならない。だからこそ、清めた後の柱に乗ることは問題無く、男たちは競って柱に乗りたがり、乗り切った男は英雄視されるのである。死んだところで、それは女神イナンナに対する生贄となるから、祭りが中止になることもない。ここでも、イナンナを重視されている海部宮司の話と通じ、諏訪大社の守矢氏と籠神社の海部氏は同族と言える。

また、海部氏に関係の深い豪族として安曇氏がいる。前述の「古代海部氏の系図」には安曇氏について興味深いことが記載されている。アズミは厚見、厚海（熱海）、渥美、阿積、阿曇などの文字で書かれ、あるいはアズミはアマツミ（海積）の約であり、海部の長なるよりの称（姓氏家系大辞典）という。安曇氏は海洋系豪族であり、前述の建位起命という海部氏と共通の祖を持つ。安曇氏の定住地は丹後、但馬、若狭などだが、次第に内陸から太平洋側へも勢力を拡大し、渥美半島とか滋賀県の安曇（あど）川とか信州の安曇郡がそうである。

安曇が“アマツミ”の約ならば、籠神社と表裏一体の関係にある大山祇神社の“大山祇（おおやまつみ）”と対を成していることになり、ある意味、籠神社で祀られる海神、綿津見神と同一であり、安曇氏が海洋系豪族であることと矛盾しない。そして、海部氏と共通の祖を持つことは、同族ということである。同族であるが故に、海部氏の治める丹後、但馬、若狭などに定住したのである。中でも、信州の安曇こそ、諏訪大社が鎮座する場所である。つまり、守矢氏とは、実は海部氏と同族の安曇氏なのである。

また、安曇川は京都府および滋賀県を流れる淀川水系の一级河川で、野洲川に次ぐ長さの琵琶湖に流入する河川であるが、安曇川と書いて“あどがわ”と読むので、安曇＝アドでもある。ヘブライ語での主の別名はアドーナイ、フェニキア語ではアドーンであり、これはイナンナが愛するドゥムジを呼ぶ時の言い方が基となっていたことは<神々の真相 4>で記した。また、北イスラエル王国の王族であるエフライム族はフェニキア語とフェニキアの航海術に長けていたと<日本の真相 3>に記した。つまり、安曇氏とは、エフライム族＝海部氏・尾張氏との関わりが深かったフェニキアの言葉で“主”を意味する名称であり、それはイナンナが根源であるからこそ、安曇氏が治めていた地でイナンナそのものを象徴するお祭り、イナンナとドゥムジの聖婚を象徴するお祭りが行われるのである。これからすると、安曇は“アド”と読むのが正しいだろう。（なお、安曇川駅は滋賀県高島市にある。ここは皇室御用達の百貨店、高島屋創業者の地であることは、暗示的である。）安曇川一帯はいわゆる近江地方であり、そこは海部氏・尾張氏の領地なのである。

このように、蘇我氏と海部氏・尾張氏が深い関係ならば、蘇我氏と尾張氏の血を濃く受け継いでいるとされている聖徳太子にも、イエスの象徴という以外、更に深い意味が隠されていると考えなければならない。(5)では、大嘗祭で使われた籠服は最後に広隆寺の聖徳太子像に着せられるが、これはイエスの御霊が遷された服をイエスに着せることに他ならない、と述べた。しかし、広隆寺を含む太秦一帯が元々海部氏・尾張氏の領地であり、聖徳太子が血統としては海部氏・尾張氏の象徴ならば、この聖徳太子像は海部氏・尾張氏の血統の象徴、秦氏渡来以前のヤマトの王族としての海部氏・尾張氏の象徴とも言える。だから、大嘗祭で使われた籠服が最後に広隆寺の聖徳太子像に着せられることは、海部氏・尾張氏が王族＝本来の皇統だったことを今でも認められていることの象徴であり、新たな大和の王族たる天皇家は元々のヤマトの王族である海部氏・尾張氏を基盤としていることの象徴でもある！だからこそ、公にされない秘儀なのである。

その広隆寺には、聖徳太子像以外にも国宝第 1 号と指定された弥勒菩薩半跏像があり、これは新羅様式である。実は新羅か百済か、ということが、真相を解く鍵になっている。(以下、

http://www.ican.zaq.ne.jp/euael900/national_history10.html 参照。)

先に記した蘇我氏の系図に“満智”という名が見られるが、日本書紀にも百済人として満智という名がいくつか出てくるので、蘇我氏の祖は一般的には百済系と見なされている。他に“韓子”は母が渡来人の場合に使われていた名前であり、“高麗”は朝鮮半島出身であることを示す名前である。しかし、百済・新羅・高句麗に対応する名前を後世創作したのではないかと、とも言われている。その後世創作説に従うと、広隆寺に関する興味深い事実が見えてくる。(以下、<http://blogs.yahoo.co.jp/nihonshinoiratsume/54414477.html> 参照。)

大宝蔵殿の北倉に戊子年銘釈迦三尊像という蘇我氏が造願した仏像があるが、この仏像の光背には 4 行 48 文字からなる造像記が刻まれおり、そこには「戊子年十二月十五日」「嗽加(そが)大臣」と書かれている。戊子(つちのえね)の年の推古 36 年(628 年)に、嗽加=蘇我大臣が造ったことがはっきりしており、仏教美術の様式学から見れば、この仏像は新羅様式(北朝様式)である。新羅の仏教美術は北朝様式、百済の仏教美術は南朝様式という明らかな違いがあり、蘇我氏の造願した仏像が北朝様式であることは、蘇我氏と新羅との親しい関係を示唆している。

また、崇峻元年に建立された蘇我氏の氏寺である法興寺には、推古 13 年になって止利仏師によって造られた丈六仏が本尊として安置されているが、今日“飛鳥大仏”と呼ばれているこの仏像も、北朝様式である。

しかし、乙巳の変で蘇我宗家を滅亡させた中大兄皇子の父帝が建立した寺院は百済大寺であり、遷宮された最後の宮が百済宮であること、また自身の百済救援事業に象徴されるように、中大兄皇子=天智天皇は明らかに親百済派であり、ならば、中大兄皇子に加担した中臣鎌足=秦氏も親百済派と言える。つまり、天智天皇(秦氏)と蘇我氏(物部氏)の間には、親百済派と親新羅派という違いが明確であり、蘇我氏は新羅派である。よって、蘇我氏と関係が深い海部氏・尾張氏も新羅派と言える。その証拠が前述の「古代海部氏の系図」にも記されている。そこには、丹波人が新羅に渡って脱解王となった、という、海部宮司家に代々伝えられてきた秘伝がある。(以下、Wikipedia 参照。)

脱解王は正式には脱解尼師今(ダツカイニシキン)と言い、生年は不詳で西暦 80 年に没している新羅の第 4 代の王(在位は 57 年~80 年)であり、姓は昔(ソク)、名は脱解である。第 2 代の南解次次雄(ナンカイジジユウ)の娘の阿孝(アヒョ)夫人の婿で、新羅の王族 3 姓(朴・昔・金)の内の昔氏の始祖である。三国史記の新羅本紀・脱解尼師今紀は、誕生及び即位については以下のように記している。

“倭国の東北一千里のところにある“多婆那(たばな)国”で、その王が女国の王女を妻に迎えて王妃とし、妊娠してから 7 年後に大きな卵を産んだ。王は

王妃に向かって、人でありながら卵を産むというのは不吉であり、卵を捨て去るように言った。しかし王妃は卵を捨てることに忍びず、卵を絹に包んで宝物と一緒に箱に入れて海に流した。

やがて箱は金官国に流れ着いたが、その国の人々は怪しんで箱を引き上げようとはしなかった。箱はさらに流れて、辰韓の阿珍浦（あぢんぼ、慶尚北道慶州市）の浜辺に打ち上げられた。そこで老婆の手で箱が開けられ、中から1人の男の子が出てきた。このとき、新羅の赫居世居西干（カクキョセイキョセイカン）の39年（紀元前19年）であったという。老婆がその男の子を育てると、成長するにしたがって風格が優れ、知識が人並みならぬものになった。姓名が解らなかったので、箱が流れ着いた時に鵠（かささぎ）が傍にいたことから鵠の字を略して“昔”を姓とし、箱を開いて生まれ出てきたことから“脱解”と命名したという。長じて第2代南解次次雄5年（8年）にその娘を娶り、10年には大輔の位について軍事・国政を委任された。南解次次雄が死去した時に儒理尼師今に王位を譲られかけたが、“賢者は歯の数が多い”という当時の風説を元に餅を噛んで歯型の数を比べ、儒理尼師今（ジュリニシキン）に王位を継がせた。儒理尼師今が57年10月に死去した際、王（儒理尼師今）の遺命に従って脱解が王位に就いた。在位24年にして80年8月に死去し、首都金城（慶州市）の北壤井丘に葬られた。”

卵を産んだ話の原型は、天孫降臨でニニギが久士布留（くじふる）岳に降り立った基の話、つまり、伽耶の神話であることは<日本の真相>で記した。

“亀旨峰（くじほう）の麓で、天から声が聞こえた。やがて天から紫色の紐が降りてきた。その先端には黄金の櫃が付いていた。そこには、6個の卵が入っていた。その卵が羽化して男子が誕生し、伽耶王朝の始祖である金首露となった。”

どうも、半島の王族には卵が関わっているようである。卵は通常の出産ではないから、異国から来た者を象徴しているのである。

それはさておき、“多婆那国”は丹波国の転じたものと解釈できる。また、三国遺事では脱解の出身地は“多婆那国”ではなく“龍城国”とされているが、これは“龍宮城”を連想させ、龍宮伝説に関係の深い籠神社が鎮座する地域（国）＝丹波を表している。

更に、65年には後の金氏王統の始祖となる金閼智（キンアッチ、第13代味鄒（ミスウ）尼師今の7世祖）を瓠公（ココウ）が発見し、跡継ぎとして養育したという。瓠公（生没年不詳）は新羅の建国時に諸王に仕えた重臣であり、元は倭人ともされている、新羅の3王統の始祖のすべてに関わる、新羅建国時代の重要人物である。瓠（ひさご＝ひょうたん）を腰に下げて海を渡ってきたことからその名が付いた、と三国史記は伝えている。初代新羅王の赫居世居西干の朴姓も同じ瓠から取られているため、同一人物を指しているのではないか、という説もある。そして、驚くべきことに、籠神社奥宮の伝承では、天のヨサヅラ（瓢箪（ひょうたん）＝瓠瓜の褒め言葉）に真名井の御神水を入れてお供えされたので、ヨサノ宮（吉佐宮）と呼ばれるようになったという。そして、

古名の1つが“瓠宮”であり、現在も入り口の向かって右側に“瓠宮大神宮”とある。(向かって左は“真名井神社”とある。)つまり、新羅建国に関わった倭人とされている瓠公もまた、籠神社と密接な繋がりのある人物なのである。よって、海部氏・尾張氏は新羅と関係が深いどころか、新羅建国の根幹を成していると言える。

実際に遺跡などから、かつての丹波国は玉造りが盛んで、その玉(ガラス製や碧玉製の玉)や奴隷が半島に輸出されると同時に、半島からは大量の鉄を輸入していたことが判明しており、当時の丹波国と半島の交易が盛んだったことが裏付けられている。そして、丹波国の玉造りは、籠神社に縁の深い“海幸彦と山幸彦”でも象徴されている。(＜日本神話＞＜日本の真相1＞参照。)火遠理命こと山幸彦が塩椎神に導かれ、海神・綿津見神の宮殿に行った。そこで、海神の娘・豊玉毘売の下女が水の入った壺を持って来たが、山幸彦は水を飲まず、首飾りの珠を外して口に含んで壺に吐き出すと、珠は壺にくっついて取れなくなった。この首飾りの珠は勾玉＝八尺瓊勾玉であり、壺＝マナの壺と一体となったことは、壺と勾玉が御神器として同一であることを象徴しており、珠＝玉は籠神社(丹波国)の象徴である。現在、マナの壺は外宮に、八尺瓊勾玉は皇居にあるが、外宮の元伊勢は唯一、籠神社だけなので、外宮は海部氏＝古代の皇統を、皇居は現在の皇統を象徴している。

古代では、玉は不老不死と生命の再生をもたらす力を持つと信じられており、遺体全体を玉で覆うことなどが行われた。始皇帝の遺体も玉で覆われていたとされ、中南米の王族の墓でも同様の処置が確認される。つまり、玉は最も重要な王権の象徴で、それ故、今でも王の座る椅子を“玉座”と言い、天皇陛下も皇居で剣と鏡ではなく、勾玉を持っておられるのである。中でも、翡翠の玉は最も尊ばれていたものであり、元は翡翠のことを“玉”と言っていたのである。

(Wikipedia 参照。)そのような王権の象徴で不老不死の象徴でもある玉造りが丹波国で盛んだったことは、丹波国が権力的に最大の王国だったことを意味し、特に日本に於ける翡翠の一大産地は新潟県の糸魚川市姫川流域から北陸の海岸に掛けてである。翡翠がとりわけ不老不死の象徴とされたのは、常緑＝常若の緑を象徴するからだろう。

そして、玉は前述の天兒屋根命の話にも関連する。天兒屋根命は天照大神の天岩戸隠れの際、天太玉命と共に太占(ふとまに＝まじない)を行って天照大神を岩戸から引き出した。天兒屋根命は祝詞を捧げ、天太玉命は八尺瓊勾玉や八咫鏡などを下げた天香具山の五百箇真賢木(いおつまさかき)を捧げ持ち、天照大神が岩戸から顔を見せると、その前に鏡を差し出した。勾玉は海部氏の象徴で、八咫鏡の原型は息津鏡・辺津鏡だから、鏡も海部氏の象徴であり、共に海部氏を象徴している。そして、不比等らの創作した記紀では、中臣氏の祖とされる天兒屋根命の方が天太玉命よりも重要視されており、現在の神道に於ける祝詞も中臣祓である。しかし、海部氏系と思われる齋部氏の齋部広成が書いた古語拾遺では、逆に天太玉命の方が中心的な役割を果たしている。よって、天兒屋根命は秦氏、天太玉命は海部氏・尾張氏の物部氏を象徴し、天岩戸隠れの場面に於いても、海部氏・尾張氏が秦氏によって抑えられたことが暗示され

ている。

閑話休題。つまり、広隆寺は秦氏が建造したのだが、その地は元々ヤマトの王族である海部氏・尾張氏の領地だったので、弥勒菩薩半跏像を秦氏の百濟様式ではなく新羅様式として謎を解く鍵としたのである。だから、そこにある聖徳太子像も、秦氏の王だけではなく、海部氏・尾張氏の王をも象徴していることになる。聖徳太子が架空の人物だからこそ、このようなことが可能なのである。

また、広隆寺の側には(5)で述べた大酒神社がある。ここには秦氏の首長としての秦酒公、秦の始皇帝と共に弓月君が祀られている。広隆寺来由記に依ると、次のようにある。

“「大辟」称するは秦始皇帝の神霊を仲哀天皇 8 年（356 年）皇帝 14 世の孫、功満王（コマオウ）が漢土の兵乱を避け、日本朝の淳朴なる国風を尊信し始めて来朝し此地に勧請す。これが故に「災難除け」「悪疫退散」の信仰が生れた。

後の代に至り、功満王の子弓月王、応神天皇 14 年（372 年）、百濟より 127 県の民衆 18670 余人統率して帰化し、金銀玉帛等の宝物を献上す。又、弓月王の孫酒公は、秦氏諸族を率て蚕を養い、呉服漢織に依って絹綾錦の類を夥しく織出し朝廷に奉る。絹布宮中に満積して山の如く丘の如し、天皇御悦の余り、埋益（うずまさ）と言う言葉で酒公に禹豆麻佐の姓を賜う。数多の絹綾を織出したる呉服漢織の神霊を祀りし社を大酒神社の側にありしが明暦年中破壊に及びしを以て、当社に合祭す。”

仲哀天皇 8 年、秦始皇帝の末裔で秦氏の祖・功満王が来朝し、始皇帝の祖霊を広隆寺に祀ったのが当社であるという。この伝では、秦氏が百濟由来と明記されており、秦氏が始皇帝の末裔とされている。しかし、始皇帝の末裔は徐福と共に渡来した一団であり、後から渡来した秦氏ではない。だから、本当の末裔が関わっていることを、このような伝で象徴していると考えられる。これも、秦氏が物部氏の真相を隠しているわけである。なお、後に物部氏も改宗してすべて秦氏（扱い）となったので、秦氏が始皇帝の末裔というのはまったくの嘘、というわけでもない。

以上のことから、歴史的に天智天皇の時代まで蘇我氏が実権を握っていたことは、物部氏に代わって蘇我氏が天皇家を思うように動かしていたということではなく、海部氏・尾張氏の真相が隠されただけで、実際には蘇我氏を含めた海部氏・尾張氏一族が天智天皇の時代まで外戚として天皇家を守ってきたことを暗示しているのである。それは、天武天皇の初期の御世まで続いた。だからこそ、蘇我入鹿が死んだ後でも蘇我倉山田石川麻呂は大化の改新後に右大臣になって勢力を保ち、天武天皇の都、飛鳥浄御原宮（あすかのきよみはらのみや）も蘇我氏縁の飛鳥に戻ったのである。そして、蘇我氏一族の邸宅跡とされる関連遺跡が物語るのは、蘇我氏が自ら盾となって天皇家を守ろうとする体制であり、このような“真相”と矛盾しない。蘇我氏が仏教導入に積極的だったとい

うことは、秦氏が積極的に仏教導入を図ったということのカモフラージュしているに過ぎず、後に日本仏教に於いて最大の僧として君臨した空海、最澄が秦氏なのは、そのことを裏付ける。あるいは、秦氏が百済系仏教を導入するのに対抗して、海部氏・尾張氏との関わりが深い新羅系仏教を蘇我氏が導入したとも考えられる。その後、秦氏によって仏教も百済系とされてしまったのである。

秦氏によって聖徳太子という架空の人物が創作されて蘇我氏は貶められ、更に中大兄皇子と鎌足による“架空の乙巳の変”により、蘇我宗家は没落させられた。それと共に、“架空の聖徳太子一族”も歴史から抹殺されたのである。

* 田道間守についての再考

海部氏・尾張氏が新羅と極めて密接な関係にあることが判明したので、田道間守についても別の見方ができる。(9)では“丹波”と“但馬”の関係から、“但馬＝田嶋＝田道間”となり、“たじま”は直接的に海部氏をも暗示している、とした。実は、田道間守についての系図がある。これは、前述の「古代天皇系図の世界」に記されている。漢字は異なるが読みは同じであり、古代では音表記が訓表記よりも優先するから、読みが同じならば同一と見なして良い。(同一と見なさなければ、どのように区別していたのか?) その系図は次の通りである。

- ・新羅国王一天之日矛 (アメノヒホコ) - 多遲摩母呂須玖 (タジマモロスク)
- 多遲摩斐泥 (タジマヒネ) - 多遲摩比那良岐 (タジマヒナラキ)
- 多遲摩毛理 (タジマモリ)、多遲摩比多訶 (タジマヒタカ)。

ここに見える多遲摩毛理こそ、田道間守だと言える。ならば、田道間守は新羅国王の血統で、その元は半島に渡った海部氏一族だから、田道間守はれっきとした海部氏の血統である。

田道間守は垂仁天皇の時代であるが、垂仁天皇は興味深い。まず、垂仁天皇の後妃は海部氏系が多い。後は丹波道主王の女、日葉酢媛命 (ヒバスヒメノミコト) であり、その娘には初代斎宮の倭姫命がいる。妃には迦具夜比売 (カグヤヒメ) という意味深な名前もあるし、綺戸辺 (カニハタトベ) との間には日本武尊の妃となった両道入姫命 (フタジイリヒメノミコト) がいる。また、垂仁天皇の時代には、次のようなことが起きている。(以下、Wikipedia 参照。)

- ・垂仁2年10月、纏向に遷都。
- ・同3年3月、新羅王子の天日槍が神宝を奉じて来朝。
- ・同25年3月、天照大神の祭祀を皇女の倭姫命に託す。
- ・同90年2月、田道間守に命じて、常世国の非時香菓を求めさせる。
- ・同99年7月、崩御。140歳 (日本書紀)、153歳 (古事記)。

纏向は海部宮司が言われたように、古代に於いて最重要の地で、邪馬台国の本拠地と考えられる。そこに遷都したということは、邪馬台国建国をこの時代に反映させているということである。(必ずしも、この時代に建国されたということではない。) そして、この時代から本格的に天照大神の祭祀が始まったとい

うことは、天照大神が海部氏と密接な関係があることを暗示している。

また、この時代に新羅から天日槍＝天之日矛が渡来している。天日槍について、記紀は次のように記している。

<古事記>

昔、新羅のアグヌマ（阿具奴摩、阿具沼）という沼で女が昼寝をしていると、その陰部に日の光が虹のようになって当たった。すると女はたちまち妊娠して赤い玉を産んだ。その様子を見ていた男は乞い願ってその玉を貰い受け、肌身離さず持ち歩いていた。ある日、男が牛で食べ物を山に運んでいる途中、天日槍と出会った。天日槍は、男が牛を殺して食べるつもりだと勘違いして捕えて牢獄に入れようとした。男が釈明をしても天日槍は許さなかったので、男はいつも持ち歩いていた赤い玉を差し出して、ようやく許してもらえた。

天日槍がその玉を持ち帰って床に置くと、玉は美しい娘になった。天日槍は娘を正妻とし、娘は毎日美味しい料理を出していた。しかし、ある日、奢り高ぶった天日槍が妻を罵ったので、親の国に帰る、と言って小舟に乗って難波の津の比売碁曾（ひめこそ）神社に逃げた。天日槍は反省して、妻を追ってヤマトへ来た。この妻の名は阿加流比売神（アカルヒメ）である。しかし、難波の海峡を支配する神が遮って妻のもとへ行くことができなかったので、但馬国に上陸し、そこで現地の娘、前津見と結婚した。

<日本書紀>

垂仁天皇 3 年春 3 月に、新羅王子・天日槍が 7 種の神宝、すなわち、羽太の玉、足高の玉、赤石、刀、矛、鏡、熊の神籬を持参して渡来した。播磨国、近江国、若狭国を経て但馬国の出石（いずし）に至り、そこに定住して現地の娘・麻多鳥（マタオ）と結婚した。

共に、海部氏の治める但馬国に定住したことは共通しているが、古事記の逸話は“丹塗り矢伝説”に類似している。また、古事記での神宝は珠が 2 個、浪振比礼（ひれ）、浪切比礼、風振比礼、風切比礼、奥津鏡、辺津鏡の 8 種となっており、現在、兵庫県豊岡市出石町の出石神社に天日槍と共に祀られている。これらの神宝はいずれも海上の波風を鎮める呪具とされているが、奥津鏡と辺津鏡は現在でも海部氏が所有している国宝であり、玉は海部氏に関係が深いから、天日槍は海部氏に極めて関係の深い人物と言える。何よりも、日本書紀では、はっきりと新羅王子と記されている。

なお、日本書紀では、アカルヒメを追いかける主人公が都怒我阿羅斯等（ツヌガアラシト）となっている。彼は意富加羅（おおから）国王の子であり、崇神天皇の時代に渡来したことになっている。その逸話を記す。（以下、<http://www.loops.jp/~asukaclub/syoki/syoki038.html> 参照。）

“御間城入彦五十瓊殖天皇（ミマキイリビコイニエノミコト、崇神天皇）の御世に、額に角が生えた者が、船に乗って越国の筍飯（けひ）の浦に流れ着いた。そこで、その地を角鹿（つぬが）＝敦賀と言う。彼は大加羅国（おおからのく

に)の皇子で、名は都怒我阿羅斯等と言った。彼はヤマトに聖王がおられると聞いてやって来た。彼は北海から出雲の国を経て辿り着いた。その時、天皇が崩御された。そのため、そこで留まって垂仁天皇に3年仕えた後、帰国した。垂仁天皇は赤織の絹を都怒我阿羅斯等に贈り、御間城天皇の御名をとってお前の国の名とせよ、と命じて帰国させた。そのため、その国の名は加羅から任那(みまな)へと変わった。都怒我阿羅斯等は賜った赤絹を自分の国の蔵に収めて大切に保管したが、新羅人がそれを聞いて兵を起こしてやって来て、その絹をすべて奪って行った。これから両国の争いが始まったという。”

この渡来の前の話は次のようになっている。

“都怒我阿羅斯等が黄牛(あめうし、あめいろの牛)に農具を負わせて田舎へ行った。ところが急に黄牛がいなくなってしまう。そこで足跡を追って行くと、ある村に着いた。見かけた老人に聞くと、役人が捕まえて食べてしまったという。その老人は、村へ行って代価に何を望むか問われたら村に祀られる神を望むよう、言った。都怒我阿羅斯等は村へ行って役人に会い、言われた通り、村の祀る神を頂いた。それは、白い石であった。その白い石を持ち帰って、寝屋の中に置いた。すると、石は綺麗な娘になった。彼は大変喜んで夫婦の契りを交わそうとした。しかし、彼が少し目を離したすきに娘はいなくなってしまう。彼は驚いて妻に尋ねると、東へ行ったという。彼は娘を捜し、海を越えてヤマトまでやって来た。娘は難波に行つて比売語曾社(ひめこそしゃ)の神となっていた。また、豊国の国前郡に行つて比売語曾社になったともいう。”

古事記とはかなり様相が異なっているが、物が娘に変化(へんげ)し、その娘がヤマトへ逃げて行つたので追いかけて、籠神社のある丹後地方に留まつたという大筋は同じである。(玉も、元は石である。)

日本書紀では“額に角が生えた者”を“角がある人=ツノガアルヒト=ツヌガアラシト”としている。彼は任那=加羅=伽耶の皇子であるが、伽耶は秦氏の拠点である。そして、垂仁天皇から賜った、宝にも相当する赤絹を新羅人が奪つたことによつて新羅と伽耶の争いが始まつたことは、海部氏・尾張氏(新羅派)と秦氏(伽耶派)の対立の象徴である。

逸話としては、新羅を中心とした話で“丹塗り矢伝説”に類似している古事記の方が真相に近いと思われる。そもそも、槍は剣と並ぶ武器であり、尾張氏が三種の神器の1つである草薙神剣を祀る以上、“槍”を名称に含む天日槍は海部氏・尾張氏系だと言える。そこに、秦氏縁の伽耶人の話を絡めたことは、海部氏・尾張氏の真相を秦氏が隠したことを暗示している。また、“敦賀”の地名の由来は前述の気比神宮の謂れと異なるが、気比神宮の謂れも秦氏の初代大王たる誉田別命(応神天皇)に関係しており、その母、神功皇后の新羅征伐に関連しているから、ここでも秦氏の新羅=海部氏・尾張氏に対する優位性という構造が一致している。

つまり、系図にあるように、やはり天日槍は新羅建国に関わつた海部氏縁の脱解王の子孫であり、田道間守はその子孫なのである。そうすると、田道間守

が行ったとされる常世国は、丹後王国と交易が深かった新羅である。常世とは理想郷のことであり、その原型はエデンの園＝シュメールであるが、シュメールは丹後から見て西側にあり、丹後から見て最も近い西の国は新羅で、そこは海部氏が建国した国に他ならないからである。

常世と言え、丹後風土記に依ると、幻の大地“凡海郷（おおしあま）”について記載されている。（前述の海部毅定氏の著書参照。）

“昔、大己貴神と少彦名神の二神がこの地に来られ、小さい島を寄せ集めて大地をこしらえられた。これを凡海郷と言う。ところが大宝元年（701年）3月、大地震が3日続き、この郷は一夜のうちに青い海に戻ってしまった。高い山の2つの峯が海上に残り、常世島（とこよじま）となった。俗には男島女島（おしまめしま）と言ひ、この島に天火明命、日子郎女（ヒコノイラツメ）神を祀る。海部直（あまべのあたひ）と凡海連（おおしあまのむらじ）の祖神である。”

和名抄の中には、この凡海郷は加佐郡内に実在した郷として名がある。この2つの島は現在、それぞれ冠島、杳島（くつじま）と言われ、籠神社の“海の奥宮”とされる禁足地である。大地震が大宝元年に起きて海に沈んだ、とあるが、実際には<日本の真相3>で記したように、約2千年前のニビルの接近時であろう。

また、(4)で大己貴神（大国主神＝大物主神の若い頃の名）が海部氏・尾張氏、少彦名神が徐福の象徴であることを記したが、ここでも海部氏・尾張氏＝大己貴神に協力した徐福＝少彦名神ということで矛盾せず、常世＝不老不死に関わる海部氏・尾張氏と徐福、という構造が一致している。そして、“小さい島を寄せ集めて大地をこしらえられた”ことは、出雲国風土記に於いて、八束水臣津野命（ヤツカミズオミツヌノミコト）が、出雲は狭い若国なので他の国の余った土地、佐比売山（さひめやま、三瓶山）と火神岳（ひのかみだけ、大山）に綱を掛けて引いて、島根半島や稲佐の浜、弓浜半島を造ったという出雲建国神話に類似している。そして、“狭い若国”というのは「合わせ鏡」で見れば“若狭”となって海部氏の領地であり、永遠の“若さ”で不老不死をも暗示しており、更に、海部氏・尾張氏も出雲も蛇神に大きく関わり、大己貴神は日本書紀では出雲の神とされているから、出雲との深い関係を暗示している。

なお、少彦名神は日本書紀の八段一書六に依ると、悪童的な性格を有するとされ、後に常世国へと渡り去った、とされている。（Wikipedia参照。）常世国へと渡り去ったことは、まさに徐福の象徴である。また、“悪童”の“童”という性格が桃太郎や一寸法師、かぐや姫、座敷わらしなどの“童、童女”に、“悪”という性格が“鬼”に関連する。鬼には角があるが、角がある人は都怒我阿羅斯等＝天日槍で海部氏の一族であり、徐福も共にその一族の仲間となったことは、“鬼”は最後まで秦氏に抵抗していた海部氏・尾張氏の象徴である。そして、<日本の真相3>で記したように、“ツノ”はヘブライ語で“カーラン”と言ひ、ラテン語では“コルン（コルヌ）”となり、“カーラン”には他に“光”という意味もある。（アレキサンダー大王はエジプトを去る際、モーゼの真似をして海を堰き止めさせ、その防波堤の上に塔と記念柱を建てさせ、頭に2本の角を付

けた自分の姿を彫り込ませた。また、聖書では様々な言語に訳される際に誤訳が生じて、ミケランジェロはモーゼの顔が光り輝いていたことを勘違いし、モーゼ像に角を付けてしまった。) 光の元は太陽であり、太陽神の大元はシュメールの太陽神ウツだから、“角”によってシュメールを重視している海部氏・尾張氏を象徴する。

また、物部氏を象徴するスサノオは、日本書紀では高天原を追放された後、檀国に降臨している。檀国とは、新羅のことである。スサノオは海を治めていたので海神であり、その海神が新羅に行ったことは、海神・綿津見神を祀る海部氏が新羅に渡ったということの象徴である。そして、スサノオの高天原追放は、邪馬台国から大和となった新生ヤマトを海部氏・尾張氏が秦氏に譲渡した(させられた)ことの象徴である。スサノオが降臨したのは檀国の“ソシモリ”とあるが、“ソシモリ”とは韓国語で“牛頭”という意味であり、スサノオが牛頭天王と言われる所以でもある。(更にその基は、インダスのシヴァ＝イナンナの暗黒の化身バイラヴァであることは<神々の真相 3>で記した。)

そのスサノオが新羅から戻って来たことも合わせると、このスサノオの逸話は、海部氏一族の者が新羅に渡って脱解王となり、その子孫である天日槍がヤマトに戻って来たことを象徴しているのである。そして、天日槍＝天之日矛の名に含まれる“槍、矛”は武器であり、尾張氏が祀る三種の神器の1つ、草薙神剣もスサノオが天照大神に献上した武器であることは、その裏付けとなる。

なお、多遲摩毛理の兄弟、多遲摩比多訶の娘が葛城高額比売命(カツラギノタカヌカヒメノミコト)となっているが、これなども海部氏・尾張氏と葛城氏の深い血縁を象徴している。

(c) 秦氏による正史乗っ取り

天智天皇の時代から天武天皇の時代にかけて、秦氏は歴史の表舞台に現れた。それが鎌足と不比等親子である。鎌足は天智天皇の妃を譲り受けて妻とし、以後、権勢を振るうようになった。だが、鎌足はあくまでも臣下であり、皇族ではないから、これは極めて不可解なことである。天智天皇の時代まで天皇家を外戚として守ってきたのが海部氏・尾張氏であり、海部宮司が言われるように“中臣と天智天皇の関係”が歴史的分岐点だとしたら、大化の改新の虚構性を考慮すると、天智天皇の妃を譲り受けて妻としたという逸話も、鎌足の権威を高めるための虚構と考えるのが妥当である。それにより、秦氏が歴史の表舞台に登場する準備が整ったのである。

また、前述の物部守屋と共に仏教導入に抵抗した中臣勝海の出自は不明であるが、鎌足と同じ中臣姓を名乗っているのに出自が不明とはおかしい。これは、勝海が守屋と共に仏教に抵抗している以上、勝海は物部氏であり、“本来の”中臣氏であることを暗示している。つまり、勝海は海部氏・尾張氏の物部王国で祭祀を司っていた神官家の中臣氏と考えられる。その家系を鎌足が篡奪して中臣姓を名乗り、天皇に代わって祭祀を司る重要な“格”を得て、秦氏が歴史の表舞台に堂々と登場してきたのである。それ故、勝海の本来の出自が隠されて

しまった。鎌足には神官としての性格が認められず、非常に早い時期に秦氏が導入した仏教に帰依しているのは、このことを裏付けている。

だが、それだけではない。天智天皇の弟、天武天皇の即位前の名は大海人皇子であり、何と、幼少期に養育を受けた海部氏一族の伴造、凡海氏に因む！当時、養育者から幼名を取るのは慣例だった。つまり、天武天皇は海部氏によって養育されているのである！天武天皇の和風諡号は天淳中原瀛真人天皇（アマノヌナハラオキノマヒトノスメラミコト）という極めて道教的な諡号である。（Wikipedia 参照。）

- ・“淳”：“玉のような、玉のように輝く”の意。“玉、勾玉”の意も。
- ・“中原”：“ちゅうげん”という読みで、“天下中央の地、天下”の意。
- ・“瀛”：“瀛州”で“支那の神仙思想に基づく仙人の住む島、東方海上にあるという三神山の1つ”の意。また<日本の真相3>で記したように、始皇帝と徐福の姓“嬴”にさんずいを付けた字で、彼らが求めた“不老不死、永遠”をも象徴している。
- ・“真人”：“真理を悟って人格を完成した人”あるいは“道教に於いて理想とされる最高の人、道の極致に達した人＝仙人”の意。

だから、“天淳中原瀛真人”とは、“地上に於いて仙人のように真理を悟った、玉のように輝ける人”という意味になり、ここでも“淳＝玉”で海部氏との深い関係を暗示している。“天”は“アメ、アマ”で天に坐す大神“アマ、アン”であり、“アン＝アウム＝オウム＝アーメン＝アルファでありオメガ”でもある。名称的には、チベット密教に於ける神々の名前の最初に“オウム”と付いていることと同じである。更に言うなら、“「生命の樹」の真理を悟って王権を授けられた人”という意味であり、初代天皇“神武”に呼応して“天武”であり、天武天皇から新生日本が始まった、ということを示唆する。そして、“武”の字は海部氏・尾張氏に関係の深い武内宿禰、日本武尊にも含まれ、いずれも王を先導したり、国を平定したりしていることに関わる。

(7)で述べたように、南北を向く神社の拝殿は支那の道教の影響であるが、元は東向きであった。このような現在まで続く神社の構造の変革も、そして“大王”から“天皇”という呼称の変革も、天武天皇の時代に不比等によって成された。天皇の宗教的権威が高められ、神宮の祭祀が重視されて新嘗祭と大嘗祭の区別などがされ、齋宮が制度化された。また、道教に基づく陰陽道を基礎とした占星台や陰陽寮も設置された。そもそも、“天皇”という呼称は道教の“天皇（てんこう）”“人皇”“地皇”から、神宮あるいは天照大神を示す“太一”も道教の天に於ける不動の星、北極星“太一”から持ってきたものであり、極めて道教的である。この道教が基となっているのが日本に於ける陰陽道であり、表のカッパーラである。つまり、天武天皇の時代から、名実共にカッパーラによる国造りが行われたということであり、それは物部氏ではなく秦氏の策であることを物語っている。日本最古の貨幣とされている富本銭も天武天皇の時代に発行されたが、この貨幣の“本”の字は“大”と“十”に分かれて書かれて

おり、“十字架に掛けられた人”を暗示するカッパラとなっていることは、極めて象徴的である。

しかし、おかしなことに、大海人皇子が天武天皇となるきっかけとなった壬申の乱に於ける尾張氏の活躍について、正史である日本書紀は黙殺している。何よりも、決戦の場となったのが“箸墓”だったのは象徴的で、大海人軍が圧勝したのにも関わらず、その記述があまりにも簡潔すぎるのも、意図的なものを感じる。天武天皇が不比等と協力して新体制を作り上げたにしては、極めておかしいし、日本書紀は天武天皇についての記載がかなりの部分を占めるのにも関わらず、天武天皇の生年月日が不詳なものも納得できない。つまり、天武天皇について隠しておかなければならない重要な秘密があるのである。

日本書紀は不比等が命じて作らせた。ならば、そこには不比等＝秦氏＝八咫鳥の意図が隠されている。それは、やはり海部氏・尾張氏の真相である。

天武天皇以前に皇統の危機に直面し、その時は北陸方面から継体天皇を迎えることによって解決した。皇統は代々継いでいくものだから、わざわざ“継体”などと名付ける必要は無いし、都から遠く離れた北陸方面からというのも腑に落ちない。しかし、北陸方面は海部氏の領地であり、海部氏は元々のヤマトに於ける皇統である。つまり、秦氏系の天皇の血統が絶えたので、ヤマトの元々の皇統である海部氏の王を天皇としたのが継体天皇であろう。その継体天皇の後は同族の尾張氏（尾張草香）の女、目子郎女（メコノイラツメ）であり、目子郎女は安閑天皇、宣化天皇の母である。これは、この時点で完全に皇統が海部氏・尾張氏系に戻ったことを意味している。

ならば、天武天皇は海部氏に養育され、和風諡号にも玉造りが盛んだった丹波地方の海部氏に関係の深い“玉”を意味する“淳”がある以上、海部氏の一族あるいは王だったと考えるのが妥当である。天智天皇は親百濟政策だったが、天武天皇は親新羅政策を取ったのも、海部氏一族だからと考えれば納得できる。では、日本書紀で海部氏・尾張氏の真相を黙殺しているにも関わらず、海部氏・尾張氏側の王を称えるような天武天皇の和風諡号は、どのように考えたら良いのか。それには、不比等らが擁する天智天皇の諡号も合わせて考えなければならない。

天智天皇の和風諡号は天命開別尊（アメミコトヒラカスワケノミコト）であり、“天命”を受けて“開＝新生日本の開闢＝根幹作り”の祖となったもう1人の尊、という意味であり、天武天皇に対してもう1人の、ということである。そして、鎌足が介入して準備が整った、その時代の天皇、ということである。そうすると、天武天皇の和風諡号の方が道教的だから、道教を基にした陰陽道を駆使し、日本書紀を編纂させた不比等らがこのような諡号を与えたかのように見える。

しかし、この“天智”という漢風諡号には他の意味がある。井沢元彦氏の「万世一系／日本建国の秘密の巻（徳間書店）」に依ると、殷の王、紂王（チュウオウ）は炮烙（ほうらく：油を塗った銅の丸木橋のようなものを猛火の上に渡したもの）の上を渡らせ、人が滑って落ちて死ぬところを見て楽しんだ、などと

いうとてつもなく極悪な王だったが、その紂王が身に付けていた首飾りのことを“天智玉”と言ったらしい。つまり、中大兄皇子の死後に“天智”と付けた人物は、天智は紂王に匹敵するほど悪い奴、という暗示をこの漢風諡号に込めているのである。ならば、“天智”という諡号を付けた人物は明らかに天武側の人物である。そして、自分たちの王である大海人皇子には“輝ける王”の称号を与え、道教的な文字のカッパーラをふんだんに施すことによって、如何にも不比等らが諡号を付けたかのような印象を与えているのである。そして、このような道教的カッパーラを駆使できるのは、何も秦氏に限られたことではない。徐福という方士＝カッパーラの使い手がいたことを思い出そう。徐福らは海部氏・尾張氏と友好関係を結び、婚姻などでほぼ同族化してしまったことはこれまでに述べた通りである。方士の末裔が海部氏・尾張氏側にいることは、極めて自然なことである。

このように、諡号で天智天皇と天武天皇の素性を暗示されてしまったが、日本書紀で天武天皇の背景を黙殺することによって、天智天皇は百済派で鎌足・不比等ら秦氏の大王、天武天皇は新羅派で海部氏・尾張氏の大王という真相を、そして本来の皇統は海部氏・尾張氏だという真相を隠してしまったのである。ならば、天智天皇は藤原系の傀儡（あるいは血統）と言えるだろう。

このような天智天皇と天武天皇の関係を象徴すると思われる、変わった御神事が尾張氏の熱田神宮で行われている。酔笑人神事（えようどしんじ）という御神事である。熱田神宮の社伝では次のように言われている。

“天智天皇 7 年（668 年）に新羅の僧・道行が、熱田神宮を参詣した折、清雪門より内部に侵入し、草薙神剣を盗み出した。（この事件以来、清雪門は“不開門（あかずのもん）”と呼ばれ、閉ざされたままとなっている。）道行は草薙神剣を持って祖国の新羅に渡ろうとしたが、嵐により果たせず、失敗に終わった。道行はその後捕らわれの身となり、草薙神剣は宮中で預かることになった。しかし、天武天皇の朱鳥元年（686 年）になって、草薙神剣は熱田神宮に返還された。これは、天武天皇が草薙神剣の強い神威によって病となり、崩御したことがきっかけであったとされている。”

酔笑人神事は御神体の草薙神剣が熱田神宮に還った故事を今に伝える神事である。5/4 の夜 7 時、境内の灯を消し、影向間社、神楽殿前、別宮前、清雪門前の 4 ヶ所にて、装束の袖に隠し持った面を 2 人の神職が袖の上から叩いて「オホオホ」と笑ったのをきっかけに、16 人の神職が同様に笑い、草薙神剣の帰還を祝う御神事である。

天智天皇の御世に盗まれたということは、天智側の鎌足、不比等らの策によって一旦没収された、ということを示唆し、それが天武天皇の御世に戻されたということは、天武天皇が海部氏・尾張氏側であることを暗示している。また、新羅の僧が盗んだことになっているが、天智系は百済系だから、本来は百済の僧が盗んだことにしなければならないが、海部氏・尾張氏・天武天皇が新羅系であることを隠すため、新羅系を陥れるための策とも考えられる。しかし、草薙神剣は御神器だから、いくら鎌足・不比等が没収しようとしても、触れるこ

とができるのは特定の血統だけなので、海部氏・尾張氏に関わりの深い新羅系の僧としたと考える方が妥当である。(昔は“崇り”というものをとても恐れていた。)

この時期に新生伊勢神宮が造営されているので、そのために三種の神器を一旦秦氏の手元に集めたのだろう。そして、写し身となる依り代に御魂分けした後、再配分したのであろう。それを、天武天皇が草薙神剣の強い神威によって病となって崩御したことにして、海部氏・尾張氏側を崇る神として陥れ、如何にも天武天皇が海部氏・尾張氏と対立したかのように見せかけている。

なお、“16人の神職”は皇室の十六弁八重表菊紋を象徴し、その原型は八角形で象徴されるニビルと金星の十六花卉ロゼッタで、イナンナを象徴していることは<神々の真相 2>で記した。また、“4ヶ所で16人の神職”に着目すると、“4つの宮で16本の御柱”を建てる諏訪大社に通じ、これもイナンナに関わることは前述の通りである。このように、海部氏と同族である尾張氏にも、イナンナの印が見受けられる。

同様な創作は、神功皇后の新羅征伐にも見られる。神功皇后は、卑弥呼を基にした創作人物とする説が学会ですら一般的である。卑弥呼は海部氏・尾張氏の女王だから神功皇后は親新羅のはずで、新羅を征伐することは矛盾している。しかし、神功皇后が架空の人物ならば、この新羅征伐も架空であり、百済派の秦氏にとって都合の良い創作と言える。これなども、秦氏が百済派、海部氏・尾張氏が新羅派で、卑弥呼が海部氏・尾張氏の女王だったことを隠している。

これまでは飛鳥氏の言うように、秦氏を新羅系と見なしてきたのだが、今回の一連の検証により、それは誤りであることが判明し、海部氏・尾張氏が新羅系なのである。

このように、日本の正史とも言える記紀が、神代の時代からかなり下ったこの時代に編纂されたこと自体、おかしなことであるが、それは秦氏が物部氏の歴史を都合の良いように書き換え、新生日本が始まったことに他ならない。確かに、初代天皇は応神天皇であるが、応神天皇は物部氏に婿入りしていた。その後、天智天皇に至るまで、実は物部氏、とりわけ海部氏・尾張氏が外戚として天皇家を守り、ある意味、権力も持っていた。しかし、天智天皇の時代から鎌足が布石を打ち、天武天皇の時代になって不比等を嚆矢として秦氏が外戚となり、政治は藤原氏、神道は鎌足が乗っ取った中臣氏の血統が現在に至るまで、権力を握っているのである。これが、海部宮司の言われる“中臣と天智天皇の関係”が暗示していることなのだろう。無論、その陰には八咫鳥がいることは言うまでもない。(鎌足、不比等は当然、八咫鳥である。)

また、海部穀定氏に依ると、大化の改新によって従来(くにのみやっこ)制度が廃止され、国造時代に行われていた政祭一致の様式が止められ、国造の氏人は国司の下に仕えるか、その地方の神社の神職等に転じて政治的立場を離れたという。籠神社のある丹後もご他聞に漏れず、丹波丹後が分国されて領地は大変狭くさせられ、外宮の豊受大神が籠宮(このみや、籠神社)から御

遷座されたのにも関わらず、その“事実”は後に編纂された記紀に記載されることは無く、外宮の元の大宮は丹波国与佐郡の真名井原にある与佐宮（籠宮）であることは、神宮の古伝と籠神社の秘伝にしか見られなくなってしまったという。これには中央集権的政治的意図が感じられる、と言われているが、前述のように、律令制度が本格的に始動したのは大宝律令からであり、大化の改新の虚構性からすると、やはり、実質的に律令制度が始まった天武天皇の時代から、このような勢力転換が行われたのである。それを取り仕切っていたのは、不比等＝秦氏に他ならない。

系図という点では、海部毅定氏は次のようにも述べている。

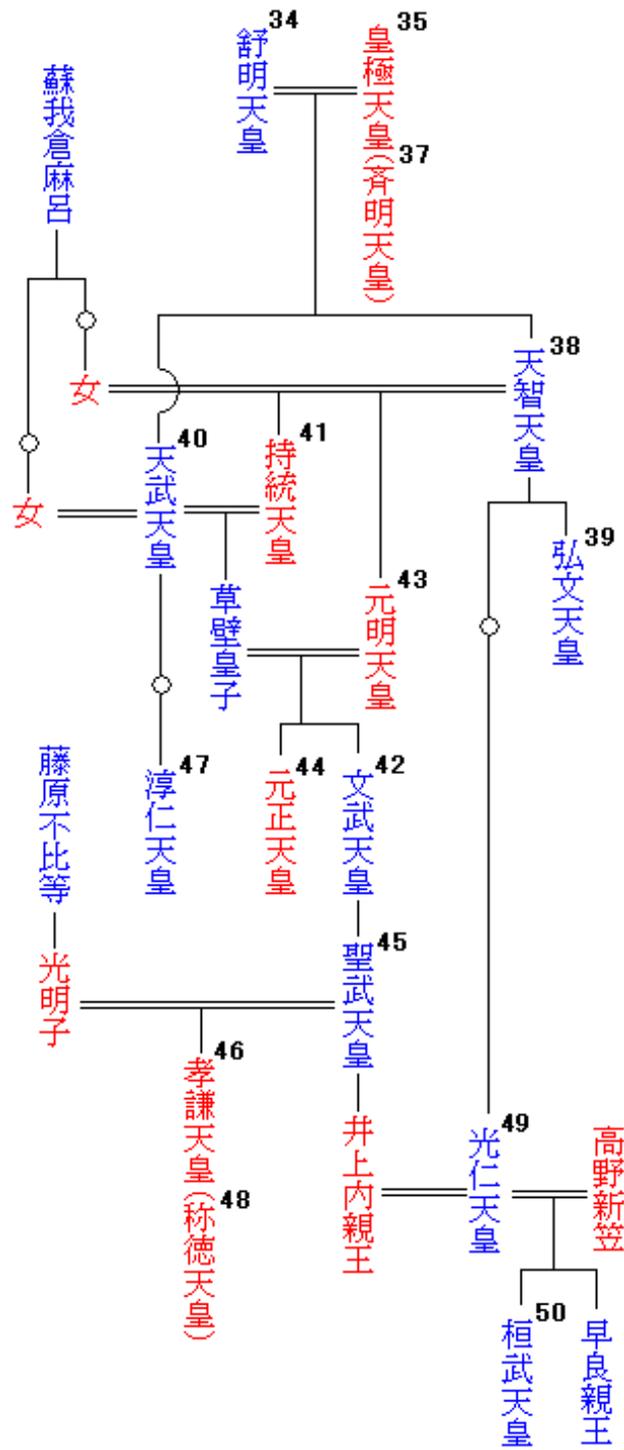
“神別系図の本宗とも言うべきものには、二大系図がある。1つは天神系神別系図であり、もう1つは地祇系神別系図である。前者は天孫本紀に、後者は地祇本紀に記されており、前者は尾張連等系図とも言われている。

天孫本紀の天火明命から12世孫・建稲種命に至る世系は注目されてはいないが、聖徳太子の時代に、蘇我馬子等が撰進するところと言われるほどであり、それが偽撰であったとしても、余程古い時代、少なくとも記紀撰進以前、おそらくは大化の改新以前、否、あるいは推古朝以前から存在していたであろうと考えられる古伝系であり、また、いわゆる神別系図としては、一大本宗系図とも言うべき基本系図であって、単に尾張連等世系などと呼称せられるべきものではないのである。

その天孫本紀10世孫以降の伝系は極めて簡素であり、その歴世の事歴もよく解らないようなものではあるが、考えようによっては、日本の国々が十分に統一国家としての形態を整えていなくとも、百余国があり、その大倭王が邪馬台国（やまとのくに）にいたると言われた時代の、いわゆる大倭王の伝系であったとも見られなくはないであろう。”

つまり、尾張氏に関係する系図は現在の正史とされている系図の大元であって、それは邪馬台国＝ヤマトの王族系図である、と言われているのである。根本系図の名称が尾張連等系図で、それが邪馬台国＝ヤマトの王族系図というのであれば、それはまさしく、邪馬台国の王族が海部氏・尾張氏であり、本来の皇統である、ということに他ならないのである。

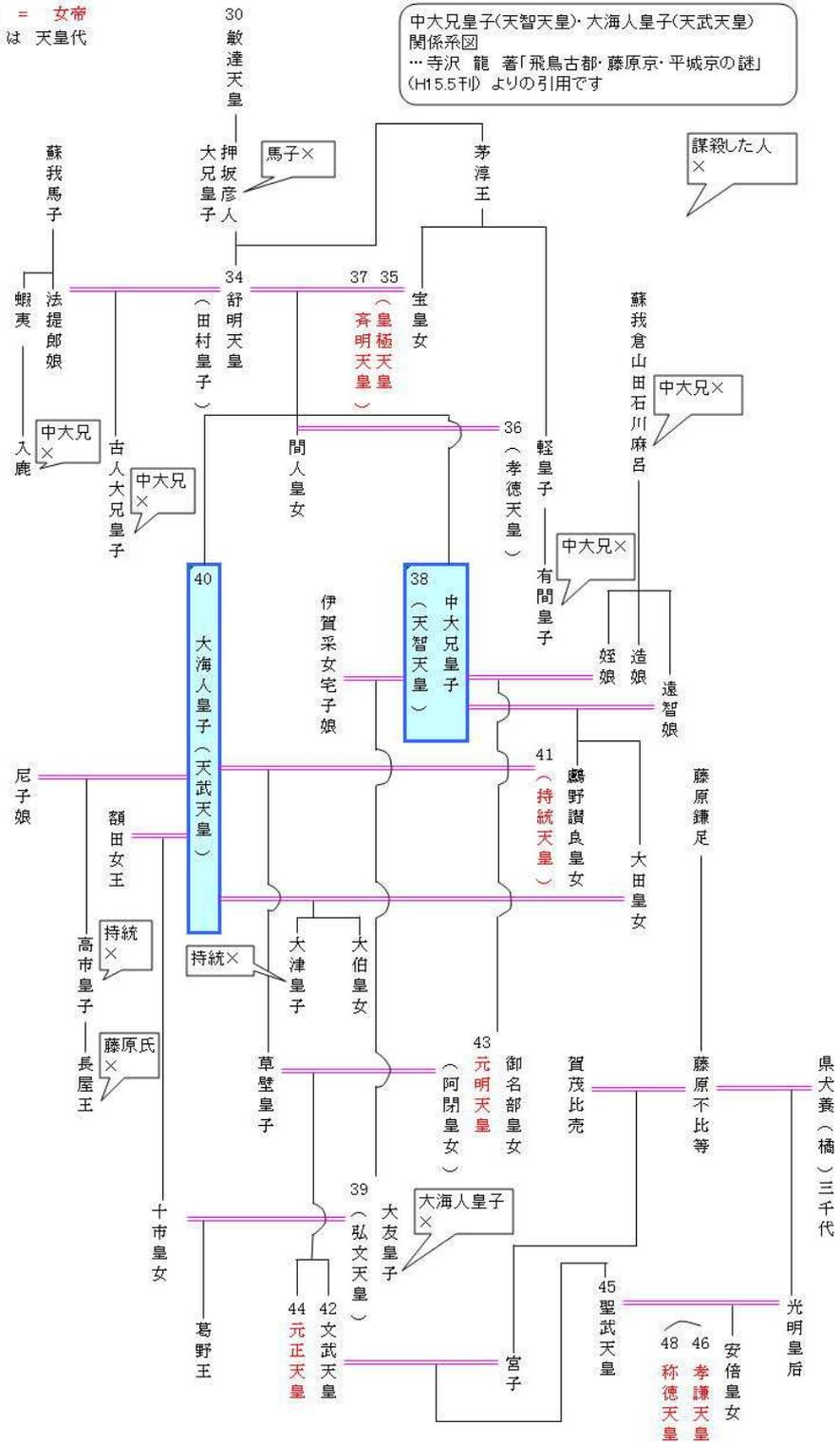
ここで、天智天皇・天武天皇から桓武天皇に至るまでの略式系図を見てみる。天智・天武の父とされているのは、海部氏の王で后が尾張氏の子郎女である第26代継体天皇から続く血統の第34代舒明天皇である。母は舒明天皇の異母兄の茅渟王（チヌノオオキミ、生没年不詳、“渟＝玉”で海部氏との深い関係を暗示）の娘で第35代皇極天皇（＝第37代齐明天皇）である。つまり、ここまで海部氏・尾張氏の血統が続いていると言える。



(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E6%AD%A6%E5%A4%A9%E7%9A%87> 参照。)

赤字 = 女帝
数字は 天皇代

中大兄皇子(天智天皇)・大海人皇子(天武天皇)
関係系図
…寺沢 龍 著「飛鳥古都・藤原京・平城京の謎」
(H15.5刊) よりの引用です



(<http://homepage1.nifty.com/TSU-KOMORI/ASUKAKEIZU.htm> 参照。)

この系図では女性天皇が多く見受けられるが、それもそのはず、女性天皇のほとんどが孝謙天皇＝称徳天皇までの時代であり、その後は江戸時代の明正天皇まで存在しない。つまり、女性天皇は実質的に孝謙天皇＝称徳天皇の時代までであり、江戸時代の明正天皇と後桜町天皇は例外、と見なすのが適切である。

初の女性天皇は推古天皇だが、前述のように、推古天皇の母は堅塩媛で蘇我稻目宿禰の娘であり、蘇我氏は海部氏・尾張氏と同義で、極めて海部氏・尾張氏色が濃厚である。これは、国譲りはしたものの、依然として海部氏・尾張氏が政治的実権を握っていたのであり、それ故、応神天皇以降推古天皇の時代まで、秦氏の大王たる天皇の足跡が見られないのだろう。何よりも“推古”という諡号は“古を推し量る”という意味なので、女帝＝女王の古を推し量ることは、卑弥呼（とトヨ）の時代を反映している、ということに他ならない。

この系図から解るように、男系男子で見れば第47代淳仁天皇までは確実に天武天皇＝海部氏・尾張氏の血統だが、第49代光仁天皇からは天智系となっている。しかし、鎌足－不比等という表の秦氏の策略により、第45代聖武天皇は不比等の娘を后とし、実質的にこの時点から鎌足－不比等という表の秦氏が外戚として権力を握っていく土台となった。聖武天皇の後、光明子（コウミョウシ）は不比等の娘であり、実母も不比等の娘、藤原宮子娘（フジワラノミヤコノイラツメ）である。そして、第49代光仁天皇からは完全に天智系に替えられ、以後、藤原氏は天皇家の外戚として権力を振るった。それは権威と権力を分離し、権威は天皇が、権力は藤原氏が持ったために可能となったのである。

このように見てくると、天智天皇と天武天皇は“正史”上の兄弟とされているが、天武天皇は海部氏の王、天智天皇は藤原系の傀儡王であり、実際には兄弟ではないのである。だから、中大兄皇子＝天智天皇はかなりの数の蘇我系を謀殺しており、大海人皇子＝天武天皇は天智系の大友皇子を謀殺している。ここで注目すべきは持統天皇による天武系の謀殺である。持統天皇は天武天皇の後だが、天智天皇の娘でもある。つまり、仲睦まじかったとされている天武天皇と持統天皇の関係も、天智系＝鎌足－不比等の秦氏による虚構と言える。ある意味、親しく天武に近付いた持統は天智側のスパイだったとも言える。天武との間にできた草壁皇子が即位していないのは、そのことを示唆していよう。

表の秦氏＝鎌足と不比等が天智帝の時代から策を勞し、聖武帝の時代から本格的に政治的権力を握るようになった。天武帝は道教に基づく桃源郷思想を基に、藤原京（とうげんきょう）を建造したとされているが、実質の指導者は不比等である。だから、“藤原”の字を当てている。その後、支那の道教を取り入れた陰陽道と律令制に基づく本格的な制度が始まったのは、平城京遷都後である。遷都は710年の元明帝の時代に行われ、715年に元正帝が即位した。その後、724年に不比等の娘を后とする聖武帝が即位し、本格的な律令国家が始まったのである。

しかし、簡単にはいかなかった。それは、有名な長屋王である。長屋王の父は天武天皇の皇子である高市皇子（タケチノミコ）、母は天智天皇の皇女である御名部皇女（ミナベノヒメミコ）であり、皇族の血統である。これを裏付ける

資料として、日本霊異記の“長屋王の変”に関する説話では“長屋親王”と称されており、“親王”という称号は皇子あるいは皇孫に天皇から直接親王宣下されない限り名乗れなかったことから、長屋王は明らかに天武系男系皇統である。ならば、その背後には海部氏・尾張氏が存在する。それ故、平城遷都後も、藤原不比等が右大臣となって政治権力を握ったものの、舎人親王や長屋王ら皇親勢力が不比等に対抗していた。

もし長屋王が即位することになれば、それは海部氏・尾張氏の権勢維持を意味する。そのため、長屋王は母が天智系で不比等の娘を妻としていたものの、その存在は藤原氏にとって邪魔であった。不比等の死後、不比等の娘で聖武天皇の生母である藤原宮子の称号を巡って長屋王と藤原四兄弟が衝突した辛巳事件をきっかけに、その対立は激しくなった。そして、729年に長屋王が謀反の疑いにより自害した。(長屋王の変)しかし、これは対立する藤原氏の陰謀とも言われている。

(以下、<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B1%8B%E7%8E%8B> 参照。)

“漆部君足(ヌリベノキミタリ)と中臣宮処東人(ナカトミノミヤコノアズマビト)が「長屋王は密かに左道を学びて国家を傾けんと欲す」と密告があり、それを受けて藤原宇合(ウマカイ)らの率いる六衛府の軍勢が長屋王の邸宅を包囲し、舎人親王などによる糾問の結果、長屋王はその妃、吉備内親王と子の膳夫王(カシワデノオオキミ)らを縊り殺させ服毒自殺した。これが長屋王の変である。讒言であったとする説が強い。聖武天皇は病弱で事件当時には非藤原氏系の安積親王しか男子がいなかった。政治的な対立もさることながら、天皇と安積親王に何かあった場合には天皇の叔母・吉備内親王の生んだ男子(当然、長屋王の息子でもある)である膳夫王ら三王が男系皇族での皇位継承の最有力者となる筈であったことも長屋王排除の理由として注目すべき点である。

王の没後、藤原四兄弟は妹で聖武天皇の夫人であった光明子を皇后に立て、藤原四子政権を樹立するも、天然痘により4人とも死没してしまった。王を自殺に追い込んだ祟りではないかと噂されたという。なお続日本紀に依ると、中臣宮処東人が長屋王のことを誣告した人物の1人であることが記載されているが、“誣告(ぶこく)”と記載されていることから、同書が成立した平安時代初期の朝廷内では、長屋王が無実の罪を着せられたことが公然の事実となっていたと推定される。”

このようにして、海部氏・尾張氏の権勢は削ぎ落とされていったのである。更に、天武系天皇は皇室の菩提寺でも祀られていない。その菩提寺は泉湧寺(せんにゅうじ)だが、井沢元彦氏の「ビジュアル版 逆説の日本史2 古代編①(小学館)」に依ると、天智天皇(第38代)とその孫の光仁天皇(第49代)から昭和天皇に至る歴代天皇と皇后の尊牌(位牌)を祀っているのにも関わらず、天武の直系並びに天武系と婚姻関係を結んでいた天皇が祀られていない。また、平安時代、天武系の天皇陵に対しては奉幣の儀も行われていない。これなども、海部氏・尾張氏の血を引く天武系天皇と、天武系と婚姻関係を結んでいた天皇が無視されていることの一例である。

しかし、前述の「女帝」誕生の謎に依ると、天武系男系の最後の天皇、聖武天皇は藤原氏に抵抗している。東大寺要録のある文書に、聖武天皇が橘諸兄（タチバナノモロエ）らを神宮に遣わし、東大寺建立の祈念を行わせたところ、天皇の夢枕に光り輝く天女が現れ、日輪は大日如来であり、本地は盧舎那仏（るしゃなぶつ）であることを教え、仏法に帰依すべきと告げた、という。これが、大日如来、日輪、天照大神が同一であるという神仏習合の考えの根源となった。

* 盧舎那仏 (Wikipedia 参照)

毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）の略であり、大乘仏教における仏の 1 つである。毘盧遮那とはサンスクリット語の Vairocana（ヴァイローチャナ）の音訳で光明遍照（こうみょうへんじょう）を意味する。真言宗などの密教では摩訶毘盧遮那仏（Mahāvairocana、マハー・ヴァイローチャナ）、大日如来と呼ばれ、成立の起源を、ゾロアスター教の善の最高神アフラ・マズダーに求める説がある。仏像では、聖武天皇の発願により造られた東大寺盧舎那仏像（大仏）が有名である。

続日本紀に依れば、天平勝宝元年 4 月、聖武天皇は東大寺に行幸し、大仏に北面し、自らを「三宝（仏）の奴」になぞらえて卑下した、とある。天子は南を向き、臣下は北を向くのが不比等以後の道教的陰陽道の秩序である。天皇が北面したということは、仏の前に頭を垂れ、その“奴（奴隸、しもべ）”となったということである。つまり、神道祭司のトップが仏教に帰依して、神道の神よりも仏教の神（仏）の方が上だということを示したのである。江戸時代の国学者、本居宣長は、この聖武天皇の行動を浅ましく悲しいと述べ、目を塞いで見ぬ振りをすべきだ、とまで言っている。国学者は神道学者だから、当然のことだろう。では、この聖武天皇の行動の真意は何なのか。

東大寺は聖武天皇の詔によって造営されたが、造営の中心となったのは秦氏に関わりの深い百済系渡来人であり、当然、実質的には不比等が指揮していたと思われる。そして、初代別当の良弁（ロウベン）は秦氏中の秦氏である。（百済系渡来人ともされているが、百済系ということで、秦氏を象徴している。）また、前述のように聖武天皇の後、光明子は不比等の娘であり、実母も不比等の娘、藤原宮子娘である。それ以前は、皇后は不測の事態に備えて必ず皇族から出されていた。それを、不比等が強引に変えさせたのである。鎌足－不比等は、いわば謀略により権力を奪ってきた。その仕上げが、“正史”である日本書紀の編纂や神社・神道の改革である。神社・神道の改革に於いては、祝詞も中臣系祝詞に替え、その基となる神話も変えて創作した。元々男神だった豊受大神（天照国照彦天火明命）を女神・天照大神に変更された中臣神道は、本来の海部氏・尾張氏の神道とは異なるものである。

聖武天皇は不比等らの傀儡ではあるが、確実に天武天皇の血＝海部氏・尾張氏の血も引いている。そのため、手段を選ばない不比等らの謀略にとうとう耐えられなくなったのであろう。あるいは、裏に海部氏・尾張氏の策があったのかもしれない。そこで、大仏に北面して頭を垂れることにより、不比等らが創作した新生中臣神道を否定したのである。つまり、鎌足－不比等＝秦氏に対す

る天武系＝海部氏・尾張氏最後の抵抗なのである。しかし、その後の桓武天皇以来、天智系＝藤原系が続いている。

(d) 以後の日本史

以後の日本史に於いても、やはり海部氏・尾張氏系が台頭してくるたびに潰されている。

① 熱田神宮

大宮司は尾張氏だったが、平安時代に京都の藤原系千秋（せんしゅう）家に替えられた。

② 源氏

史上初の征夷大將軍となった頼朝の母は熱田神宮宮司の娘である。頼朝は手厚く熱田を保護した。しかし、東平氏である北条氏によって滅亡させられた。

③ 信長

織田一族は、福井県丹生郡織田町が先祖の地で、織田町に代々いた忌部氏が織田家のルーツだと言われている。織田剣神社の神官の出自ともされている。

(<http://homepage1.nifty.com/saizou/oiti.htm>、Wikipedia 参照。)

福井県丹生郡は海部氏の領地であり、“剣”に関わり熱田神宮とも繋がる。“丹生”は不老不死の妙薬のことであり、海部氏・尾張氏が根源である。信長は本能寺の変で秦氏の明智光秀により暗殺されたが、光秀は後に天海となり、陰陽道で江戸の基礎を固め、家康を補佐した。

④ 秀吉

秀吉は信長の片腕となり、最終的には天下統一した。しかし、秀吉一族は大坂で秦氏の中の秦氏である家康軍により滅亡させられた。初の征夷大將軍となった頼朝が、東平氏の北条氏に討たれたように。

秀吉の印は千成瓢箪である。瓢箪＝瓠瓜は籠神社の奥宮、瓠宮大神宮＝吉佐宮を象徴している。そして、死後、豊国大明神として豊国神社に祀られたが、籠神社の豊受大神の“トヨ”、邪馬台国の卑弥呼の後を継いだ“トヨ”を象徴している。

⑤ 家康

信長、秀吉は共に尾張の武将であり、両者の滅亡には三河の家康が関わっている。しかし、家康の実態は秦氏の中の秦氏、鴨氏である。江戸は家康、京都は天皇家（秦氏の大王）で、裏はどちらも八咫鳥が支配する。

⑥ 島津氏

江戸時代の有力秦氏とされているのが薩摩の島津氏である。しかし、島津氏は外様大名で何かと幕府から圧力を掛けられていた。（例えば、尾張の木曾三川治水工事などでは、かなりの工事費が掛かり、死者も多く出た。）同じ秦氏なら

ば、これはおかしなことである。

薩摩人は元々隼人（はやと）と言われており、古代日本に於いて、薩摩・大隅に居住した人々のことである。本土とは風俗習慣を異にして、しばしば大和の政権に反抗した。やがて大和王権の支配下に組み込まれ、律令制に基づく官職の1つとなった。（Wikipedia 参照。）

大和に抵抗していたことは、海部氏・尾張氏と重なる。そして、現在の地名“鹿児島”の“鹿児島”は海部氏・尾張氏の祖、天火明命の子、天香語山命（アメノカゴヤマノミコト）と籠神社奥宮の本来の御神体、天香語山を象徴している。海部宮司に依ると、“カゴ=カグ”は“光の輝き”に由来する言葉だという。更に、鹿児島島の南の奄美は“海美”とも書け、海に関わりの深い一族の関与を示し、更に南の琉球は籠神社と関係の深い“龍宮”を連想させる。そして、沖縄ではノロやユタなどの巫女、山などの自然崇拜、ワタツミ信仰など、海部氏・尾張氏と深い繋がりがあることは<日本の真相3>でも記した。

また、鹿児島島の隣は熊本であるが、日本武尊に征伐された熊襲などから“熊=kuma”という字は敵対する民族を象徴していることは<日本の真相3>で記した。これは、征服者側から見た“敵”である。この場合の熊襲は隼人の一族と考えられ、日本武尊は秦氏を象徴し、秦氏が海部氏・尾張氏の雄を利用していることになる。また、海部氏の祖に建振熊宿禰（タケフルクマノスクネ）という“熊”の字が入った人名がある。つまり、熊本も海部氏に縁の地であることを暗示している。その証拠に、熊本には阿蘇山という有名な火山があるが、籠神社の鎮座する前の海の名称は阿蘇湾である。

そして、その隣の宮崎には天孫降臨神話があり、飛鳥氏のカッパーラでは秦氏の大王と見なされている。しかし、これも実は間違いで、基の話は海部氏・尾張氏にある。それは、天火明命とその子の天香語山命は最初からヤマトの地に降臨したが、天火明命の孫である天村雲命（アメノムラクモノミコト）は最初に日向国に降臨し、それから丹波、ヤマトへと降臨したことになることである。だから、宮崎が“天孫”降臨の地となっている。神宮の元々の神官である渡会氏は海部氏・尾張氏と同族で、天牟羅雲命=天村雲命を祖に持つ。天村雲命は日向国の高千穂に降臨し、阿俣良依姫（アイラヨリヒメ）を娶ったが、神武天皇の妃は日本書紀では吾平津姫（アヒラツヒメ）、古事記では阿比良比売（アヒラヒメ）であり、阿俣良依姫の名を基にして神武天皇の妃の名を秦氏が創作したことが伺われる。

天村雲命はとても重要な神であり、天祖から授けられた天押穂井の水を高千穂の御井に崇め置かれたが、それを丹波の真名井（籠神社奥宮）に遷されたことは、豊受大神を丹波国真名井の原へ遷し祀られたことになる。（天村雲命には天忍男命（アメノオシオノミコト）という子がいるが、押穂は忍男に通じ、記紀での天押穂命（ニニギの父）の原型である。）この逸話は、神水あるいは水に関係する物が高千穂から籠神社に持って来られたことを象徴しているが、籠神社に元々あった神器はマナの壺であり、それに因んで“真名井”であることは<日本の真相>で記した。また、“天村雲”は“天村雲剣=草薙神剣=アロンの

杖”を象徴するが、尾張氏がアロンの杖を持っており、そこに真沸流＝応神天皇がマナの壺を婿入りの印として持って来て、海部氏がマナの壺を預かったことも<日本の真相>で記した。つまり、この逸話は三種の神器の1つ、マナの壺の移動経路を象徴していると考えられる。記紀では天村雲命を神武天皇としているが、神武天皇＝応神天皇なので、“マナの壺”という観点からはこの考察は正しいと言える。これは、あくまでも“マナの壺”という観点での話＝カバーであるが、実際に天村雲命＝応神＝神武天皇だとしたら、神武東征神話では丹波には行っていないので、神武＝応神天皇＝天村雲命という真相、そして、真沸流＝応神天皇が海部氏に婿入りした真相が隠されていることになる。ただし、この話だけでは、必ずしも実際の人物として天村雲命＝応神天皇とは限らないことに注意しなければならない。

さて、高千穂には天逆矛があるが、天に向かって突き刺さっている逆向きの矛であり、「生命の樹」を象徴することは言うまでも無い。また、“天への矛”ということで海部氏の祖である天之日矛を連想させる。天之日矛＝天日槍は海部氏一族の者が新羅に渡って脱解王となり、その子孫である天日槍がヤマトに戻って来たことを象徴しており、その姿はスサノオにも重ねられ、名に含まれる“槍、矛”は武器であり、スサノオが天照大神に献上した草薙神剣も武器であることは前述した。つまり、矛は剣と並ぶ武器だから、天之日矛は同じ武器である剣を象徴する天村雲命と大きな関連がある、あるいは同一人物とも言え、宮崎もまた海部氏・尾張氏に縁の地なのである。

なお、日本書紀では天之日矛＝都怒我阿羅斯等は但馬国の出石に至って定住したされているが、天村雲命に葛木出石姫（カツラギイズシヒメ）という子があり、やはり天之日矛と天村雲命の共通点が見出せる。そして、出石姫の母は、籠宮祝部氏の伝に依ると伊加里姫（イカリヒメ）と言い、丹波の生まれとされている。これからも、葛木氏＝葛城氏は海部氏・尾張氏と同族と言える。

更に、三叉の矛と言え、ギリシャ神話の海神ポセイドンが持っているシンボルであり、ポセイドンの原型は海神エンキ＝ヤーであり、これも籠神社の月神＝豊受大神＝水神ヤーと一致するので、逆矛も海部氏・尾張氏との深い関係を象徴している。

閑話休題。ここで、島津氏に関する重要な手掛かりを得た。それは、先日訪れた大阪の住吉大社である。住吉大社は摂津国一ノ宮であり、全国の住吉神社の総本宮である。謂れは、第14代仲哀天皇の妻である神功皇后が新羅に出兵する際、住吉大神の力を頂き、国の安定を築くことができたため、住吉大神のお告げによって、この地に祀られることになったという。ここは変わった造りをしている。本宮は4つあり、第一本宮～第三本宮までは縦に、第四本宮は第三本宮の横に並ぶ縦並びの配置で、いずれも西（大阪湾）に向かって並ぶ住吉大社だけの建築配置である。祭神は次の通りである。

- ・第一本宮：底筒男命（ソコツツノヲノミコト）
- ・第二本宮：中筒男命（ナカツツノヲノミコト）
- ・第三本宮：表筒男命（ウワツツノヲノミコト）

・第四本宮：神功皇后

底筒男命、中筒男命、表筒男命はいずれもイザナギが黄泉国から帰還して穢れ、海中で禊祓（みそぎはらい）をした際に出現された神々で、住吉大神と言われる。つまり、海神であり、対になるのが女神の宗像三神である。そして、卑弥呼をモデルとしていると言われる神功皇后も祀られていることは、海部氏・尾張氏を象徴していることになる。その証拠に、摂社の若宮八幡宮では誉田別命と武内宿禰が祀られている。また、同じく摂社の志賀神社では、底津少童命（ソコツワダツミノミコト）、中津少童命（ナカツワダツミノミコト）、表津少童命（ウワツワダツミノミコト）が祀られているが、住吉大神と共に出現された海の神々とされ、いずれも“ワダツミ＝ワタツミ”で籠神社での綿津見神と同じである。東ではなく、大阪湾に向かっているのも、海神であることを象徴しているのであろう。あるいは、九州側からヤマトに入る際にここを通ることから、侵入者に対する威嚇の意味もあるのだろうか。

このような海部氏・尾張氏と関わりが深い住吉大社の境内に“誕生石”という石があった。これは、頼朝の愛妻、丹後局（タンゴノツボネ）がここで出産した場所と伝えられ、その子が薩摩の島津氏の始祖、島津忠久公とされている！つまり、海部氏・尾張氏を象徴する大社の中に、熱田神宮と関わりの深い頼朝と、ずばり籠神社を象徴する“丹後局”という名の女性との間にできた子が、島津氏の祖だというのである。前述の薩摩隼人の話も合わせると、やはり島津氏は海部氏・尾張氏の流れを汲む一族と言える。だからこそ、尾張の治水工事に駆り出されたりしているのである。

そして幕末、薩摩は長州と共に開国を進めたが、薩摩の指導者、西郷は非業の死を遂げ、現在に至るまで、国の中樞は長州が取り仕切っているのである。明治天皇も、長州が担ぎ上げた天皇なのである。

これで、古代からの歴史の流れが海部氏・尾張氏の真相隠し、ということで一貫性があることを理解できよう。

更に、住吉大社で驚いたのは、御紋が神宮とまったく同じことである。



神職に伺うと、神宮と同様に20年毎に本殿を新しく建て替える遷宮を行うことなどが由来しているのではないのでしょうか、ということだったが、詳しい理由は解らない、とのこと。しかし、ヒントとなる回答が得られた。それは、この御紋が神功皇后の新羅出兵の際、皇后が身に付けられていた鎧にあった御紋、ということである。

卑弥呼は海部氏・尾張氏の女王であり、神功皇后並びに女神としての天照大神の原型である。また、卑弥呼の後を継いだのはトヨであり、“豊”という字と関係がある。そして、神宮は女神としての天照大神を内宮で祀り、籠神社の祭神、豊受大神を外宮で祀り、外宮・内宮共に元伊勢と言われるのは籠神社だけである。つまり、神宮＝天照大神に隠された秘密が卑弥呼とトヨ、籠神社に大きく関わっていることが、この御紋で暗示されているのである。

また、前述の箸墓古墳は一般的に卑弥呼の墓と見られている。海部宮司の父、海部毅定氏も著書「元初の最高神と大和朝廷の元始」の中で、箸墓が卑弥呼の墓である、とされているが、海部宮司はトヨの墓ではないか、と言われ、ここでも卑弥呼とトヨが重なっている。現在、公式には、箸墓古墳は古事記に従って第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトトヒモモソヒメ）の陵墓として管理されており（日本書紀では崇神天皇の祖父、孝元天皇の姉妹である）、箸墓の謂れは次の通りである。（Wikipedia 参照。）

“倭迹迹日百襲姫命は紀元前92年に崇神天皇に頼まれて、災害が続く理由を占うと、三輪山の大神主神が神懸かりして、我を祀れば国は治まる、と言われた。そこで、天皇は大神主神の子である大田田根子を大神神社の祭主にすると、平和になったという。また、紀元前88年には、四道将軍の1人である大彦命が聞いた童歌から武埴安彦命（タケハニヤスヒコノミコト）の反乱を予言し、更に彼の妻の吾田媛（アタヒメ）と二手に分かれて攻めてくるとも予言して的中させており、巫女的性格である。

その倭迹迹日百襲姫命は大神主神の妻となったが、この神は夜にしか通って来ず、姫は姿を見たことがなかった。そこで、夜明けの明かりで姿を拝見したいと姫が願ったので、神はその願いを受け入れ、姫の櫛箱の中に入れていよう、と答えた。朝になって姫が櫛箱を開けると、中に美しい小蛇がおり、姫は驚いて泣きだした。すると、神は人の姿に戻り、恥をかかせてくれたな、と言って三輪山に帰ってしまった。姫は大変後悔して、そのはずみに箸で陰処（ほと、陰部）を突いて死んでしまったので、その墓は箸墓と呼ばれるようになった。”

まず名称に「倭」「日」がある。「迹迹＝とと＝魚」で、“魚”はエンキの象徴である。（大田田根子の“田田”も同様か？）「百」は「(唯)一ノ日」であり、「襲」は「蘇＝よみがえり」でもあるが、「百＝もも＝桃」とも見なせる。イザナギが黄泉の国から逃げ帰る際に、追いかけて来る黄泉の軍勢に剣を振り回しながら、そこに生えていた桃の実を投げつけてやっと退散させたので、「百＝桃、襲＝蘇」は黄泉の国からの帰り＝蘇りを象徴している。（その黄泉の国の穢れを払う際に生まれたのが、前述の住吉大社の海神たちであり、最後に天照大神とスサノオ（と月読命）が生まれた。）また、「桃」の“兆”は“芽生え”“古代の占いに於ける亀の甲を焼いてできる裂け目の形、転じて、物事が起こる前ぶれ”の意であり、新たな誕生の前兆、ということであ、“蘇り”は新たな誕生でもある。

そして大神主神は、日神を崇めて“蘇り＝復活”伝説の元となった海部氏・尾張氏の主神で日神でもあるが、これに似たような話が記紀にもある。

古事記では、天照大神が機屋で神に奉げる衣を織っていた時、スサノオが機屋の屋根に穴を開け、そこから皮を剥いだ馬を投げ入れると、天照大神の侍女が驚き、梭（ひ）で陰部を突いて死んでしまった。日本書紀では侍女ではなく、天照大神自身が傷ついたことになっているので、両者を合わせると、天照大神自身が陰部を突いて死んでしまったことと同意である。何よりも、神話に於けるこの事件は、天岩戸隠れを引き起こした最大の事件である。その最大の事件のきっかけとなる場面に於いて、天照大神は“神に奉げる衣を織っていた”のだから、最高神は天照大神ではなく他にいることを暗示しており、“神に奉げる”のだから、天照大神は神に御奉仕する巫女的存在である。実は、天照大神の日本書紀に於ける別名は大日靈貴神（オオヒルメノムチノカミ）であるが、“靈=靈（れい）”は“靈”の旧字体で、音を示す“霽（れい）”の下に“巫=巫女”があり、“神の降りてくる巫女”を意味するので、“大日靈貴神”の真意は“大いなる日神が降臨する巫女”という意味であって、“日神である女神”ではないのである。つまり、記紀に於けるこの場面での天照大神の姿が、完全に倭迹迹日百襲姫命に重ねられる。そして、箸で陰処を突くことなどあり得ないことだが、わざわざあり得ない話を創作することにより、女神としての天照大神と倭迹迹日百襲姫命が同一であり、古代史の真相を紐解く鍵としているのである。

また、天照大神が日神の女神ではなく日神が降臨する、すなわち、日神に仕える巫女ならば、それは“日巫女”とも書けるから、卑弥呼となる。卑弥呼の没したとされる年代前後、紀元 247 年 3 月 24 日と 248 年 9 月 5 日の 2 回、北部九州で皆既日食が見られたことが天文学上の計算より明らかになっているが（Wikipedia 参照）、古代、太陽は神そのものと見なされ、その神が日中に隠れてしまうことは、とても不吉なことと考えられ、指導者の不徳がそのような事態を招くと考えられていた。そのため、不吉な日食は卑弥呼のせいとされ、暗殺されたという説が「たけしの教科書に載らない日本人の謎（2010 年 1 月放送分、日本テレビ系列）」という番組で紹介されていた。もし、日神を祀っていた卑弥呼とトヨが、いつからか祀られる側＝日神、女神としての天照大神に替えられたとしたら、卑弥呼が死んでトヨがその跡を受け継いだことは、天岩戸隠れそのものであり、その当時に起きた日食は、太陽が隠れて復活したことを象徴していることになる。

その卑弥呼には弟がいて、彼が人々に御神託を伝えていたとされるが、天照大神にも弟スサノオがいることはこれに対応し、卑弥呼の姿が投影されている。また、魏志倭人伝では卑弥呼について、“男弟有り、佐（助）けて国を治む”と記述されているが、天照大神に重ねられる倭迹迹日百襲姫命は崇神天皇に御神託を告げており、崇神天皇の姉とはされていないが、これも卑弥呼と男弟の関係を象徴している。つまり、記紀と倭迹迹日百襲姫命の逸話から、倭迹迹日百襲姫命＝天照大神、天照大神＝卑弥呼、倭迹迹日百襲姫命＝卑弥呼という関係が成り立つ。

さて、天岩戸隠れのきっかけとなった最大の事件を引き起こしたのはスサノオである。スサノオは海神であるが、神宮と同じ御紋の住吉大社で祀られているのも海神であり、更に天照大神を象徴する神功皇后も祀られている。スサノ

オは物部氏の主神であり、新羅に渡った海部氏の祖に重ねられ、皮を剥いだ馬を投げ入れたことは、丹波王国の一部あるいはそのものだった“投馬国”を連想させ、海部氏・尾張氏と関係が深いことを暗示している。また、大物主神と同様、スサノオも蛇（八岐大蛇）に関わりがある。倭迹迹日百襲姫命は大物主神＝蛇神と結婚したが、蛇に関わるスサノオによって天照大神は陰部を突き、蛇は男性器の象徴でもあるから、この逸話は蛇神と天照大神の結婚を暗示しており、その天照大神は本来、巫女的な性格である。つまり、スサノオと天照大神の関係は蛇神と天照大神の結婚を暗示し、それは、蛇神とそれに仕える巫女との聖婚に他ならない。そして、倭迹迹日百襲姫命は神憑りとなって御神託を述べたりしており、神に仕える巫女だから、これも日神＝蛇神と巫女との結婚＝聖婚を象徴しているのである。ならば、スサノオにも日神としての性質が隠されていることになる。そうすると、住吉大社では三海神が縦一列にまとまって海神を、その横に日神＝天照大神を象徴する神功皇后を配置することによって「合わせ鏡」を示唆しており、それは両者の性質を併せ持つスサノオに他ならない。

他にも、天日槍の話では、新羅の女の陰部に日光が当たって懐妊し、産んだ赤い玉が阿加流比売神となり、天日槍の妻となった。陰部に日光が当たって懐妊したことは、日神との聖婚を象徴するし、“阿加流＝明”で、日を象徴する。また、類似の丹塗り矢伝説では、三島湊咋の娘、勢夜陀多良比売（セヤダタラヒメ）が川で用を足している時、真っ赤な丹塗り矢が比売の陰処に突き当たった。比売はそれを持ち帰って床の間に置くと、夜になって矢が麗しい男に変わったが、それは大物主神だった。大物主神と勢夜陀多良比売は契りを結び、2人の間に生まれたのが富登多多良伊須須岐比売（ホトタタライススギヒメ）であり、後に神武天皇の皇后となった。三島湊咋は(6)で記したように大山祇神のことで、大山祇神は海部氏・尾張氏の神である。真っ赤な丹塗り矢の“赤”は太陽を、“丹”は不老不死の妙薬“丹生”と“丹後”を、“矢”は男性器を象徴する。ここでは、富登多多良伊須須岐比売がずばり大物主神の妻となり、完全に倭迹迹日百襲姫命に重ねられる。そして、富登多多良伊須須岐比売は神武天皇の皇后、倭迹迹日百襲姫命は孝霊天皇の皇女だが、ここに系図に於ける古代の年代操作が伺える。これは、先の倭迹迹日百襲姫命と崇神天皇の関係についても言える。

これら聖婚の基は、イナンナであることは言うまでもない。イナンナの冥界下りの話が原型となっている。黄泉の国から帰還した禊の場面でイザナギが衣を脱いでいって神々が生まれたが、イナンナは下の世界＝冥界＝黄泉の国に行く途中で衣を脱いでおり、神話とシュメールの真相では、性と往来が「合わせ鏡」で逆になっている。同様に、神話では死んだのがイザナミで黄泉の国に行ったのがイザナギだが、シュメールでは死んだのがドゥムジで冥界に行ったのがイナンナであり、性が「合わせ鏡」となっている。

以上のことから、住吉大社と籠神社の関わりが深いと思われるが、実際にそ

うなのである。それは<籠神社>で記した。“住吉”は実は籠神社の奥宮で祀られている。奥宮本殿裏の磐座主座には豊受大神が祀られており、その御魂は宇迦御魂で亦名が鹽土（シオツチ）老翁＝塩土老翁＝塩椎神、大綿津見神、住吉同体（住吉大社）である。つまり、これら海に関わる神々はいずれも豊受大神なのである。そして、豊受大神＝天照国照彦火明命＝日神だから、やはり海神には日神としての性質が備えられている。

また、磐座主座の後ろは天香語山だが、そこに石碑があり、向かって左から愛宕大神、熊野大神、道祖神となっている。愛宕大神は火に関する神であり、火産靈（ホムスビ）命、迦俱槌（カグツチ）命などとも言われるが、元は火之迦具土（ホノカグツチ）神であり、籠神社の祭神、彦火明命に通じ、“迦具＝カグ＝カゴ＝香語”故に、天香語山の麓にある。そして、熊野大神の亦名が須佐之男神とあり、原型はイナンナである。道祖神は猿田彦と天宇受売命の夫婦神であり、天宇受売命の原型はイナンナだから猿田彦はドゥムジとも見なせるが、天孫降臨の際に天を照らし地を照らしていたから天照国照彦火明命と同一である。カッパーラ的には、夫婦は一心同体と見なせ、双子も同様である。だから、この場合の猿田彦の性質は、天照国照彦火明命＝太陽神ウツと見なした方が妥当だろう。（<日本の真相 3>ではドゥムジが天孫の原型であり、彼とニビルへの旅に付き添ったのがニンギシュジツダ＝トート神で、トート神がヒヒ＝猿としても象徴されることから、ニンギシュジツダを猿田彦と見なした。）そうすると、この石碑はイナンナとウツ（と隠れてドゥムジとニンギシュジツダ）を象徴しているが、中心が熊野大神＝スサノオなので、主神はイナンナとなる。

スサノオが祀られている京都の有名な神社は八坂神社だが、八坂＝弥栄＝ヤーで、スサノオ＝ヤーとなり、ヤーは籠神社の主神だから、実はスサノオも籠神社の主神となる。それは、イナンナが主神となることに対応して矛盾しない。そして、籠神社がある宮津周辺には興味深い地名が多く、北に弥栄町、南西に出雲大社巖分祠がある。

何故、出雲なのかと言え、スサノオ繋がりということだが、更に出雲に関しては興味深い事実がある。1つは大国主神と大物主神の関係である。日本書紀の一書では大物主神は大国主神の別名としている。古事記では次のようになっている。大国主神と共に国造りを行っていた少彦名神が常世国へ去り、大国主神が今後の国造りに悩んでいた時に、海の向こうから光輝いてやって来る神が現れ、大和国の三輪山に自分を祀るよう希望した。大国主神が誰なのか問うと、「我は汝の幸魂（さきみたま）奇魂（くしみたま）なり」と答えたという。大神神社の由緒では、大国主神が自らの和魂を大物主神として祀ったとある。（Wikipedia 参照。）いずれにしても両神は同一、ということであり、これは(4)でも記している。両神の名の違いは“国”と“物”だが、これは“国津神＝最初にヤマトの地を治めていた神は物部氏由来”ということ象徴している。そして、男神・大物主神が“海の向こうから光輝いて”やって来て、国津神である大国主神によって祀られたことは、“海を照らしながらやって来て国をも照らした”ことと同意だから、“海照国照＝天照国照”となり、実は大物主神も籠神社の主神となる。海と天を照らすのは太陽に他ならず、彦＝日子である。“天＝

アメ、アマ”とは“海＝アマ”であり、豊受大神の亦名、天之御中主神は海之御中主神でもあることは<日本の真相 3>で記した。

もう1つは古代出雲の祭祀である。関裕二氏の「出雲大社の暗号（講談社）」に依ると、出雲国風土記では、出雲に於ける大社は杵築大社（現・出雲大社）と熊野大社であり、格は熊野が上とされている。

そして、神魂（かもす）神社は熊野大社の遥拝所的位置付けである。神魂神社は出雲国府に近い古代出雲の中心地であり、社伝では天穂日命（アメノホヒノミコト）の子孫が出雲国造（こくそう）家として25代まで奉仕したという。出雲国造家は現在、出雲大社の千家（センゲ）宮司家に替わられたが、現在でも国造家の代替わりの際に行われる「神火相続式」「古伝新嘗祭」では、明治初年までは神魂神社に参向して行われていたという。（Wikipedia 参照。）

天穂日命は天照大神とスサノオが誓約（うけい）をした際、スサノオが噛み砕いた天照大神の珠から生まれた五男神の中の一柱で、出雲の国譲りの際に第一の使者として派遣されたが、大国主神に媚びて、3年間復命しなかった神である。つまり、大国主神＝国津神＝海部氏・尾張氏側についており、“穂”は稲穂だから、“穂日”で豊受大神を暗示している。スサノオと珠も、海部氏を暗示している。

出雲国造家が当初に祀っていたのは出雲杵築大社でも神魂神社でもなく、意宇（おう）川上流の熊野大社であったという。798年に意宇から杵築に遷されたのが、現在の出雲大社である。つまり、籠神社奥宮の重要な磐座主座の後ろ＝天香語山の麓にある石碑に書かれて祀られている熊野大神こそが、出雲の根源だということである。そして、“香語＝カゴ、カグ、カガ”は古代朝鮮語で鉾山の“鉾”を意味するので、鉾石から作られる剣が象徴となり、出雲と尾張で草薙神剣という共通の剣が登場するのである。剣は日のように輝くから、“香語＝輝き”でもある。なお、少彦名神が常世国へ去ったのは熊野からと言われており、一般的には紀伊半島の熊野と考えられているが、熊野はこのように出雲にもあり、その熊野の根源は籠神社である。（紀伊の熊野も海部氏・尾張氏と同族の九鬼（クカミ）氏である。）そして、籠神社の海の奥宮、冠島と杳島は常世島であり、少彦名神が常世国へ去った根源の話と思われる。

以上のような“真相”が、秦氏によって現在のよう形に変えられ、宮司家も替えられたということ、出雲は暗示している。そして、この意宇周辺には意宇六社があり、かつての意宇郡（現在の松江市、安来市、八束郡、能義郡）に鎮座する神社のうちの熊野大社、真名井神社、六所神社、八重垣神社、神魂神社、揖屋（いや）神社の6社を指す。この6社を参拝することが六社参りと呼ばれている。（Wikipedia 参照。）この中に、はっきりと真名井神社の名が見られ、籠神社との関係が暗示されている。

このように、籠神社から豊受大神が外宮に遷されたのと同様に、出雲でも熊野大社が杵築大社へと遷されたのである。出雲で特徴的なのは、10月を神無月と言うが、出雲では神在月と言って、他とは逆である。神宮では最も重要な新嘗祭が10月に行われるから、本来は神無月ではあり得ない。つまり「合わせ鏡」

である。他にも、「神火相続式」は“火継ぎの神事”だが、“火”は“日”でもあり、“火”は夜を照らし、“日”は昼を照らすから、出雲の“火継ぎの神事”と皇室の“日継ぎの神事”は「合わせ鏡」になっているし、出雲大社の注連縄は他の神社とは逆に巻かれている。

また、拝殿は南向きだが、その中の神座は実は西向きで、参拝者の方を向いていない。これにはいろいろな説が言われているが、良く考えると、住吉大社と同じ向きである。住吉では明らかに西を向いているが、出雲ではそれが隠されているわけである。住吉が西向きの理由は先にも少々述べたが、実は住吉はスサノオを祀り、本来の出雲は熊野大社で、籠神社の極秘伝から熊野大神＝スサノオである。そうすると、“裏で”スサノオを祀る両社の神座が西を向いていることは、スサノオが檀国＝新羅に関わりが深いことを象徴しているのである。住吉では新羅に関わる神功皇后が祀られ、そのことを端的に表している。ただし、新羅を征伐しに行ったことにされ、真相は隠されている。

出雲大社の御紋は次に示す亀甲紋だが、神宮と住吉大社の花菱が物部氏の象徴の亀甲紋に囲まれており、以上のような関係を暗示している。



このように、卑弥呼、トヨ、天照大神、スサノオが密接に関わり合い、更にシュメールが関わって、古代史の複雑な謎を解く鍵を示唆している。

(11) 尾張氏の没落

海部宮司との対談では驚きの真実が明らかとなったが、こちらとしては、同族の尾張氏と話しができれば好都合である。そこで、このような話を熱田神宮や一宮の真清田神社で伺えないか訪ねたところ、それは不可能だ、と言われた。つまり、現神職はすべて中臣（藤原）系に抑えられているからである。こちらとしては、神職でなくとも氏子などでもよろしいです、と申し上げたところ、熱田神宮文庫の飛岡研究員を紹介頂けた。

この研究員は尾張氏の系図から海部氏系図に辿り着き、それをまとめていたらしく、発刊された熱田神宮の冊子を見せて頂けた。ところが、3巻発刊された時点で熱田宮司からストップが掛けられ、以後、停止状態である。それほど、尾張氏・海部氏の系図が明らかにされることはまずらしい。

6/5の熱田例祭の日、この研究員に会うことができた。以前、熱田神宮主催の講演会で「熱田宮司家」について講演された方であった。籠神社の海部宮司から紹介され、物部氏について伺いたい旨を申し出ると、実は海部宮司との面識は無く、調べたものをお送りしただけ、ということであった。それに、物部氏といっても膨大で、どの程度の資料を読んで理解しているのかも解らないし、

何を話して良いのかも解らない、と言われた。そして、熱田の文庫には御神宝に関するもの以外、特殊な資料は無く、自分たちも鶴舞図書館に調べに行くぐらいです、と言われた。その後、文庫に通され、資料をざっと眺めても、確かに普通に図書館にあるようなものばかりだった。また、物部氏に関する資料としては古事記、日本書紀、先代旧事本記、新撰姓氏録がほとんどすべてである、とのこと。もし、裏事情に関する話ができれば、こちらの資料もお渡しするよう準備して行っただが、それは無駄に終わったわけである。

そこで、最後に1つだけ質問した。現在、尾張氏の直系はどうなっているのか、と。氏の講演会の内容通り、熱田宮司だった尾張氏は、平安時代に中臣（藤原）系に取って代わられた。それが、現在も神職をされている千秋家である。直系は田島氏と馬場氏であるが、田島氏は大高に転居し、現在、熱田の神職ではない。馬場氏も神職ではなく、いずれも入り婿で、神職を世襲しなかったとのこと。つまり、男系直系の尾張氏は没落したのである！（尾張地区にいる）傍系は枝分かれが多く、どうなっているのか解りにくい、とのことであるが、いずれも一般人であることに変わりはない。そして、白鳥古墳や断夫山古墳も熱田ではなく、名古屋市の管轄だそう。ここまで抑圧されているとは…。（断夫山古墳は未発掘だそうである。）

海部宮司も、実は宇佐八幡宮（現・宇佐神宮）からの入り婿である。だから、王族としての海部氏・尾張氏の男系直系は、完全に断たれたのである。なお、熊野の九鬼氏は尾張氏の傍系なので、こちらがずっと直系の男系で継承されている可能性はある。

(12) 元初の神の秘密

海部宮司は最後に、元初（通常は“原初”だろうが、ここでは海部毅定氏の著書に従って“元初”とする）の神について、あることを強調された。それは、籠神社で祭られている祭神は日神（天照大神）と月神（豊受大神）であり、月神は水神でもあるヤーであり、日と月は交互に変換し得る、というのである。そして、シュメールの太陽神ウツはヤーの息子である、と。特に、日と月は交互に変換し得ることを強調されていた。

豊受大神は真名井の水に関わり水徳だから陰徳、天照大神は日神で火徳だから陽徳である。しかし、豊受大神を根源神の天之御中主神として崇め祀るならば、天神で陽徳となり、対する天照大神は地祇の第一の大神で陰徳となる。故に、どちらも陽となり陰となり得る、ということである。また、(10)で述べた住吉大社との関係から豊受大神の亦名が海神であり、豊受大神＝天照国照彦火明命＝日神だから、海神（水）には日神としての性質が備えられている。

シュメールで考えると、ヤーはシュメールの主神で地球の主エンキであることは言うまでも無く、エンキは月神でもある。しかし、エンキは太陽神ではないので、交互に交換し得ることはない。それに、ウツは月神ナンナル（シン）の息子であり、その父はエンリルで、エンキはエンリルの兄だから、エンキは

ウツの大伯父となり、ウツはヤーの息子とはならない。そうすると、これはマルドゥクによるバビロニア神話・伝承の影響が伺われる。

マルドゥクはすべての神に君臨する“神”となることを宣言した。「私はエンリルとして支配権を持ち、法令を司り、ニヌルタとして鋏と戦闘を司る。イシュクルとして稲妻と雷を司り、ナンナルとして夜を照らし、ウツとして昼を照らし、ネルガルとして冥界を統治する。ギビルとして黄金の奥深さを知っており、どこから銅と銀が産出するのか、私が発見した。ニンギシュジッタとして数とその数え方を私は命じ、天は私の栄光を示している！」と。これならば、日にも月にもなれるので、マルドゥクがバビロン統治後、このような“誤解”が発生したのである。だから、バビロニア神話・伝承の影響があるならば、それはマルドゥクによる改竄のため、真相には絶対に到達できません、とだけ申し上げ、対談を終えた。海部宮司はイナンナの時のように、その通り、とはおっしゃらなかったのも、マルドゥクによる真相改竄の件はご存じないのかも知れない。そこで、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」（ゼカリア・シッチン、徳間書店）をお送りした。

しかし、前述の日神＝蛇神と巫女との聖婚に於いて、海神スサノオにも日神としての性質が隠されており、物部氏を象徴するスサノオの原型はイナンナで、イナンナは太陽神ウツと双子で言わば一心同体だから、カッパーラ的には同一と見なせるので、海神（水）＝日神となり得る。

また、イザナギが禊で左目を洗った時に生まれた神が天照大神、右目の時に月読命、鼻の時にスサノオが生まれた。イザナギの顔がこちら側を向いていれば、中心がスサノオ、向かって右が天照大神、向かって左が月読命となる。スサノオの原型はイナンナだから、これはイナンナが中心、つまり、ヤマトの根幹は海部氏・尾張氏によってイナンナを中心にして行われた、ということを示している。天照大神は太陽神としての性質で、ウツが相当する。月は2人の父ナンナルの象徴だが、ナンナルは慈悲深い神だったという以外、特徴が無い。その月の象徴の根源は地球の主で海神のエンキであり、海神ヤーとしての性質をイナンナにプラスしてスサノオとなるから、月読命はエンキと見なすのが妥当である。（〈神々の真相4〉ではイナンナとウツの関係から月読命をドゥムジとしたが、月読命はほとんど登場しないこと、海神としての性質が必要なこと、更に地球の根源神という性質を含めるためにも、エンキの方がより妥当だろう。）そして、「生命の樹」の3本柱は互いに入れ換えが可能である。（インダス文明ではブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの位置が本来の位置から移動している場合があることは〈神々の真相3〉に記したが、それと同様である。）だから、日神が海神（水）にもなり得る。

他に、考えようによっては一柱、可能な「神」がいる。それはニンギシュジッタである。ニンギシュジッタは父エンキと共に人類を創成し、ピラミッドやストーンヘンジを造り、マヤ文明を創成し、謎を解く鍵としてカッパーラを創り上げた。ニンギシュジッタはマルドゥクがいない一時期、エジプトで崇高な神として崇められた。それは当然、太陽神としての唯一神である。また、マヤ

では羽毛のある白い蛇、輝く蛇＝ケツアルコアトルとして崇められ、また戻って来る（＝復活と見なせる）、と言って去って行った。だから、エンキが月神（豊受大神）で水神でもあるヤーならば、光り輝くニンギシュジツダを日神（本来の天照大神＝天照国照彦天明命）と見なすことができる。特に、王位継承数字に着目すると、シュメールの60進法は大神アヌを象徴するように、ニンギシュジツダが創成したマヤ文明の20進法は太陽神ウツを象徴する。だから、数字のカッパーラとして、太陽神を象徴する“20”はマヤ文明の創造主ニンギシュジツダをも象徴すると言える。血統の濃さとニビルの法故に、エンキの息子たち、ニンギシュジツダやマルドゥク、ドウムジなどには王位継承数字は付いていないが、カッパーラの考案者ニンギシュジツダにより、王位継承数字は別の意味を暗示できるようになったのである。（例えば、ユダは銀貨30枚でイエスを裏切ったが、“銀”は血統としての傍系を暗示し、エンキの王位継承数字が40なので、これはエンキの長男マルドゥクを暗示することは<神々の真相5>で記した。本来の“30”はウツの父でエンリルの長男ナンナルを示す。）

地球の主エンキが人類創成や文明創成、カッパーラ考案などを計画していても、実質的に行ったのはニンギシュジツダであることからすれば、“日と月は交互に変換し得る”と言えるだろう。その象徴が海部氏・尾張氏の主神である大物主神である。大物主神は蛇神で、エンキとニンギシュジツダの象徴は蛇である。そして、男神・大物主神が“海の向こうから光輝いて”やって来て、国津神である大国主神によって祀られたことは、“海を照らしながらやって来て国をも照らした”ことと同意だから“海照国照＝天照国照”となり、海と天を照らすのは太陽に他ならず、海神と太陽神の両方の性質があることは(10)で記した。また、“天照国照彦＝天を照らし国をも照らす男神”の性質は猿田彦のものでもあり、猿田彦にはニンギシュジツダの象徴も重なることは、(10)と<日本の真相3>で記した。そして、前述のように、ニンギシュジツダには太陽神としての性質も重ねられる。つまり、大物主神にはエンキ＝海（水）神・月神・蛇神・主神とニンギシュジツダ＝太陽神・蛇神の象徴が1つにされているので、“日と月は交互に変換し得る”と言える。

大地に打ち込まれる柱は神殿の原型で、大地にそびえ立つ御神体の山と共に神が降臨する依り代である。神は天から降臨するので“陽”となり、それを受ける依り代は“陰”となる。そして、柱はイナンナを象徴し、天神としての根源、天照国照彦が太陽神ウツの象徴ならば、心御柱と太陽神で陰陽を成す。あるいは、ニンギシュジツダの象徴ならば、柱（陰）に巻きつく蛇（陽）となり、天照国照彦＝大物主神では山（陰）に住まう蛇神（陽）となり、陰陽を成す。

(13) 対談で生じた疑問

今回の対談は、何と、2時間半弱にも及んだ。海部宮司には、感謝の念に堪えない。今回の対談で、物部氏と秦氏の真相は飛鳥氏の言っていることだけではかなり不十分だということが判明した。特に、秦氏についてはかなりの誤解があることが判明した。（広隆寺など。）また、海部宮司は対談の最初の方で、飛

鳥氏の言っていることは半分ぐらい合っているだけで、売るために、あるいは自分（モルモン教）にとって都合の良いように書かれており、心御柱をキリストの十字架などにしている、と言われた。そこで、大いなる疑問が生じた。シュメールの話は確実だが、〈神々の真相 5〉でイエスの真相を考察したものの、イエスはやはり存在しなかったのではないか、シュメールの話に基づき十字架などをこしらえただけではないのか、という疑念である。更に、この資料をまとめている最中、天皇一世一代の秘儀、大嘗祭について再考しなければならなくなった。それは、神社新報第 3049 号（平成 22 年 11 月 22 日発行）の記事である。〈日本の真相〉と今回の(5)では大嘗祭について、飛鳥説を基に以下のように記した。

“大嘗祭とは、新しく天皇となる儀式であり、即位の礼が表向きの儀式に対して、大嘗祭は天皇家秘伝の裏の儀式である。毎年、勤労感謝の日に行われているのが新嘗祭であり、その年の収穫に感謝する儀式であるが、大嘗祭はその特別なものである。

大嘗祭では、まず天皇となる前の皇太子が禊ぎ＝バプテスマを行う。その後、僊服という白装束、すなわち“死に装束”を着用して儀式を進行する。そして、天照大神と共に食事をし、御襖と言われる寝床に横になり、また起き上がる。

すなわち、大嘗祭とは“最後の晩餐”“死”“復活”を再現することによりイエス・キリストの霊と一体となり、正式に王権を継承する儀式である！そして、天照大神は男神だから、天皇は男性でなければならないのであり、これこそが“男系万世一系”の真相である。”

どうも、このようないわゆる“真床御襖の秘儀”は無いらしい。以下、神社新報第 3049 号の國學院大學教授・岡田莊司氏に依る詳しい考察を紹介する。

そもそも、この秘儀説は、昭和の大嘗祭の際に折口信夫氏が神話と照らし合わせ、「國學院雑誌」の誌上で立てた説が基となっている。その神話の場面は、ニニギが高千穂に降臨する際、真床御襖に覆われて（あるいは着せられて）いたことである。そして、大嘗祭を行う大嘗殿の内陣中央には八重畳の上に白の御単・御襖が置かれた神座が用意されることから、特に昭和 40～50 年代の超能力やオカルトブームで秘儀説の注目度が高まった。しかし、折口氏の師である柳田国男氏は、そのような説を認めていない。

平安時代など、天皇が幼い場合は天皇に代わって摂政がいろいろ執り行うが、大嘗祭も例外ではなかった。そうすると、撰関家は大嘗祭の式次第についても知っておかねばならず、知らなければ撰関家としての資格が無い、とまで言われ、鎌倉時代には摂政を解任されることもあったという。

例えば、撰関家の二条良基が記した「永和度大嘗会記」には“神膳の次第は人の知らぬ見ぬ事なれば、しるし申すに及ばず、天神地祇を天子の手づから祭らせ給て、神供を供え給ふとぞ受け給はる”としている。つまり、天皇が御親（みづか）ら天神地祇をお祭りし、神饌をお供えする。そのお供えの仕方は、天皇のみが知ることであり、ということである。

神祇官で亀の甲羅を焼いて占いをし、神官家として発展した卜部氏が記した「宮主秘事口伝」にも“神饌供進、第一之大事也、秘事也”とあり、神饌の供進が最も重要で秘儀である、と言っている。

関白家・一条兼良は「代始和抄（だいはじめわしょう）」で“卯日は神膳を供せらる、其儀ことなる重事たるによりて委しるすに及ばず”とし、神饌が最重要で詳しく記すことができないとしている。そして、天皇しか知ってはならない儀式作法、しるすに及ばずという作法は、御食事を差し上げるための丁重な順番と詳細な作法のことである。また、“嘗殿と云は板敷を敷かず筵（むしろ）を敷く”とあり、大嘗殿は素朴で、神膳を供する所、御食事を差し上げる所である、と書いてある。

吉田神道を創始した吉田兼俱（カネトモ）も「代始和抄」の追文で“神膳御供進の次第は天子の御灌頂一朝の重事なれば、事々に秘事口伝にあらずと云事なし”とし、大嘗祭に於ける神膳の供進の次第は重事であり、これら1つ1つが秘事口伝としている。そして、“主上手づから親ら盛り給ふに、ことさら御口伝のある事とも、深き子細あり”とも記しており、やはり天皇が御親ら神饌をお手盛りされること自体が秘儀なのである。しかし、真床御襖に関する記述は一切無い。

また、大嘗祭の具体的な内容は、宮内庁書陵部が平成元年3月に刊行した「図書寮叢刊」に採録され、初めて活字で公開された「大嘗会卯日御記」からも伺える。例えば、4歳の崇徳天皇の大嘗祭について摂政・藤原忠通が書いた記録に神膳供進の式次第が詳しく出てくるが、やはり真床御襖の儀式については一切記されていない。

大嘗祭では天照大神と天神地祇をお迎えすると思われるが、天照大神だけは天皇が御親らお祭りする神だった。神膳を進める所作では「おお」と称唯（いしょう）する応答を、天皇御親らが行われる。「江家（ごうけ）次第」には“天皇頗（すこぶ）る低頭す、拍手称唯す”とあり、「江記（ごうき）」には“天皇拍手少しく低頭す、肅敬す、又称唯あるべきかな”などの言葉が注記で入っている。称唯とは、宮中で天皇に召された官人が口を覆って「おお」と応答することで、下位の者が上位の者に対して行う服従の作法である。（本来は“しょうい”が正しい読みだが、“いしょう”と転倒して読むのは、“讓位”と音が似ているので、それを避けたものと言われている。）だから、天皇が臣下に対して行うことはあり得ない。天皇が行う場合は唯一、皇祖の天照大神に対してのみである。天皇は神迎えを行い、神に従う作法をするのが、天皇の神への真摯な作法である。天皇御親らが神になる作法ではなく、とにもかくにも丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしするのである。これこそが、天皇一世一代の大嘗祭の秘儀であり、現在の神道祭祀の作法に通じているのである。

このように、岡田教授は述べられている。すなわち、大嘗祭の秘儀とは、決して間違えることの許されない神饌供進の手順に他ならず、それ以上のものでもそれ以下のものでもない、ということであり、“真床御襖の秘儀”は存在しないのである。大嘗祭を取り仕切っているとされるのは飛鳥氏に依ると下鴨神社だが、過去には摂関家などが実際に行っていたこともあるのである。

真床御襖については一切触れられていないが、これは、その部分だけ隠しておく、という意味かもしれない。しかし、撰閲家の式次第として記されていない以上、やはりその部分には携わらない、ということであろう。さもなくば、天皇が幼い場合、撰閲家が大嘗祭を完遂することができないことを意味する。つまり、真床御襖は神が降臨する場、神座（上座に通じる）であり、神ではない天皇は入ってはならない、触れてはならない場所なのである。だから、真床御襖に於ける秘儀の記述が無いと考えるのが適切である。

よって、飛鳥氏が言うところの大嘗祭の秘儀は、この折口説を基にした、飛鳥氏にとって都合の良い飛鳥オリジナル説と言える。

大嘗祭は東の悠紀（ゆき）殿と西の主基（すき）殿というまったく同じ大嘗殿で同じように行われる。仮に、真床御襖が折口説のようなニニギの天孫降臨の秘儀の場である場合、1回だけ行えば良く、2回も必要無い。同様に、飛鳥説の“最後の晚餐”“死”“復活”の再現ならば、これも1回だけで良い。新約と旧約の「合わせ鏡」と言ってみても、新約のイエスは復活しているが、旧約のヤハウエは死んでいないし復活もしていないので矛盾する。また、神饌を神に供した後、天皇は祝詞を奏上して神と直会（なおらい）を行う。すなわち、供した神饌を天皇御親ら聞こし召す。これは、“秘儀”が無事終了した後に成される御食事であり、現在の神道祭祀でも行われるが、御食事されてから“秘儀”を行うわけではない。つまり、“最後の晚餐→死→復活”という順を再現しているわけではない。

大嘗祭は確かに天皇一世一代の秘儀ではあるが、その本質は、新しく王になった天皇が、新穀を神に感謝すると同時に、丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしする特別な新嘗祭なのであり、それ以上の秘儀ではないのである。

また、悠紀殿が優先されるが（以下も岡田教授説），“悠紀”は神宮の神嘗祭で行われる由貴夕大御饌（ゆきのゆうべのおおみけ）、由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ）の“由貴”に由来し、由貴とは“齋忌（ゆき）＝最も清浄で立派な神饌”という意味である。そして、主基殿の“主”とは“主体”ではなく、“次のもの”という意味故に、悠紀殿が優先される。神嘗祭は神宮の正月とも言われる最も重要な御神事であり、これは神様に新穀をお供えして感謝する御神事である。神宮が行う場合が神嘗祭、天皇が御親ら宮中で行う場合が新嘗祭であり、特別な神嘗祭が式年遷宮、特別な新嘗祭が大嘗祭である。そして、悠紀殿は午後10時、主基殿は午前2時に行われるが、これは由貴夕大御饌が午後10時、由貴朝大御饌が午前2時に行われることに対応している。つまり、大嘗祭の儀式は名称、内容共に神宮の神嘗祭に対応しているのであり、これからも、大嘗祭は神への感謝と、丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしする特別な新嘗祭と言える。また、神宮との対応という点では、悠紀殿はすべて優先される外宮に、主基殿は内宮に対応する。これは、悠紀殿の千木は外宮と同じ外削ぎ、主基殿は内宮と同じ内削ぎであることから、裏付けられる。

<日本の真相3>では、神宮では先に外宮、後から重要な内宮での御神事が執り行われることから、重要なのは後から御神事が執り行われる主基殿とした

が、これは今回の資料から、誤りと言える。“主”という文字の象徴を誤っていたためである。外宮が海部氏＝元々の皇統の象徴であり、それ故に外宮先祭として優先されるならば、外宮に対応する悠紀殿もまた、主基殿に対して悠紀殿先祭となるのである。

更に、(5)では大嘗祭で陛下が着られた服を亀服と見なしていたが、それもどうやら誤りのようである。大嘗祭では大変な潔斎が成されるが、当日は大嘗宮（悠紀殿、主基殿）に入られる前に、天皇は沐浴を行う。沐浴用の建物である廻立殿に入られた天皇は、天の羽衣を身に付けたまま湯槽に入り、湯の中に衣を脱ぎ捨てて出る。生の明衣を着用して水を拭い、斎服に着替えて大嘗宮に向かう。これを、小忌御湯と言う。悠紀殿と主基殿で二度儀式があるので、廻立殿での入浴も2回、天の羽衣、生の明衣も2着ずつ用意される。

これまでは、大嘗宮に入る前に着る服が亀服だと思っていたのだが、それは“斎服”となっており、どうやら別物のようである。そこで、亀服について調査すると、興味深い事実が判明した。大嘗祭については様々な人がそれぞれ説を唱え、錯綜しているが、以下、亀服を献上している三木家第28代当主の三木信夫氏がまとめた内容なので、信憑性は極めて高い。

(http://park17.wakwak.com/~happyend/anonamikaze/awa16/a16_03.html 参照。)

“大嘗祭の中心行事は大嘗宮の儀で、亀服は入目籠に入れ、繪服（にぎたえ）は入細目籠に入れて神衣（かむそ）として悠紀・主基の神座に祀り、その他の神饌を供え、悠紀・主基の田の新穀をもって天照大神及び天神地祇を奉祭され、自らも食する等、天子の威霊を体得する為の神事の儀式です。

大宝律令の神祇令に「凡そ踐祚の日、中臣は天神の寿詞（よごと）を奏せ、忌部は神璽鏡剣（しんじのかがみつるぎ）を上（たてまつ）れ」とあるように、京師の忌部は大嘗祭の都度、皇位の印である鏡と剣を作り奉っていたのですが、1036年、第69代・後朱雀天皇を最後に廃止となり、中臣の寿詞だけとなります。本来の八咫鏡は伊勢神宮で祀られ、天叢雲剣は熱田神宮のご神体として祀られています。

亀服とは、天皇が即位後初めて行う一世一度の大嘗祭においてのみ使用する、阿波忌部が織りあげた麻布の神服（かむみそ）を言うのです。亀服は天皇自身が着るのではなくて、天皇が神衣として最も神聖なものとして、天照大神にお供えする物です。上古より阿波忌部の氏人が製作するから亀服なので、忌部以外の人達が作成すれば、それはただの麻織物なのです。現在は4反ですが、昔はもう少し少なかった様です。”

亀服は天皇自身が着るのではなく、神にお供えするものだったのである。だから、荒魂・和魂に対応するように、亀服と繪服が存在するのである。そこで、広隆寺について調べてみると（Wikipedia 参照）、陛下が即位式に召された黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）を着せる、ということである。この像は広隆寺の本尊であり、聖徳太子が秦河勝に仏像を賜った時の年齢である33歳の時の像とされており、下着姿の像の上に実物の着物を着せて安置されているのである。

秘仏なので普段は非公開だが、11月22日のみ開帳される。

よって、広隆寺の聖徳太子像に着せられて、海部氏・尾張氏が王族＝本来の皇統だったことを今でも認められていることの象徴となるのは僂服ではなく、陛下が即位式に召された黄櫨染御袍である。（おそらく、海部宮司は即位式を含めた意味で大嘗祭と言われたのであろう。）この未公開の秘儀は、「合わせ鏡」で大嘗祭とは逆の順序関係になっている。なお、33歳というのは「生命の樹」に於ける隠されたセフィラ“ダアト”も含めたセフィロトとパスの数の合計数である。

果たして、本当にこれだけなのだろうか。大嘗祭は11月の卯の日に行われ、それが前述の“卯日”として記されている。旧暦だと冬至前後に相当する。冬至と言え、太陽が“復活”する日であり、わざわざその前後に大嘗祭を合わせていることは、それなりの意味が隠されている。しかし、イエスの“復活”に限られた話ではない。イエスの誕生日が冬至付近に移動させられたのは、古代ミトラス神の復活信仰などのように、太古から存在した復活信仰の影響であり、基はイナンナである。大嘗祭の場合、新たな天皇の誕生を“天皇の復活”と見なし、神のような永遠の命（死、復活の繰り返し）を得るということだろう。つまり、未来永劫、十六弁八重表菊紋で象徴される天皇が受け継がれていく、ということである。このように考えれば、わざわざイエスと関連付ける必要は無い。そして、ここでも復活神と十六弁八重表菊紋の原型はイナンナである。他にも、以前に籠神社に関わることでイエスを暗示するとしていたことがある。それは、海部宮司が詠まれた歌が書かれている奥宮の立て札だが、その意味は<籠神社>で記した。

二千五百年（ふたちいほ） 鎮まる神の神はかり

百（もも）の御生れの 時ぞ近づく （平成8年8月8日）

“皇紀にして2500年以上が経過したが、御鎮座される神様の御計画通り、いよいよ天照大神＝イエスが御降臨される時が近い。”

“平成8年8月8日”は“888”の並びであり、これはギリシャ語で“キリスト”を意味する。だから、この歌はイエスの降臨が近付いているとした。では、何故“888”がイエスを象徴するのか、1つずつの“8”に分解して意味を良く考えてみる。1つはニビルの象徴としての八角星、1つはイエスの原型となったイナンナの星・金星を象徴する八角星、そして、もう1つはイエスが誕生した時に天空に輝いた八角形のベツレヘムの星（実はニビル）である。つまり、人物（神）ではアヌ、イナンナ、イエスに対応するから、イエスを象徴しているのである。だが、エンキとニンギシュジッダの象徴である2匹の絡み合う蛇が“8”の字を形成しているので、“8”の象徴の1つはエンキあるいはニンギシュジッダとも見なせるから、必ずしもイエスが必要というわけではない。アヌーエンキーニンギシュジッダでも良いし、アヌーエンキーイナンナ、エンキーニンギシュジッダーイナンナなどでも良いわけである。そうすると、ギリシャ語的にはイエスを象徴していても、他の見方として“降臨する神々”という広い見方

が可能である。特に、海部宮司はイナンナとヤー、太陽神ウツを重要視されており、前述のようなスサノオ、天照大神、月読命の関係からも、復活と不老不死の原型となったイナンナ、彼女と双子の太陽神ウツ、そして地球の主で海神ヤーであるエンキという解釈が妥当であろう。

しかし、神宮に於ける心御柱の正中外しや伊雑宮が将来、伊勢の本宮として復活する話などは、とても飛鳥氏が推論で書けるようなレベルの話ではなく、極めて辻褄が合っている。また、今回の様々な考察でも、イエスを象徴していると思えないこともある。そう考えると、やはり秦氏によってキリスト教は導入されたのだろう。何よりも、政治権力だけの強奪ならば、海部氏・尾張氏がここまで抑圧されることはない。太古は宗教が最も重要だったから、宗教的な面で最後まで抵抗していたと考えるべきである。そして、イエスの御神体があったからこそ、海部氏・尾張氏は最終的に妥協したのだろう。ただし、その背後にはシュメールの「神々」の存在を知っていたからこそ。

さて、海部毅定氏の著書に依ると、系図は意図的な改竄が成されているという。それは、多次元同時存在の法則の本質に関わる問題であり、これまでに示してきた“同一”というカラクリを解くものである。これなども、飛鳥氏が行っているような、すべてが同一、という性質のものではないのである。更に、女帝について詳細に調査すると、驚くべき内容が明らかになってきた。それは、皇統と天照大神＝神宮の本質に関わる問題であり、外宮先祭や天照大神が女神とされてしまった本当の意味もそこに隠されているようである。

今年、平城遷都 1300 年で奈良に注目が集まったが、纏向のある奈良盆地には無数の古墳と神社群が点在し、これらは適当に散らばっているのではなく、“適切”に配置されており、ヤマトに於ける祭祀の意味を暗示していることも判明してきた。

今回、これらも合わせてまとめる予定だったが、あまりにも膨大になるので、次回に「日本の真相 5」としてまとめることとする。そこでは、卑弥呼・トヨと天照大神の関係、系図（皇統）の改竄手法が明らかとなる。

参考著書：

- ・海部毅定著、「元初の最高神と大和朝廷の元始」、桜楓社。
- ・ゼカリヤ・シッチン著、竹内誓訳、「神々・創造主の正体」、徳間書店。
- ・荊木美行著、「古代天皇系図の世界」、燃焼社。
- ・金久与市著、「古代海部氏の系図」、学生社。
- ・熱田神宮文書、熱田神宮宮庁。
- ・安本美典著、「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎」、勉誠出版。
- ・関裕二著、「「女帝」誕生の謎」、講談社。
- ・関裕二著、「出雲大社の暗号」、講談社。
- ・井沢元彦著、「万世一系／日本建国の秘密の巻」、徳間書店。
- ・井沢元彦著、「ビジュアル版 逆説の日本史 2 古代編①」、小学館。

初版：2011年5月
改定2版：2012年7月
改定3版：2012年12月